特別史跡　西都原古墳群発掘調査報告書　第14集

西 都 原 2 6 5 号 墳

Saitobaru Mound No.265

2019

宮崎県教育委員会

特別史跡　西都原古墳群発掘調査報告書　第14集

西 都 原 2 6 5 号 墳

Saitobaru Mound No.265

2019

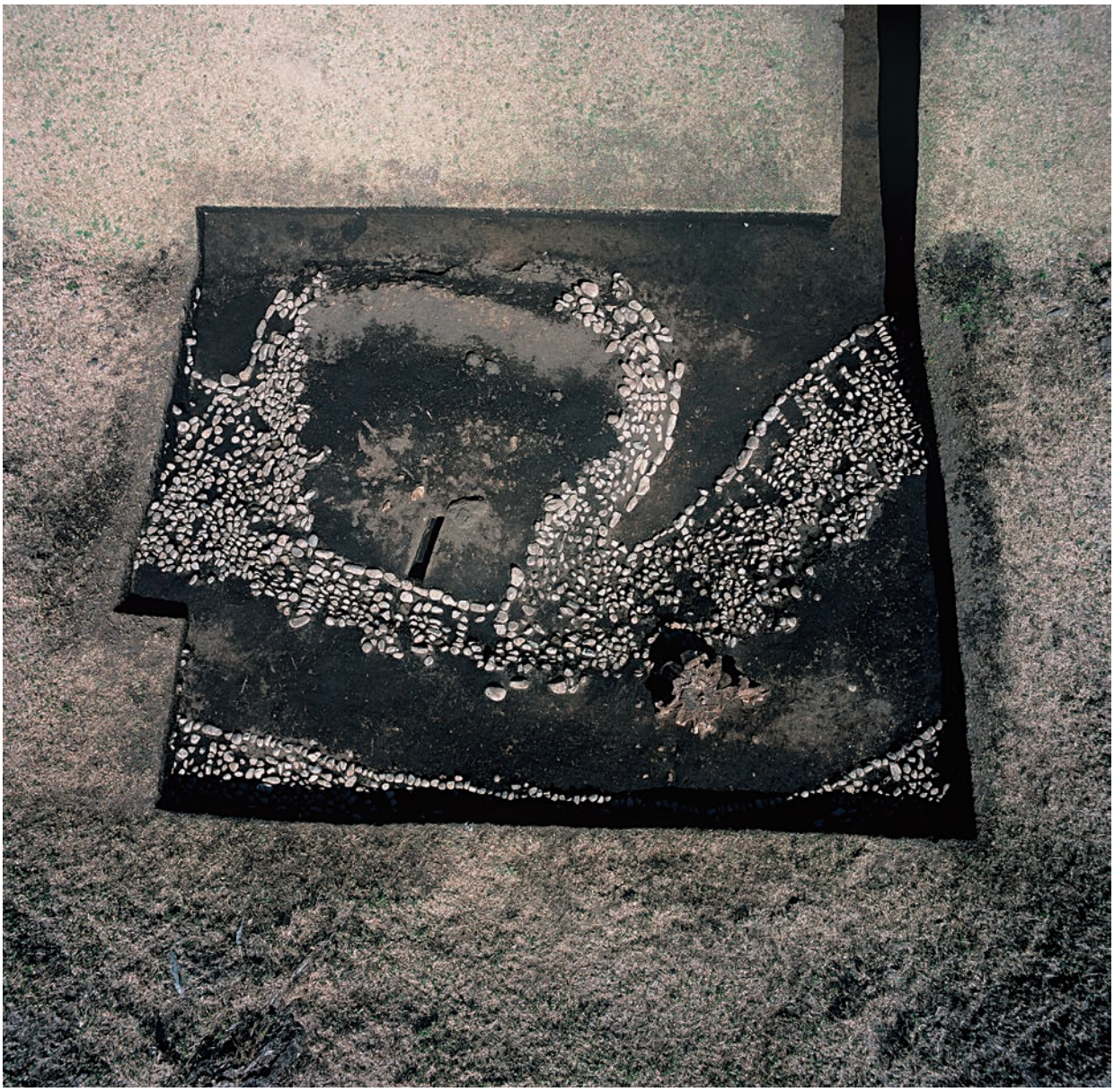
宮崎県教育委員会

西都原台地北縁部に位置する西都原265号墳（北西から撮影）

特別史跡西都原古墳群は、宮崎県のほぼ中央を東流する一ツ瀬川の中流右岸、標高60～80ｍの通称「西都原台地」を中心に320基以上の古墳が築造され、そのうちの32基が前方後円墳である。265号墳は、西都原台地北部の第３支群に位置する唯一の前方後円墳で、台地北縁の段丘崖面に平行するように主軸をとっている。後円部の先に見える墓地の一帯は新立遺跡で、墓地造成工事に伴い発掘調査が実施され、弥生時代終末期から古墳時代前期にかけて営まれた集落が見つかっている。

西都原265号墳と第３支群（東から撮影）

第３支群は西都原古墳群では最も北に位置する支群で、画面左下の駐車場付近から画面中央付近に入り込むコの字状の谷地形を境界としてＡ群（左側）とＢ群（右側）とに細別される。265号墳が含まれるＢ群は前方後円墳１基（265号墳）と円墳35基で構成される。Ａ群は円墳52基で構成されるが、画面左端に写る111号墳は二段に築成され直径は約30mと支群内最大規模を誇り、短甲３領をはじめ豊富な副葬品が出土した４号地下式横穴墓を主体部とする。



西都原265号墳左くびれ部で見つかった造り出し（写真上が北東方向）

地中レーダー探査結果等から推定されていた左くびれ部の造り出しについては、面的な調査を実施して規模や構造を確認した。後世の撹乱で先端部が欠損しているが、残存状態は良好であった。くびれ部よりもやや前方部寄りに位置し、テラス面よりもやや下がった部分に取り付いている。先端部で鬼界アカホヤ火山灰（K-Ah）の堆積が確認できたため、墳丘一段目と同様に削り出した地山をベースとして盛土・葺石が施されていることが判明した。

例　言

1　本書は、文化庁の補助を受け、宮崎県教育委員会が平成26～28年度に実施した西都原265号墳の発掘調査報告書である。
2　西都原265号墳の発掘調査は、宮崎県教育委員会（宮崎県立西都原考古博物館）が実施し、平成28年度の調査では、大阪大谷大学の協力を得た。
3　現地における図面作成ならびに写真撮影は、堀田孝博・藤木聡（宮崎県立西都原考古博物館）が行い、平成28年度の調査の一部について犬木努氏（大阪大谷大学教授）の指導のもと、大阪大谷大学の学生が行った。
4　現地調査のうち、以下のものについては業務委託した。
　墳丘測量・主軸設定　‥‥‥　有限会社ジパングサーベイ
　空中写真撮影　‥‥‥‥‥‥　有限会社スカイサーベイ九州
　遺構実測　‥‥‥‥‥‥‥‥　有限会社ジパングサーベイ
5　整理作業は、宮崎県立西都原考古博物館が実施した。
6　報告書掲載図面の作成・実測・製図および遺物写真撮影は、宮崎県立西都原考古博物館職員及び整理作業員の協力を得て堀田が行った。
7　本書で使用した国土座標は、平面直角座標系Ⅱ（旧日本測地系）に基づく。標高は、海抜絶対高である。方位は、座標北（G.N.）である。
8　本書の執筆及び編集は、堀田が行った。
9　出土遺物及びその他諸記録は宮崎県立西都原考古博物館に保管している。
10　本書に先立ち、概要報告を行なっているが、記載内容については本書が優先される。
　・宮崎県教育委員会 2015『特別史跡西都原古墳群発掘調査・保存整備概要報告書（XⅦ）』
　・宮崎県教育委員会 2016『特別史跡西都原古墳群発掘調査・保存整備概要報告書（XⅧ）』
　・宮崎県教育委員会 2017『特別史跡西都原古墳群発掘調査・保存整備概要報告書（XⅨ）』

凡　例

1　個別のトレンチを指す場合、例えば、第1トレンチはTr. 1というように略する場合がある。
2　土層中に含まれるテフラの名称について、以下のように略する場合がある。
　霧島御鉢高原スコリア＝Kr-Th
　鬼界アカホヤ火山灰＝K-Ah
　霧島小林軽石＝Kr-Kb
3　本書で使用する土層及び土器の色調については、農林水産農林水産技術会議事務局ならびに財団法人日本色彩研究所監修の『新版標準土色帖』に拠り記述した。
4　第7図～第27図のトレンチ実測図において、葺石残存範囲を灰色で示す場合がある。

巻頭図版目次

巻頭１　西都原台地北縁部に位置する西都原265号墳（北西から撮影）
巻頭２　西都原265号墳と第３支群（東から撮影）
巻頭３　西都原265号墳左くびれ部で見つかった造り出し（写真上が北東方向）

本文目次

第Ⅰ章　はじめに

第１節　西都原古墳群の位置と環境 …… 1
第２節　西都原古墳群の調査及び整備に至る経緯 …… 4
第３節　調査組織 …… 6

第Ⅱ章　西都原265号墳の調査

第１節　調査に至る経緯 …… 7
第２節　調査前の現況 …… 10
第３節　調査行程及び調査方法 …… 10
第４節　各トレンチの調査成果 …… 14
第５節　出土遺物 …… 45

第Ⅲ章　総括

第１節　西都原265号墳の墳丘復元について …… 52
第２節　西都原265号墳の築造時期について …… 54

図目次

第１図　西都原古墳群の位置図 …… 3
第２図　西都原265号墳の位置図 …… 5
第３図　大正調査における船塚（西都原265号墳）の調査成果 …… 8
第４図　墳丘測量図・地中レーダー探査結果画像の比較 …… 9
第５図　西都原265号墳測量図 …… 11
第６図　西都原265号墳トレンチ配置図 …… 13
第７図　第１・２トレンチ（Tr.１・２）実測図 …… 15
第８図　第３トレンチ（Tr.３）実測図 …… 16
第９図　第４～６トレンチ（Tr.４～６）実測図 …… 17
第10図　第４～６トレンチ（Tr.４～６）造り出し実測図 …… 19
第11図　第７～９トレンチ（Tr.７～９）実測図 …… 21
第12図　第11トレンチ（Tr.11）実測図 …… 23
第13図　第11トレンチ（Tr.11）後円部大正調査坑実測図 …… 24
第14図　第11トレンチ（Tr.11）後円部大正調査坑土層断面図 …… 25
第15図　第11トレンチ（Tr.11）後円部大正調査坑出土鉄製品分布図 …… 27
第16図　第12トレンチ（Tr.12）実測図 …… 28
第17図　第13・15トレンチ（Tr.13・15）実測図 …… 29
第18図　第14トレンチ（Tr.14）実測図 …… 30
第19図　第10・16・17・19トレンチ（Tr.10・16・17・19）実測図 …… 31
第20図　第18・20トレンチ（Tr.18・20）実測図 …… 33
第21図　第21・22トレンチ（Tr.21・22）実測図 …… 35
第22図　第23・24・28トレンチ（Tr.23・24・28）実測図 …… 37
第23図　第25・26・29・32～34トレンチ（Tr.25・26・29・32～34）実測図 …… 38
第24図　第27トレンチ（Tr.27）実測図 …… 39

第25図　第28トレンチ（Tr.28）前方部大正調査坑実測図 ……40
第26図　第28トレンチ（Tr.28）前方部大正調査坑土層断面図 ……41
第27図　第30・31トレンチ（Tr.30・31）実測図 ……43
第28図　出土土器・玉類実測図 ……47
第29図　大正調査坑出土碑石の刻字面拓本 ……49
第30図　西都原265号墳の墳丘復元案 ……53

表目次

第１表　調査組織 …… 6
第２表　西都原265号墳出土遺物観察表（土器類①） ……50
第３表　西都原265号墳出土遺物観察表（土器類②） ……51
第４表　西都原265号墳出土遺物観察表（玉類） ……51

図版目次

図版１　西都原265号墳全景（南西から撮影） ……58
図版２　西都原265号墳全景（北東から撮影） ……59
図版３　発掘調査前の状況（南から撮影） ……60
図版４　発掘調査前の状況（北から撮影） ……60
図版５　発掘調査前の状況（北西から撮影） ……60
図版６　第１トレンチ調査状況（東から撮影） ……61
図版７　第１トレンチ墳裾付近（東から撮影） ……61
図版８　第２トレンチ調査状況（南西から撮影） ……61
図版９　第２トレンチ墳裾付近（南西から撮影） ……62
図版10　第３トレンチ調査状況（北東から撮影） ……62
図版11　第４～６トレンチ調査状況（北から撮影） ……63
図版12　第４～６トレンチ調査状況（北東から撮影） ……63
図版13　第９トレンチ調査状況（北西から撮影） ……63
図版14　第11トレンチ大正調査坑検出状況（南東から撮影） ……64
図版15　第11トレンチ碑石被覆礫検出状況（南東から撮影） ……64
図版16　第11トレンチ碑石被覆礫検出状況（南東から撮影） ……64
図版17　第11トレンチ碑石検出状況（南東から撮影） ……65
図版18　第11トレンチ碑石・鉄製品検出状況（西から撮影） ……65
図版19　第12トレンチ調査状況（北東から撮影） ……65
図版20　第12トレンチ墳裾付近（東から撮影） ……66
図版21　第12トレンチ第２周堀検出状況（南東から撮影） ……66
図版22　第13・15トレンチ調査状況（北西から撮影） ……66
図版23　第13トレンチ葺石検出状況（北西から撮影） ……67
図版24　第15トレンチ葺石検出状況（北西から撮影） ……67
図版25　第14トレンチ調査状況（北東から撮影） ……67
図版26　第10・16トレンチ調査状況（北東から撮影） ……68
図版27　第17トレンチ調査状況（北東から撮影） ……68
図版28　第18トレンチ調査状況（北東から撮影） ……68
図版29　第18トレンチ第２周堀検出状況（南東から撮影） ……69
図版30　第19トレンチ調査状況（東から撮影） ……69
図版31　第19トレンチ調査状況（西から撮影） ……69
図版32　第20トレンチ調査状況（東から撮影） ……70
図版33　第20トレンチ第２周堀検出状況（北西から撮影） ……70
図版34　第21トレンチ調査状況（北東から撮影） ……70
図版35　第22トレンチ調査状況（北西から撮影） ……71
図版36　第25トレンチ調査状況（東から撮影） ……71
図版37　第25トレンチ葺石検出状況（西から撮影） ……71
図版38　第26トレンチ調査状況（西から撮影） ……72
図版39　第26トレンチ葺石検出状況（西から撮影） ……72

図版40　第27トレンチ調査状況（南西から撮影）……72
図版41　第28トレンチ碑石被覆石検出状況（南東から撮影）……73
図版42　第28トレンチ碑石検出状況（南東から撮影）……73
図版43　第29トレンチ調査状況（南から撮影）……73
図版44　第29トレンチ葺石検出状況（南から撮影）……74
図版45　第30トレンチ調査状況（南西から撮影）……74
図版46　第31トレンチ調査状況（南西から撮影）……74
図版47　第32トレンチ調査状況（北西から撮影）……75
図版48　第33トレンチ調査状況（北から撮影）……75
図版49　第34トレンチ調査状況（北西から撮影）……75
図版50　出土遺物（土師器）……76
図版51　出土遺物（須恵器）……76
図版52　出土遺物（須恵器）……76
図版53　出土遺物（須恵器）……77
図版54　出土遺物（須恵器）……77
図版55　出土遺物（須恵器）……77
図版56　出土遺物（須恵器）……78
図版57　出土遺物（須恵器）……78
図版58　出土遺物（須恵器）……78
図版59　出土遺物（鉄製品）……79
図版60　出土遺物（玉類）……79
図版61　大正調査出土遺物（鉄製品）……79
図版62　大正調査出土遺物（鉄製品）……80
図版63　大正調査出土遺物（銅鏡）……80
図版64　大正調査出土遺物（銅鏡）……80

第Ⅰ章　はじめに

第１節　西都原古墳群の位置と環境

特別史跡西都原古墳群は、宮崎県のほぼ中央を東流する一ツ瀬川の中流右岸、西都市街地の西方に位置し、日向灘海岸線からは約13kmの距離がある。古墳が立地するのは、標高60 ～ 80 mの通称「西都原台地」を中心に、その東や南の裾部に広がる標高30 m前後の「中間台地」、更にそれらを取り囲む標高10 m前後の沖積地であり、その範囲は南北4.2km、東西2.6kmにも及ぶ。指定面積は、58haを超え、その約９割は国、県、市の公有地となっている。古墳群の分布範囲内には、ともに国指定史跡である「日向国府跡」と「日向国分寺跡」が所在する。

西都原台地上で発掘調査された遺跡には、西都原古墳群以外に、丸山遺跡･新立遺跡･西都原遺跡･寺原遺跡･原口第２遺跡等がある。中間台地上には、堂子丸遺跡･法元遺跡･寺崎遺跡（日向国府跡）･上妻遺跡・酒元遺跡・諏訪遺跡（日向国分尼寺跡）・日向国分寺跡・上尾筋遺跡・下尾筋遺跡等が発掘調査された遺跡として知られる。

西都原台地上で知られる人類の明確な生活痕跡は旧石器時代にはじまり、西都原284号墳周辺で礫群やナイフ形石器等が確認されたほか、西都原101・173号墳や西都原西遺跡においても各種旧石器が少量ながら確認されている。続いて、縄文時代早期には、台地北側に立地する丸山遺跡や西都原西遺跡、南西端の西都原13号墳付近に位置する原口遺跡では、集石遺構や貝殻条痕文土器（前平式ほか）等が発見されている。続いて、縄文時代前～晩期の遺跡は、これまでに西都原台地上の報告事例はみられないが、中間台地においては、上妻遺跡の船元式土器、寺崎遺跡や上妻遺跡における後期土器、寺崎遺跡の黒色磨研土器や孔列文土器等の出土があげられる。

弥生時代については、中～後期の竪穴住居跡が、西都原東遺跡・東立野遺跡・原口第２遺跡等で検出され、いずれも１棟から数棟の竪穴住居で構成される、散発的な居住形態である。一方で、弥生時代終末期から古墳時代前期にかけて営まれた新立遺跡では、竪穴住居跡20棟・掘立柱建物１棟で構成され、遺物も多量に出土したように、西都原台地上で初めて登場する本格的な集落である。また、西都原284号墳は、弥生時代終末期の墳丘墓である。

古墳時代になると、先述の新立遺跡のほか、寺原遺跡において、古墳時代前期を中心に、重複する21棟の竪穴住居跡が検出された。西都原台地上では、新立遺跡・寺原遺跡における前期集落を除くと、原口第２遺跡における古墳時代後期の竪穴住居２棟等しか古墳時代の集落がみられず、集落の本体は中間台地にあるとみられる。

古墳時代を通じて一大古墳群を形成する西都原古墳群は、現在、宮崎県教育委員会が管理する『古墳台帳』に記載されている317基に、1895（明治28）年に陵墓参考地として治定された男狭穂塚・女狭穂塚を加えた319基が公的な数である（内訳は、前方後円墳32基、方墳２基、円墳285基）。一方、1940（昭和15）年刊行の『日本古文化研究所報告　第十　西都原古墳の調査』では、1934（昭和９）年に史跡指定された282基と、その後に追加された45基、それに男狭穂塚・女狭穂塚を加えた329

基としている。この差は、1952（昭和27）年の特別史跡指定と、その後の公有化の段階で指定に含まれなかったものがあったためである。近年の再整備に伴う点検作業で未指定古墳が確認され、発掘調査や地中レーダー探査でも削平された古墳が判明する等、実際には320基を超える古墳が存在したことは確実である。さらに、西都原古墳群には、墳丘を有する古墳に加えて、南九州に特有の地下式横穴墓や、全国に広く分布する横穴墓が混在する。

西都原古墳群では、古墳の分布する台地面やそれらを開析する大小の谷地形、古墳の築造年代等によって、10～13の単位（支群）に細分されている。これらは、古墳の築造集団の単位ととらえることもでき、その場合、同時期に複数集団による造営が行われていたものと理解できる。九州最大の前方後円墳である女狭穂塚と日本列島最大の帆立貝形古墳である男狭穂塚とは、ほとんど接するような至近距離に位置しており、その陪塚と考えられる169・170・171号墳とあわせた計５基で丸山支群と呼称されているが、これらは５世紀代になってから西都原台地の中央付近に築造されており、４世紀代に台地縁辺部へ沿うように前方後円墳を築造していた支群とは立地を大きく異にする。

西都原古墳群の中の地下式横穴墓は、第２支群と第３支群、中間台地の堂ヶ嶋支群と鷺田支群で確認されている。その数は、正式に調査・報告されたもの以外に、新聞等の記事で確認されるもの、近年の地中レーダー探査でその可能性を指摘されたものを加えると70基以上となる。このうち造営年代の判明するものは、第３－Ａ支群の111号墳下に位置する４号地下式横穴墓が５世紀後半で、その他の多くは６世紀後半以降のものである。特に、堂ヶ嶋支群に立地するものは、竪坑が長大化したものもあり、６世紀末～７世紀前半の造営である。横穴墓は、第１－Ｂ支群に位置する。酒元ノ上地区で発見された10基に加え、地中レーダー探査で新たに確認されたものを加えると20基前後にのぼる可能性がある。平面形が楔形となる長大な墓道を持ち、その奥壁や側壁に墓室を穿つ。全体的な埋葬様式は横穴墓であるものの、墓室としては地下式横穴墓を意識している。７世紀前半の造営である。

古墳群形成以後の西都原台地周辺では、中間台地上で奈良時代に日向国府跡である寺崎遺跡、日向国分寺・国分尼寺が設置され、政治的宗教的拠点としての役割を担っていた。また、台地上の西都原西遺跡では奈良から平安時代にかけての大規模な掘立柱建物群が検出されており、国府とは別の公的施設の可能性が指摘されている。このように古墳築造終了後も、当地は古代日向の中心地として存在を示していた。

第1図　西都原古墳群の位置図（S=1/25,000）

第２節　西都原古墳群の調査及び整備に至る経緯

西都原古墳群における発掘調査は、1912 ～ 1917(大正元～６）年にかけて実施されたものがはじまりであり、宮崎県が主催し、帝室博物館、東京・京都の両帝国大学、宮内省等から学者を招聘した大規模かつ組織的なものであった。その調査目的は、文化財としての古墳の保護継承を図るということを第一としながらも、『記紀』神話の史実性を立証することも大きな狙いの１つという時代的な背景を持つものであったが、古墳を対象とした日本初の本格的な合同学術調査であり、以後の古墳研究や遺跡保護に大きな影響を与えた。同調査では、前方後円墳６・円墳23・方墳１の30基が発掘され、後に重要文化財となる埴輪子持家・埴輪船（東京国立博物館所蔵）等が出土した。

1912年からの発掘調査にも参加していた濱田耕作や地元宮崎の原田仁によって、1936 ～ 1940（昭和11 ～ 15）年に前方後円墳の測量図や古墳群の分布図が作成され、古墳群研究の先駆的役割を果たした。その後、古墳群保存意識の高まりを受け、1934（昭和９）年に史蹟名勝天然紀念物保存法（1919（大正８）年制定）により国史跡に、1952（昭和27）年には文化財保護法（1950（昭和25）年制定）により特別史跡に指定された。1965（昭和40）年には『風土記の丘』整備事業に着手し、1966 ～ 1968（昭和41 ～ 43）年の３か年で、文化庁補助事業「風土記の丘整備事業」第１号として、広大な面積の買上げ、古墳の復元、史跡公園としての面的整備等が進められた。また、史跡の管理とガイダンス機能を有する西都原資料館も設置され、宮崎県総合博物館分館として1968（昭和43）年に開館した。

そして、「史跡の保護」に加えて「活用」へと視点を転じ、1993（平成５）年度から２か年にわたり西都原古墳群整備活用調査事業を実施し、「西都原古墳群保存整備検討委員会」の設置ならびに検討を経て、1994（平成６）年に「西都原古墳群及びその周辺地域の整備構想」を、1995（平成７）年３月には「西都原古墳群保存整備事業に関する基本計画」を策定した。現在も、この基本計画に従って整備事業を推進している。

1995 ～ 1997（平成７～９）年度に実施された「大規模遺跡総合整備事業」は、「地方拠点史跡等総合整備事業」に組み替えられて1998 ～ 2002（平成10 ～ 14）年度まで継続した（第一期整備）。史跡整備に向けた発掘調査が進められ、西都原13・100・111(４号地下式横穴墓)・167 ～ 169・171・173・191 ～ 194・196・197・272・205・206（鬼の窟古墳）・酒元ノ上横穴墓群が調査され、古代生活体験館・遺構保存覆屋や13号墳見学施設、４号地下式横穴墓保存見学施設が整備された。引き続き、2007（平成19）年度までの「歴史ロマン再生空間形成事業」（第二期）では、第一期からの継続分に加え、西都原46・170号墳の調査と46・111・169・170号墳の整備が進められた。この期間中には、宮崎大学考古学研究室による西都原81号墳の発掘調査も実施された。2004（平成16）年４月には、古墳群全体をフィールドミュージアムとして捉えた「県立西都原考古博物館」が開館し、古代日向からみた国内外の歴史情報を受発信している。

続いて、2008 ～ 2013（平成20 ～ 25）年度まで第三期として「活用促進ゾーン整備事業」を実施した（※平成23年度が東日本大震災の影響で事業中止としたことにより、当初の５か年から１年間延期）。これは、並列的に存在する複数の首長墓系列の中で、大正時代に調査された古墳が集中す

第2図　西都原 265 号墳の位置図 (S=1/10,000)

る台地南端のグループ（第１支群）を主たる対象とし、単一系列内の古墳変遷の状況を把握することで、南九州における代表的な首長墓系列の動向を理解しようとする試みであり、整備においても単独の古墳のみならず、案内板や説明板などによって古墳間の有機的なつながりを意識できるよう面的な整備を心掛けた。第二期を引き継ぎつつ、46・47・202・284号墳の発掘調査や報告書刊行、46・47・202号墳の墳丘や解説板等の整備、2008（平成20）年度に公有化を行った170号墳周辺の周堀の顕在化と芝貼り等を実施した。

そして、2014 ～ 2018（平成26 ～ 30）年度には第四期として「調査整備活性化事業」を実施した。当該事業は、西都原古墳群における発掘調査・整備保存が果たした学術的・文化的・社会的役割を踏まえつつ、古墳群を保存・継承していこうとする機運の醸成、歴史と文化を活かした魅力あるまちづくりなど地域の活性化を促進するもので、101・265号墳や地中レーダー探査で新たに発見された第１支群横穴墓群の発掘調査、当初の整備から10数年が経過した100・171・206号墳の再整備等を計画し、さらに古墳群全体としての理解を深め、その価値を具現化するために陵墓参考地周辺における様相把握を目指す調査も盛り込んだ。西都原265号墳の発掘調査は事業の初年度である2014（平成26）年度から着手し、2016（平成28）年度まで継続した。

第３節　調査組織

西都原265号墳の調査は、宮崎県教育委員会を主体に次の調査組織で実施された。

第１表　調査組織

	平成26年度	平成27年度	平成28年度	平成29年度	平成30年度
調査指導委員	柳澤一男 岸本直文 重藤輝行	柳澤一男 岸本直文 重藤輝行	柳澤一男 岸本直文 重藤輝行	柳澤一男 岸本直文 重藤輝行	柳澤一男 岸本直文 重藤輝行
教育長	飛田　洋	飛田　洋	四本　孝	四本　孝	四本　孝
文化財課長	大西敏夫	大西敏夫	向井大蔵	谷口武範	谷口武範
埋蔵文化財担当リーダー	飯田博之	飯田博之	飯田博之	飯田博之	飯田博之
西都原考古博物館長	入倉俊一	入倉俊一	田方浩二	向井大蔵	大山江里子
副館長	長峯勝志	長友順子	長友順子	大山江里子	山元高光
管理担当リーダー	山下真司	金丸昌生	長谷文惠	長谷文惠	長谷文惠
学芸普及担当リーダー	東　憲章	東　憲章	東　憲章	東　憲章	東　憲章
調査・整理担当	泊俊一郎 堀田孝博	堀田孝博 藤木　聡	堀田孝博 藤木　聡	堀田孝博	堀田孝博

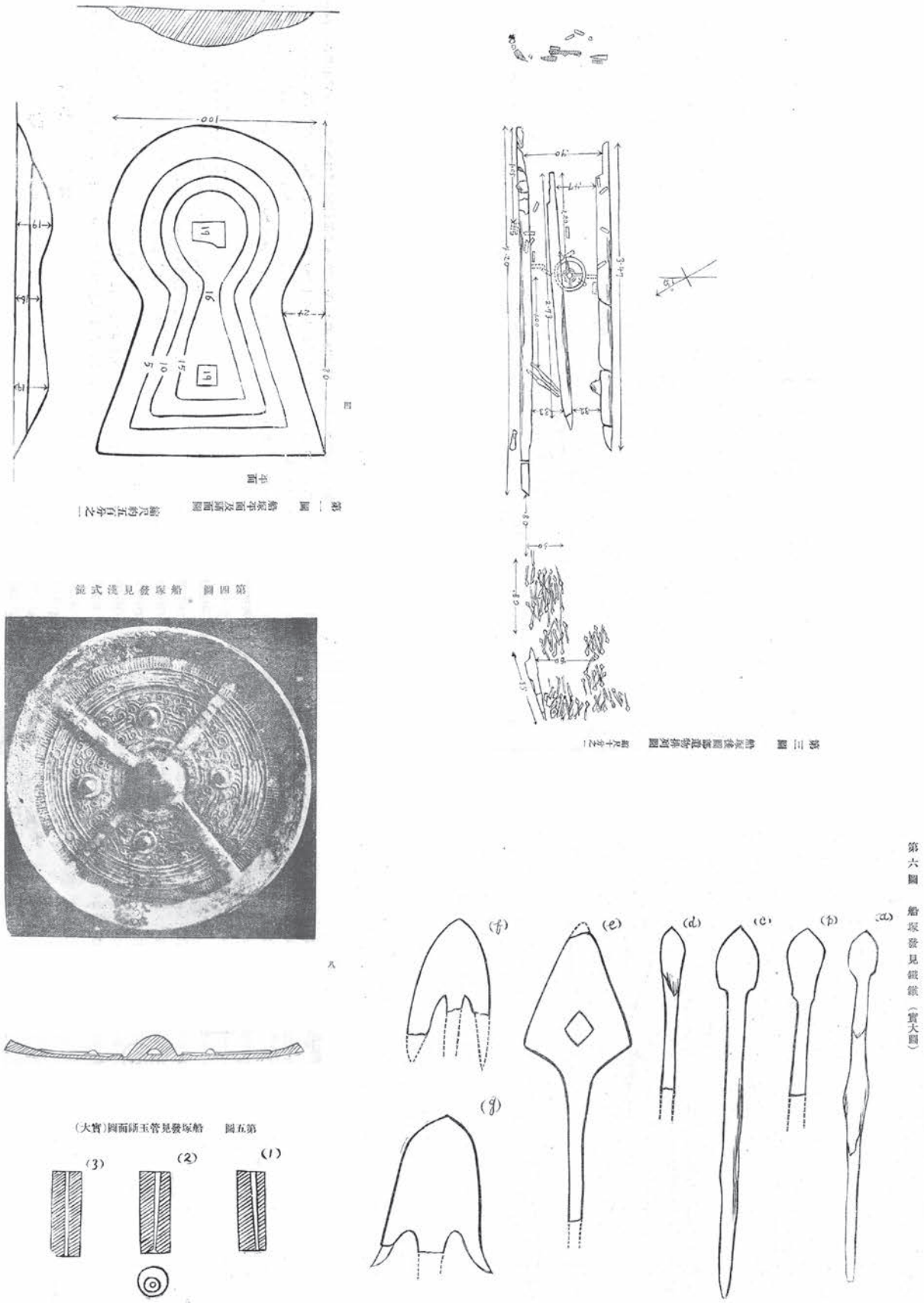
第Ⅱ章　西都原265号墳の調査

第１節　調査に至る経緯

西都原265号墳は「船塚」の通称で知られており、西都原台地最北端のグループである第３支群に位置する唯一の前方後円墳である。同支群は265号墳の他に87基の円墳により構成されるが、さらに地中レーダー探査の結果から７基の消滅円墳と29基の地下式横穴墓の存在が推定されている。265号墳の南方約300ｍの位置にある111号墳は、二段に築成され直径は約30ｍを測る支群では最大規模の円墳で、短甲３領をはじめ豊富な副葬品が出土した４号地下式横穴墓を主体部としており、墳頂部で確認された３基の埋葬主体部のうち１基からも挂甲１領や多数のガラス玉が出土した。また111号墳の西に隣接する115号墳も、大正時代の鳥居龍蔵による発掘調査（第２次調査）において刀剣や鉄鏃とともに短甲１領が出土しており、古墳時代中期後半から後期初頭頃にかけて重要な位置を占める支群である。

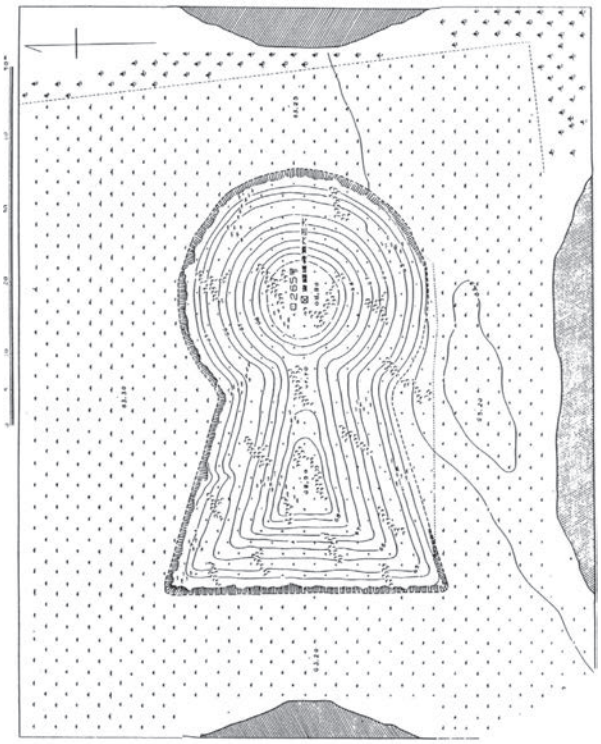
265号墳は1917（大正６）年１月に実施された第６次調査（以下では「大正調査」と表記）の中で発掘調査が行われた。調査期間は１月４～８日で、265号墳の調査は１月５・６日の２日間で行われた。調査参加者は、濱田耕作（京都帝国大学）、梅原末治（同）、原勝郎（同）、原田淑人（東京帝国大学）であったが、調査経過を記した当時の覚書（宮崎県教委保管『名勝旧蹟古墳』の中にあり）を見ると、原勝郎は１月６日午後９時に妻町（現西都市の中心市街地一帯）へ到着とあり、265号墳の調査には参加していない。後円部・前方部の墳頂にそれぞれ調査坑が設定され、後円部墳頂から変形十字文鏡１、碧玉製管玉19、鉄刀３、鉄鉾１、刀子２、鉄鏃多数が出土したが、明確な埋葬主体部は検出されなかった。ただし、1917年３月に刊行された報告書（『宮崎縣西都原古墳調査報告書』）に掲載されている副葬品の配置状況（本書の第３図として転載）から、埋葬施設は木棺直葬であった可能性が高い。報告書では、265号墳の時期的位置づけを検討する中で、出土遺物に土器が含まれないなどの限界を認めつつも、鏡の製作技法などを手がかりとして206号墳（鬼の窟古墳）以後の時代に属する小円墳と同時期で外形のみ古式に拠ったものと推定された。

大正調査以後も、出土遺物の内容や前方部が大きく発達した墳形などから、第１支群に属する202号墳（姫塚）とともに、西都原古墳群内で２基しかない後期古墳として理解されてきたが、2007～2011（平成19～23）年度に実施された特別史跡西都原古墳群地中探査・地下マップ制作事業の中で第３支群の地中レーダー探査が行われ、265号墳左くびれ部における造り出しの存在が想定されるに至り、築造時期が古墳時代中期に遡る可能性が指摘されつつあった。従来、５世紀前半に男狭穂塚・女狭穂塚が築造された後の５世紀後半は前方後円墳の築造が停止する空白期で、その時期に地域色の濃い墓制である４号地下式横穴墓が築造されるという流れで理解されることが多かったが、そうした西都原古墳群の築造過程を検討する上で、265号墳の築造時期が大きな影響を与えるため、造り出しも含めた墳形の確定や出土遺物による築造時期の絞り込みを主な目的として発掘調査を実施することとなった。



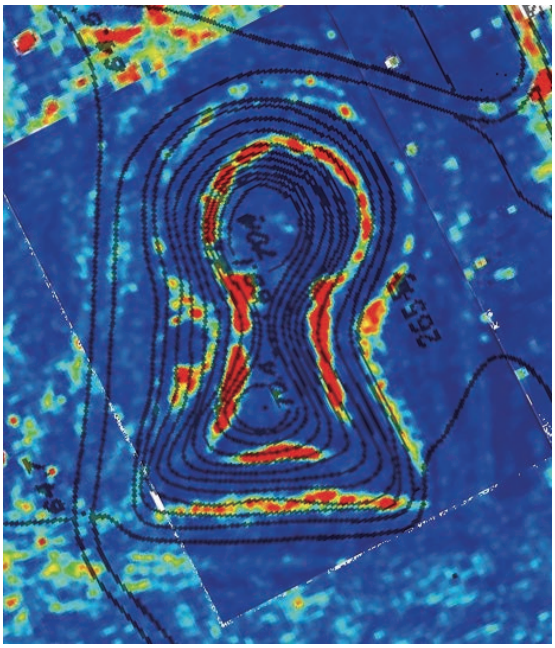
※濱田・梅原1917『宮崎縣西都原古墳調査報告書』所収の図をS=1/2で転載

第3図　大正調査における船塚（西都原 265 号墳）の調査成果



原田仁の測量図（1940 年刊行）

宮崎県史編さん時の測量図（1997 年刊行）



地中レーダー探査結果画像（地表面から−50cm）

2014（平成 26）年度作製の測量図

第４図　墳丘測量図・地中レーダー探査結果画像の比較（Ｓ＝１/1,000）

第２節　調査前の現況

第３支群の中央付近には、東側の開析谷から派生したコの字状の谷地形が入り込んでおり、それを境界として南側のＡ群と北側のＢ群とに細別される。Ａ群は北半部が谷地形に取り囲まれるような形になっており、Ｂ群は谷地形と台地北縁との間にあり、東西に細長く展開するほか、西端部付近には円墳の密集域を形成する（第２図）。

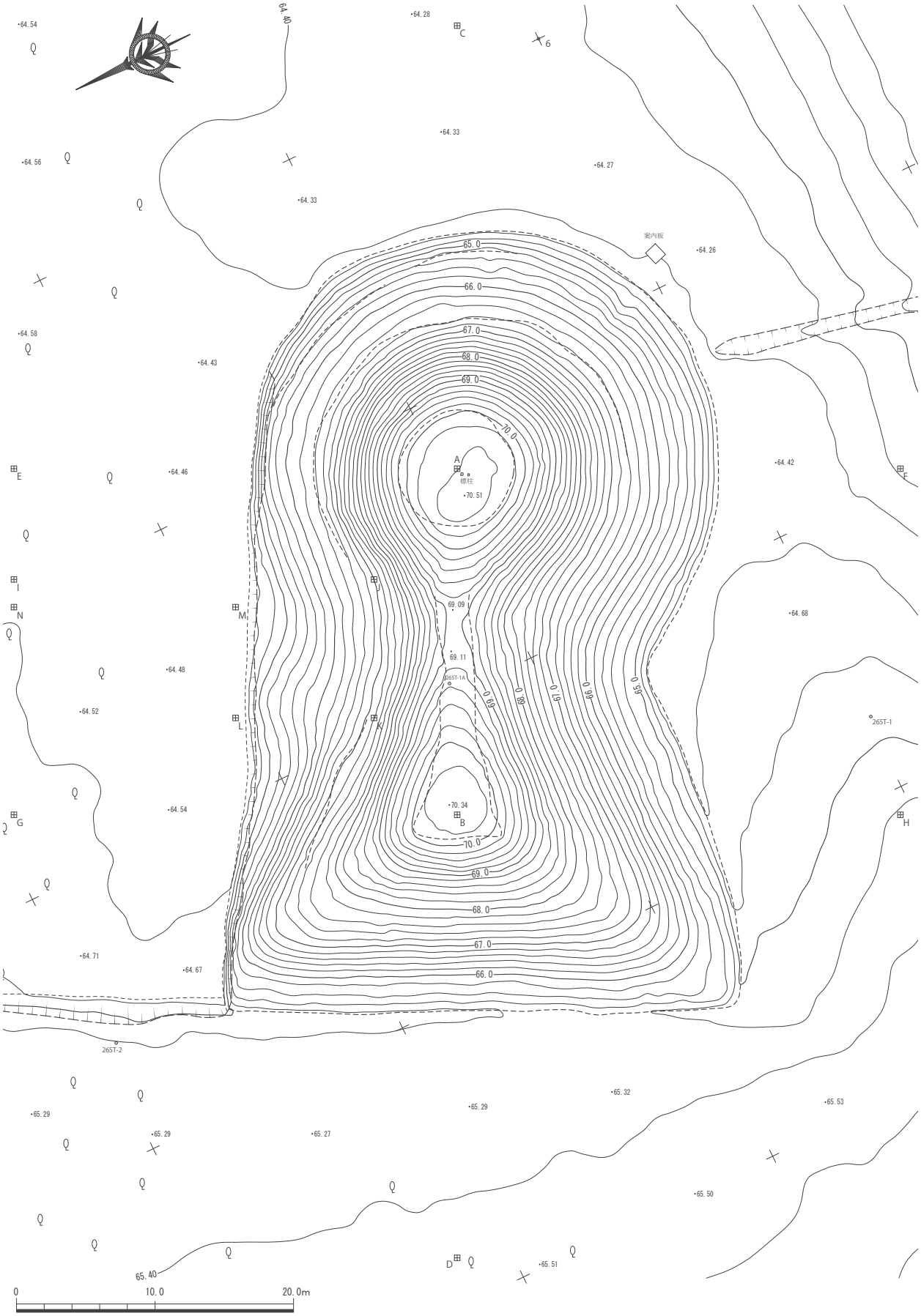
265号墳は、台地北縁の段丘崖面に並行するように主軸をとり、前方部を北西、後円部を南東に向ける。現在は台地縁辺部からその下の崖面にかけて樹木が繁茂しており眺望に優れているとはいえないが、これらの樹木がなければ西都市街地の北方に位置する穂北地域を一望できる立地であり、台地下の穂北側からも265号墳を見ることができたと考えられる。

265号墳の現況としての墳丘形状は、墳長約57ｍ、後円部径約35ｍ、同高さ約６ｍ、前方部長約26ｍ、同前面幅約38ｍである。前方部幅が後円部径よりも大きく、前方部と後円部の高さがほぼ同じである点などが、築造年代を後期に下げる根拠となっていた。前方部・後円部ともに２段築成であることが明瞭で（図版３・４）、左くびれ部付近には右くびれ部にはない盛り上がった部分があり、造り出しの存在が推定されていた（図版５）。また、大正調査では後円部南西側および南側斜面におけるトレンチ調査で葺石が確認されていたが、墳丘表面に円礫が多数浮き上がっており、転落した葺石と考えられた。墳丘北側は前方部から後円部にかけて墳丘裾部が直線的に切られており、風土記の丘として整備される以前の畑地耕作等に伴う改変と考えられた。後円部墳頂には凝灰岩製標柱が２基設置され、墳丘裾部には史跡整備に伴ってコンクリート製のＴ字標柱が巡らされていた。大正調査の報告書では、周堀は存在しないとされていたが、現況では古墳の周囲が僅かながら窪んでおり、周堀の存在を想定しえた。

第３節　調査行程及び調査方法

先述したように265号墳の発掘調査は、2014（平成26）年度から2016（平成28）年度までの３か年にわたって実施したが、年度ごとに調査の目標を設定し、必要なデータを得られるようにトレンチの数や配置を計画した。また、当該年度の調査で明らかになった事実を踏まえつつ、次年度の調査計画に反映させるという形で進めた（第６図）。

2014（平成26）年度の調査では、まず現況の詳細な測量図を作成し（第５図）、それに基づいて主軸線の検討を行った。調査に際しては、主として後円部における墳丘の規模や構造、周堀の有無や形状等の確認を行うとともに、大正調査による掘削箇所（以下、「大正調査坑」と表記）の位置や規模を把握するため、墳丘の主軸線上およびそれに直行する方向でトレンチを設定した（第１～３トレンチ、第７～10トレンチ）。また、左くびれ部には、造り出しの有無や規模、構造を確認するためのトレンチを設定した（第４～６トレンチ）。各トレンチについて掘り下げを行った結果、後円部側では墳丘一段目・二段目ともに葺石が残存することを確認し、墳丘の東側から北側にかけて周堀が存在することも判明した。墳丘南側の第２トレンチでは撹乱の影響が大きく、周堀が南側まで巡るかの確認はできなかった。第１・５・10トレンチでは、いずれも墳丘から遠い側の端部において地



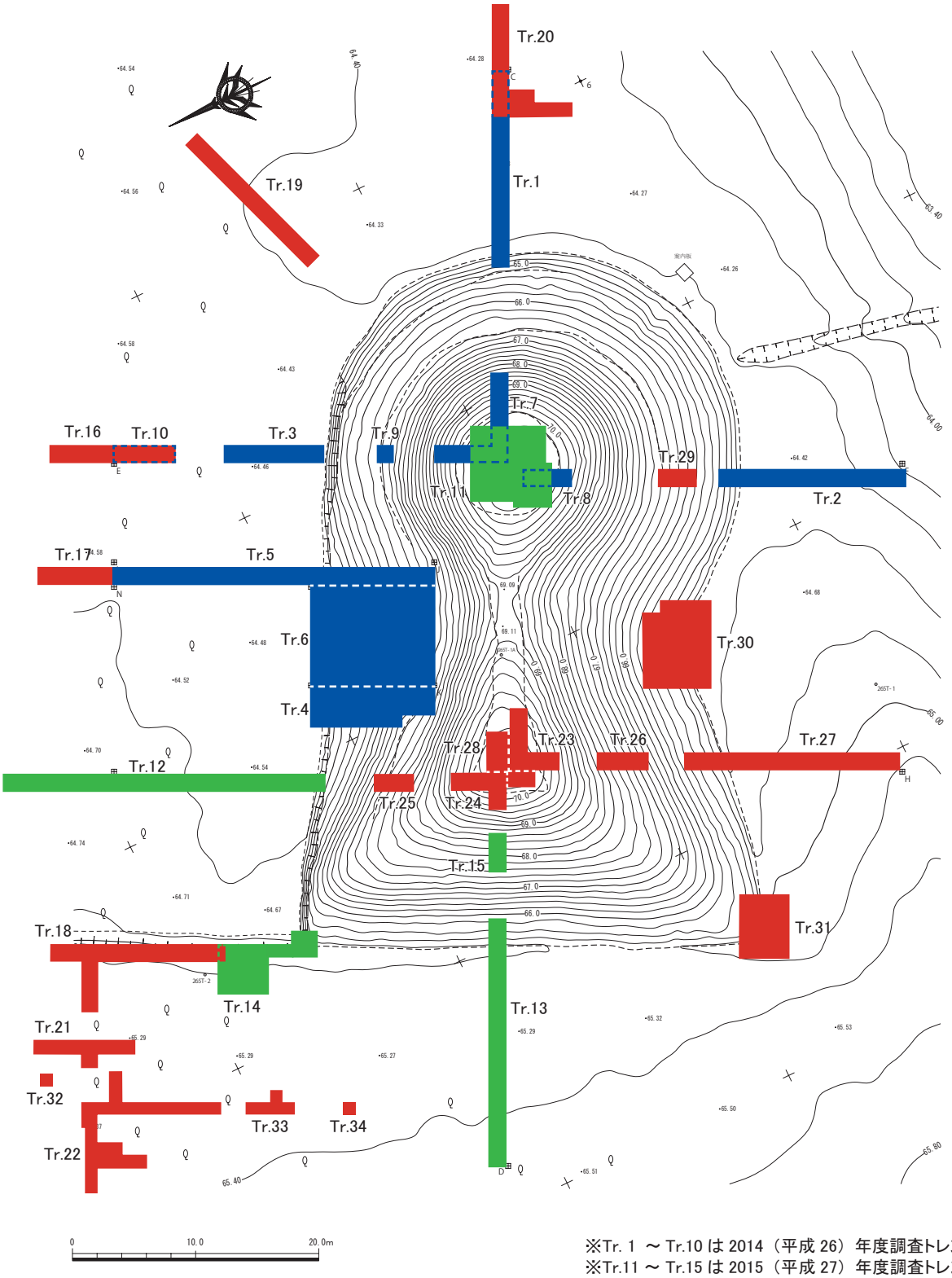
第5図　西都原 265 号墳測量図（S=1/400）

山のK-Ahが途切れている状況を確認したが、人為的なものか自然地形であるかの確定には至らなかった。墳頂部の第７・８トレンチでは、大正調査坑の平面プランを部分的に検出し、精査の過程で碧玉製管玉１点が出土した（第28図25）。左くびれ部では造り出しの存在を確認し、その上面では土師器壺・高杯（第28図１・２）などが出土した。

2015（平成27）年度の調査では、前方部における墳丘の規模や構造、周堀がどこまで巡るかを確認するために、墳丘の主軸線上およびそれに直行する方向でトレンチを設定した（第12・13・15トレンチ）。前年度に調査した第１・５・10トレンチの所見から、第２周堀が存在することを念頭に置き、第12・13トレンチは想定される第２周堀の幅をカバーできる長さに設定したところ、第12トレンチでは墳丘周囲の周堀より外側に浅い溝状遺構が検出され、これが第２周堀となる可能性が高まった。一方、第13トレンチでは第２周堀の痕跡がなく、前方部前面中央までは延びていないことが把握できた。第14トレンチは前方部左隅角を確認するために設定したが、後世の畑地造成によって隅角部が完全に失われていることが判明した。また、後円部墳頂では、大正調査坑の全面検出を目指して第11トレンチを設定した。大正調査坑を再発掘したところ、大正調査終了時に埋設された碑石が出土したほか、碧玉製管玉（第28図24）や鉄製武器類の破片が出土した。

2016（平成28）年度の調査では、前年度の第12トレンチにおける所見を踏まえ、第１・５・10トレンチを延長するように第16・17・20トレンチを設定したほか、第２周堀の形状や規模を確認するために第18・19・21・22・32～34トレンチを順次設定し、拡張も適宜行った。調査の結果、第20・33トレンチでそれぞれ第２周堀の末端部を検出し、第２周堀が概ね265号墳の墳丘左半分に巡ることが明らかになった。前方部墳頂に設定した第23・24トレンチでは大正調査坑の平面プランが部分的に検出できたため、トレンチを面的に拡張して精査を行い（第28トレンチ）、大正調査坑の再発掘を行った。古墳に伴う遺物は出土しなかったが、大正調査坑のほぼ中心から２点目の碑石が発見された。右くびれ部に設定した第30トレンチではなだらかな曲線を描く基底石を検出し、造り出しは左くびれ部のみに存在したことを確定した。その他にも、築造当時の墳丘構造を復元する上で必要なデータを得るため第25～27・29・30トレンチを設定したが、第27トレンチにおいて第１周堀の存在を確認し、各トレンチの検出状況から第１周堀は盾形になることが判明した。

なお、調査記録は、縮尺1/20の実測図及び35mmカメラを用いたリバーサルによる写真記録を基本とし、随時、デジタルカメラによっても記録した。また、葺石の残存範囲などを中心に実測・図化の業務委託も行った。ローリングタワーを超える高度からの俯瞰写真等は、ラジコンヘリコプターを用いた撮影委託とした。調査記録・出土遺物の整理や報告書の原稿作成は、発掘調査とも並行しつつ2018（平成30）年度まで西都原考古博物館で実施した。



※Tr. 1 ～ Tr.10 は 2014（平成 26）年度調査トレンチ
※Tr.11 ～ Tr.15 は 2015（平成 27）年度調査トレンチ
※Tr.16 ～ Tr.34 は 2016（平成 28）年度調査トレンチ

第６図　西都原 265 号墳トレンチ配置図（Ｓ＝１/500）

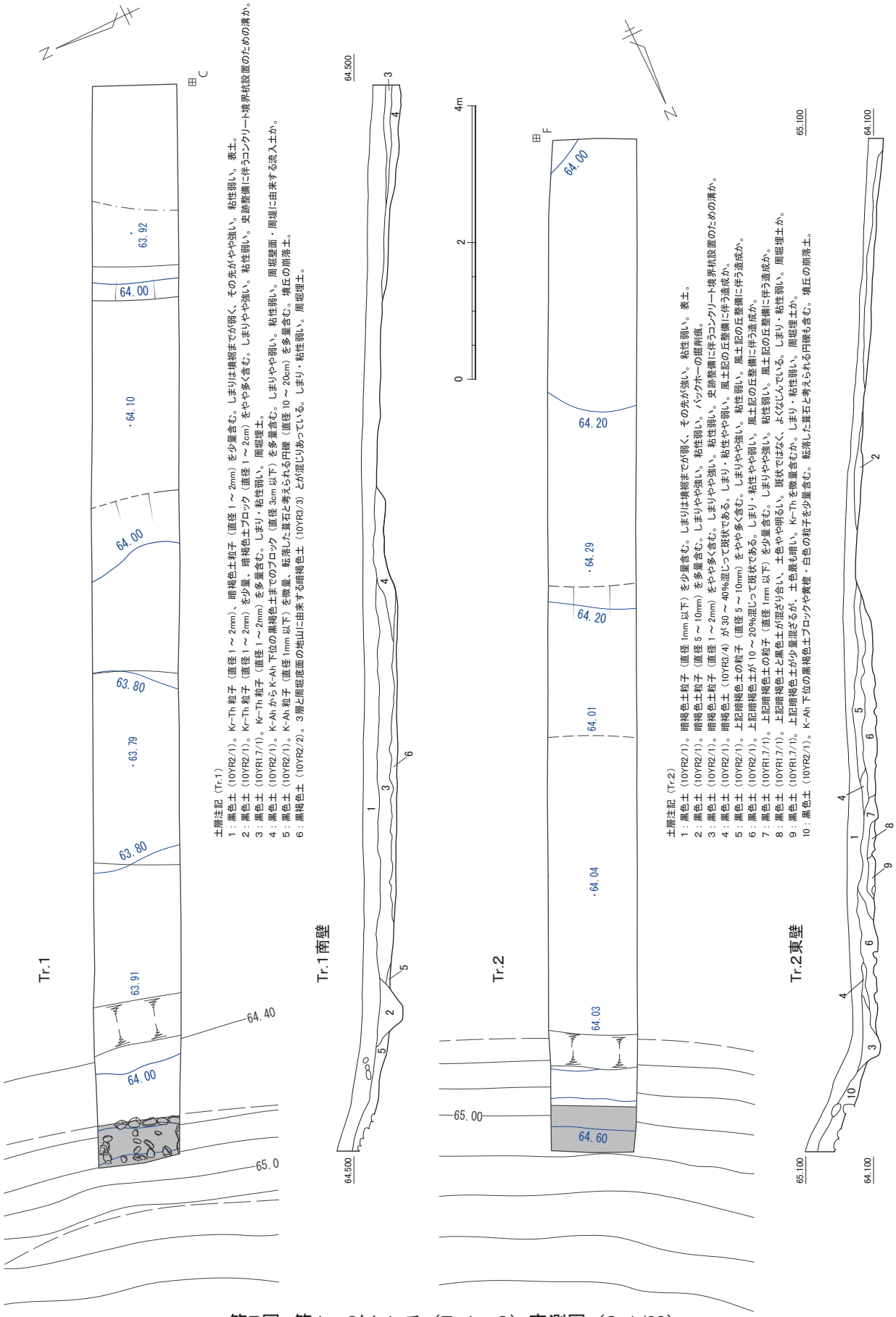
第４節　各トレンチの調査成果

（1）第１トレンチ（第７図, 図版６・７）

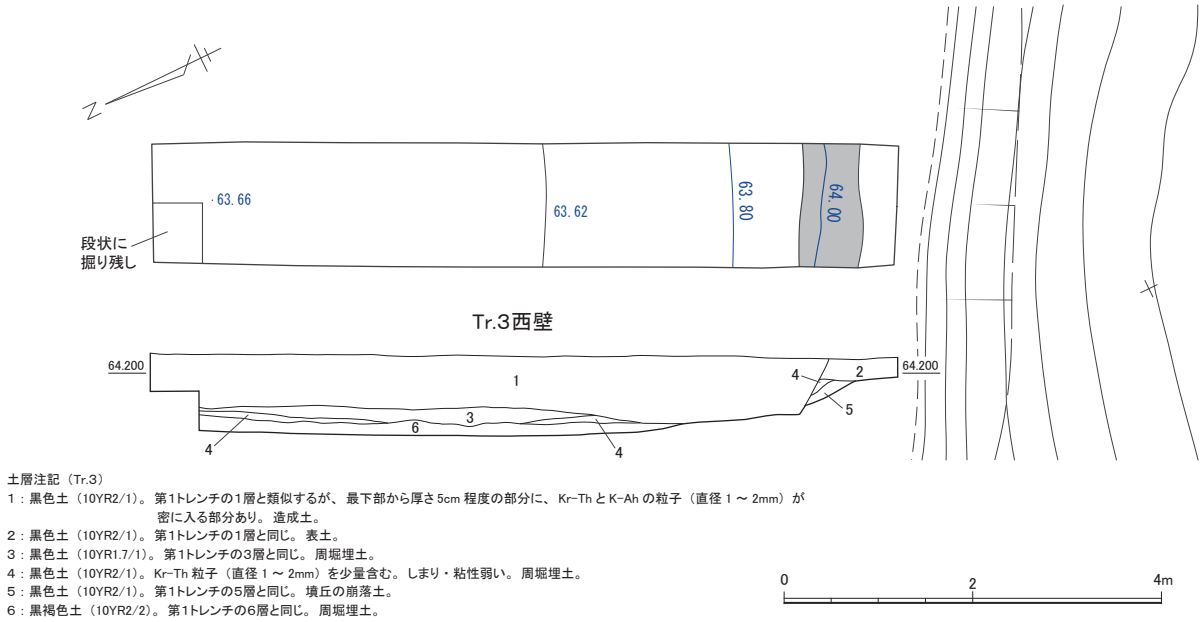
後円部南東側において主軸線に沿った方向で設定した。幅は1.3 m、長さは15.6 mである。表土を除去すると、墳裾に近い側のトレンチ端部から約9.7 mまでは黒色土となり、その先には地山の鬼界アカホヤ火山灰（K-Ah）層が露出した。黒色土には霧島御鉢高原スコリア（Kr-Th）が入っており、西都原古墳群内における既往の調査からこの部分が周堀の埋土であると判断した。黒色土の墳丘側縁辺部分は、K-Ah粒子や直径10 ～ 20cmの円礫を含んでいたため、この層（５層）は墳丘として盛られた土が崩落したもので、円礫は転落した葺石であると判断した。５層を精査する中で霧島小林軽石（Kr-Kb）を含む暗褐色土のブロックをやや多く含む部分に気づいたが（２層）、これを先行して掘り下げたところ、墳裾に沿って掘られた断面逆台形の溝となった。この溝は第２・12・13・27・30・31トレンチでも検出され、２・30・31トレンチではコンクリート製のＴ字形標柱が溝内に設置されていた。これは史跡指定された古墳の墳丘範囲を示したものであり、他の古墳にも見られることから、史跡整備の一環としてある時期に集中的に行われたと考えられる。２層を埋土とする溝を完掘すると、底面から壁面にかけてK-Ah下位の黒褐色土層や霧島小林軽石（Kr-Kb）を含む暗褐色土層が地山として現れたため、それを手がかりに５層を除去したところ、原位置を保つ葺石を確認した。墳丘斜面はK-Ah下位の黒褐色土で、墳裾付近は基本的に地山削り出しであるが、葺石は組み合わず個々に墳丘へ埋め込まれたような状態であることから、地山の上に薄い盛土を行いつつ葺石が行われているのかもしれない。この点を支持するような堆積状況が第30トレンチで確認できた。葺石のうち、基底石は長径20cm前後でくびれ部に多用されている横長の礫とは明らかに異なる。やや不明瞭ではあるが、区画列石と考えられる箇所が２列確認でき、列石間の心々距離は約70cmである。

周堀埋土を掘り下げていくと、外縁部分にK-AhからK-Ah下位の黒褐色土までの地山ブロックを多量に含む４層が流入していることが判明した。これは埋没時に周堀壁面が崩落したものとも考えられるが、第１・第２周堀間に周堤があった可能性も示すものかもしれない。完掘した第１周堀で計測したところ、基底石外縁から約3.7 mのところに傾斜変換点があり、ここからが周堀底面と考えられる。つづいて基底石外縁から約6.4 mのところで周堀が立ち上がり始める。基底石外縁から残存する第１周堀外縁部までの幅は約9.2 mであるが、地山はK-Ahの下半部からしか残っておらず、旧地表面から約40 ～ 50cmが失われていると考えられ、本来の幅はもう少し広かった可能性が高い。

そして、トレンチの墳丘側端部から約12.4 mのところで地山のK-Ahが途切れ、第１周堀の埋土と同質の黒色土（３層）となった。精査の結果、最深部で約20cmの非常に浅い落ち込みとなったが、これが第２周堀であるのか自然地形であるのかの確定には至らなかった。2016（平成28）年度に第１トレンチと一部重複する形で設定した第20トレンチの調査において、この落ち込みが第２周堀の末端部付近であることが判明した。第１・２周堀間は現状で約2.7 mであるが、先述したように旧地表面までの高さを勘案すると、間隔が少し狭まる可能性は高い。出土遺物は土師器・須恵器の



第7図　第1・2トレンチ（Tr.1・2）実測図（S=1/80）



土層注記（Tr.3）
1：黒色土（10YR2/1）。第1トレンチの1層と類似するが、最下部から厚さ5cm程度の部分に、Kr-ThとK-Ahの粒子（直径1～2mm）が密に入る部分あり。造成土。
2：黒色土（10YR2/1）。第1トレンチの1層と同じ。表土。
3：黒色土（10YR1.7/1）。第1トレンチの3層と同じ。周堀埋土。
4：黒色土（10YR2/1）。Kr-Th粒子（直径1～2mm）を少量含む。しまり・粘性弱い。周堀埋土。
5：黒色土（10YR2/1）。第1トレンチの5層と同じ。墳丘の崩落土。
6：黒褐色土（10YR2/2）。第1トレンチの6層と同じ。周堀埋土。

第8図　第3トレンチ（Tr.3）実測図（S=1/80）

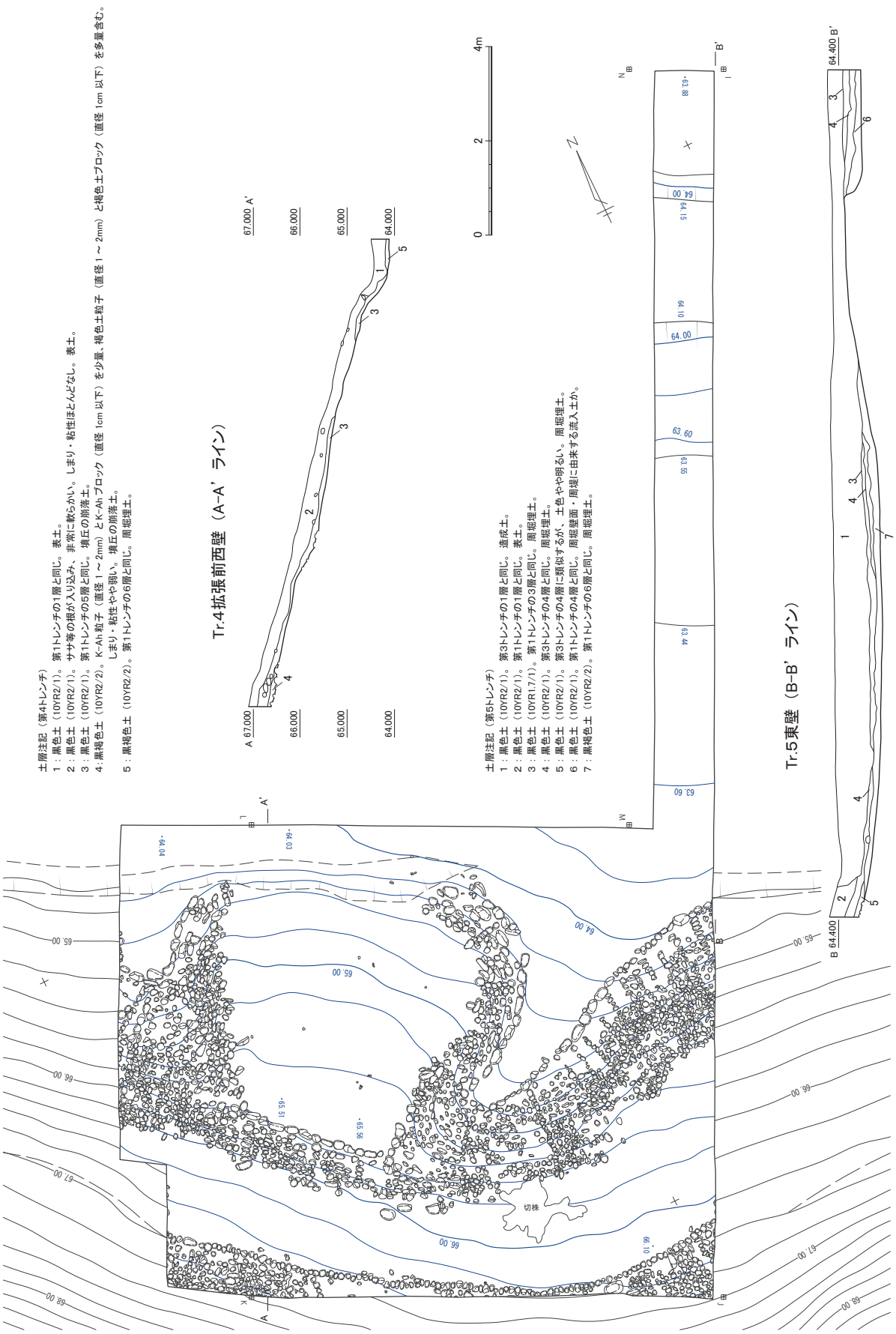
他に縄文土器・石器、陶磁器類が少量出土した。このうち須恵器高杯と考えられる脚部片（第28図5）や須恵器甕胴部片（第28図18）を掲載した。

（2）第2トレンチ（第7図，図版8・9）

後円部南西側において主軸線と直行する方向で設定した。幅は1.3 m、長さは当初13.8 mであったが、最終的に墳丘側へ1.0 m拡張した。表土を除去すると、墳裾に近い側は当初のトレンチ端部から約7.4 mまでは黒色土となり、その先にはKr-Kbを含む地山の暗褐色土層が露出したため、黒色土の範囲を第1周堀と考えたが、掘り下げの結果、黒色土の堆積が他のトレンチと異なり大きく乱れていることや底面も整っていないことから、後世に大きな撹乱を受けたと判断した。8・9層の状況から第1周堀は本来存在したと考えられるが、この部分での規模・形状は明らかにできない。ただし、地山の残存状況からすると、南西側へ大きく広がることはない。撹乱の時期や意図は不明である。土層断面の検討により、墳裾が大きく削られていることが判明したため、トレンチを墳丘側へ1.0 m拡張したところ、葺石が一部残存していることを確認できた。出土遺物は陶磁器・瓦片などが多数を占め、土師器や縄文土器の破片が少量出土した。

（3）第3トレンチ（第8図，図版10）

後円部北東側において主軸線と直行する方向で設定した。幅は1.3 m、長さは7.9 mである。前方部から後円部にかけて墳裾が直線的に切られている北側にあたるが、これと近い形で墳丘や第1周堀の埋土が切られている状況が確認できた。風土記の丘として整備される以前の畑地耕作等に伴う改変と考えられる。堆積は第1トレンチと概ね同様であるが、地形改変の影響や梅の木を避けた未掘部分により、第1周堀の形状は明らかにできなかった。葺石が一部残存し、区画列石らしい部分もあるが、基底石は失われていた。出土遺物は縄文土器・石器、土師器・須恵器、陶磁器類で、このうち須恵器甕胴部片（第28図16）、器台の脚部片（第28図10）を掲載した。



第9図　第4～6トレンチ（Tr.4～6）実測図（S=1/120）

（4）第４～６トレンチ（第９・10図，図版11・12）

左くびれ部において、造り出しの有無や規模、構造を確認するために設定した。当初は造り出しがあった場合に、墳丘の前方部側と後円部側それぞれに接続すると見込んだ箇所に第４・第５トレンチを設定して掘削を開始したが、墳丘斜面から造り出し斜面にかけて巡る葺石を検出するに至ったため、両トレンチ間を第６トレンチと位置づけ、３つのトレンチを連結した面的調査へと移行した（第６図）。最終的には造り出しを中心に南北幅10.0 m、東西幅12.0 mの長方形トレンチとなり、西側縁部に南北幅7.0 m、東西幅1.0 mの拡張区、東側縁のラインを北方向へ延長する形で幅1.3 m、長さ16.0 mの拡張区が取り付いた形となった。

まず、北側の拡張区（第５トレンチ）で確認できた状況について整理しておきたい。表土（２層）および第３トレンチでも見られた造成土（１層）を除去すると、墳裾に近い側の拡張区端部から約10.7 mまでは黒色土、その先には地山のK-AhやK-Ah下位の黒褐色土層が露出した。さらに拡張区端部から約13.2 mのところでも地山が途切れ黒色土となった。このうち墳裾付近の黒色土は第１周堀として掘りあがった。基底石外縁から約5.8 mに傾斜変換点があり、ここからが周堀底面と考えられる。つづいて基底石外縁から約9.4 mのところで周堀が立ち上がり始める。基底石外縁から残存する第１周堀外縁部までの幅は約12.2 mであるが、やはり地山削平の影響があるため、本来の幅はもう少し広かった可能性が高い。墳裾から離れた側の黒色土も、ここでは約40cmのはっきりした落ち込みとして掘りあがった。このため、第２周堀の可能性は高いと考えたが、2016（平成28）年度に第５トレンチ北端部の延長方向に設定した第17トレンチの調査において、第２周堀であることを確定した。第１・第２周堀間は現状幅が約2.6 mで、土層堆積状況から周堤が存在した可能性がある。

くびれ部の屈曲はかなり緩やかであり、造り出しはやや前方部に寄った箇所に位置する。この付近の基底石は大ぶりな円礫を横使いしている。造り出しは想定されるテラス面よりも約1.0 m下がった部分に取り付いており、接続する部分では造り出しの上面にも基底石が並んでいる。後世の撹乱で先端部が欠損しているが、全体として残存状態は良好である。先端部でK-Ahの堆積が確認できたため、削り出した地山をベースとして盛土・葺石が施されていることが判明した。この点から、造り出しは墳丘築成後の後付けではなく、当初から一体的に造られたと判断した。造り出しの上面は現状で約12°の傾斜があり、特に先端部付近では盛土が流失していると考えられるが、墳丘寄りの部分を中心に土師器片が少量見られた。

墳丘の葺石も比較的良好な状況であり、一段目斜面では区画列石も多く見られた。列石間の心々距離は、狭いところで約35cm、広いところで約55cmである。二段目斜面の基底石も前方部から後円部までなだらかな曲線を描く。一段目と異なり、二段目の基底石は比較的小ぶりな円礫を立てるように埋め込んでいる。

トレンチ面積が最も大きいため出土遺物も多く、縄文土器・石器、土師器・須恵器、陶磁器類などがある。周堀底面では縄文時代早期の土器や赤化礫がK-Ah下位の黒褐色土層に多数含まれており、付近に集石遺構が存在する可能性は高い。須恵器甕胴部片（第28図15・19・22）、高杯形器台の杯部片（第28図８・12）のほか、造り出し上面から出土した土師器壺口縁部片（第28図１）・高杯脚部（第28図２）を掲載した。

※ 1～10 は造り出し上面出土土器
※ 1は第 28 図2（土師器高杯脚部）

第 10 図　第4～6トレンチ（Tr.4～6）造り出し実測図（S=1/60）

（5）第７・８トレンチ（第11図）

後円部墳頂の形状や大正調査坑の位置を確認するためのトレンチである。第７トレンチは墳頂中心から南東および北東方向へＬ字形に、第８トレンチは墳頂中心から南西方向に凝灰岩製標柱を避ける形で設定した。幅はどちらも1.3ｍで、長さは第７トレンチが墳頂中心側のコーナーから南東へ7.0ｍ、北東へ5.0ｍ、第８トレンチが3.7ｍである。ササ等の根が密に入り込んだ表土（１層）が約10～30cm被っていたが、それを除去するとK-AhからKr-Kbを含む暗褐色土付近の地山ブロックが混じった土が露出した。これを墳丘盛土の上面と考えたが、第７トレンチでは墳頂中心付近でK-Ahのブロックを周囲より多く含む部分があり、精査の結果、大正調査坑の埋め戻し土と判断した。第８トレンチ側では墳頂側の端部から約1.6ｍの付近で土が変化する印象があり精査を行ったが、ササ根の影響が大きく、大正調査坑の平面プランを明確に認識できなかった。2015（平成27）年度に設定した第11トレンチでは、第８トレンチの調査時に想定した位置に近いところで大正調査坑が検出された（第12図）。第７トレンチでは南東方向（主軸線方向）のトレンチ端部において、現況の墳頂面から約1.9ｍ低いところで二段目斜面の葺石が残存することを確認した。ただし、墳頂平坦面も中心から周囲に向かって緩やかに傾斜している状況であり、墳丘平坦面から肩部にかけての盛土が大きく崩落していると考えられた。

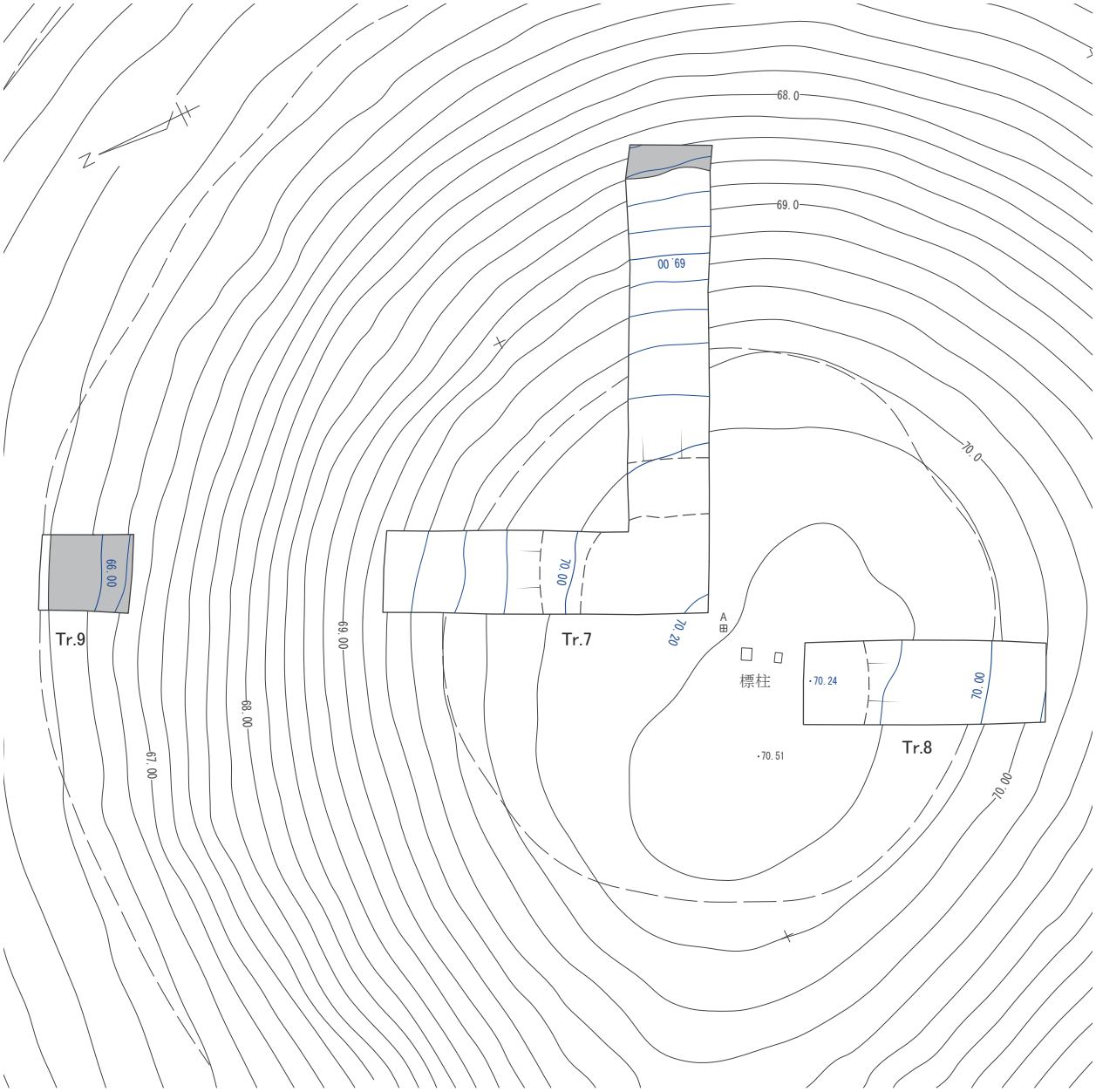
１層のみの掘削であったことから、出土遺物は非常に少なかった。第７トレンチでは、表土直下で碧玉製管玉（第28図25）が出土したが、これは大正調査で出土した管玉19点と一連のものである可能性が高い。その他には縄文土器片が少量出土したのみである。第８トレンチからの出土遺物はなかった。

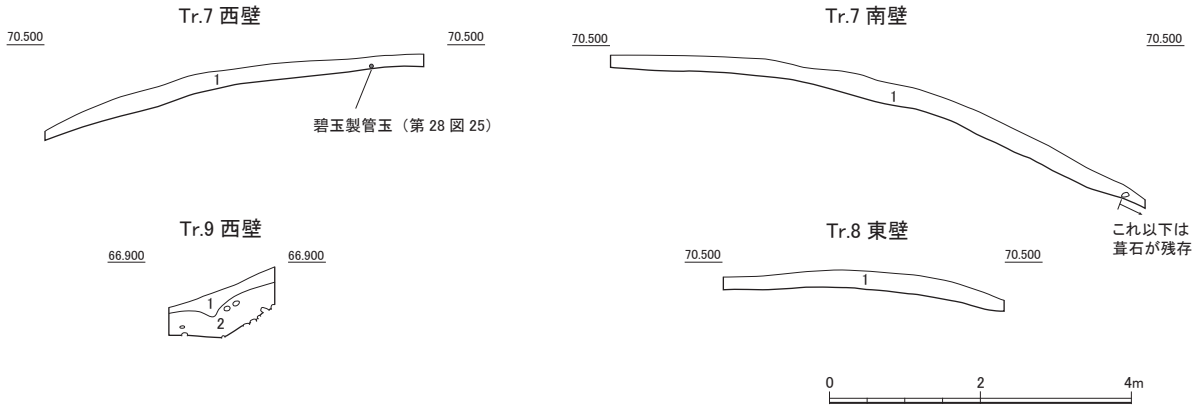
（6）第９トレンチ（第11図，図版13）

後円部二段目斜面の葺石残存状況を確認するためのトレンチである。第３・７トレンチの間にあり、後円部中央を通り主軸線と直行するラインを形成する。幅1.2ｍ、長さ1.3ｍの小規模なトレンチであったが、先述した墳丘肩部付近の盛土崩落により、比較的早い時期に葺石が埋没したと考えられ、葺石を良好な状態で確認できた。葺石は、後円部二段目斜面の基底石・区画列石の一部を確認した。葺石の密度は低く、まばらに埋め込まれている状態である。二段目斜面の立ち上がりは、基底石内縁から約45cmは水平というよりも約３°の非常に緩い勾配でいったん低くなり、そこから斜面が約30°の勾配で立ち上がる。出土遺物は縄文土器の細片が数点あったのみである。

（7）第10トレンチ（第19図，図版26）

当初は第３トレンチを長く設定する計画であったが、延長上に梅の木があったため、間隔を4.0ｍ空けて第10トレンチとして設定した。トレンチ南西端部（墳丘寄り）から約1.0ｍのところで地山のK-Ahが途切れ黒色土となったが、ここも第５トレンチと同様に約40cmのはっきりした落ち込みとして掘りあがった。2016（平成28）年度には、第10トレンチと連結する形で第16トレンチを設定し、第10トレンチも再発掘を行い、第２周堀の形状を把握した。出土遺物は、縄文土器・石器、土師器・須恵器、陶磁器類、瓦などである。





土層注記（第7～9トレンチ）
1：黒色土（10YR2/1）。第4トレンチの2層と同じ。
2：黒色土（10YR2/1）。K-Ah ブロック（直径 1 ～ 20cm）を少量、転落した葺石と考えられる円礫（直径 10 ～ 20cm）を多量含む。しまりやや弱い。粘性弱い。墳丘の崩落土。

第 11 図　第7～9トレンチ（Tr.7～9）実測図（S=1/100）

（8）第11トレンチ（第12～15図、図版14～18）

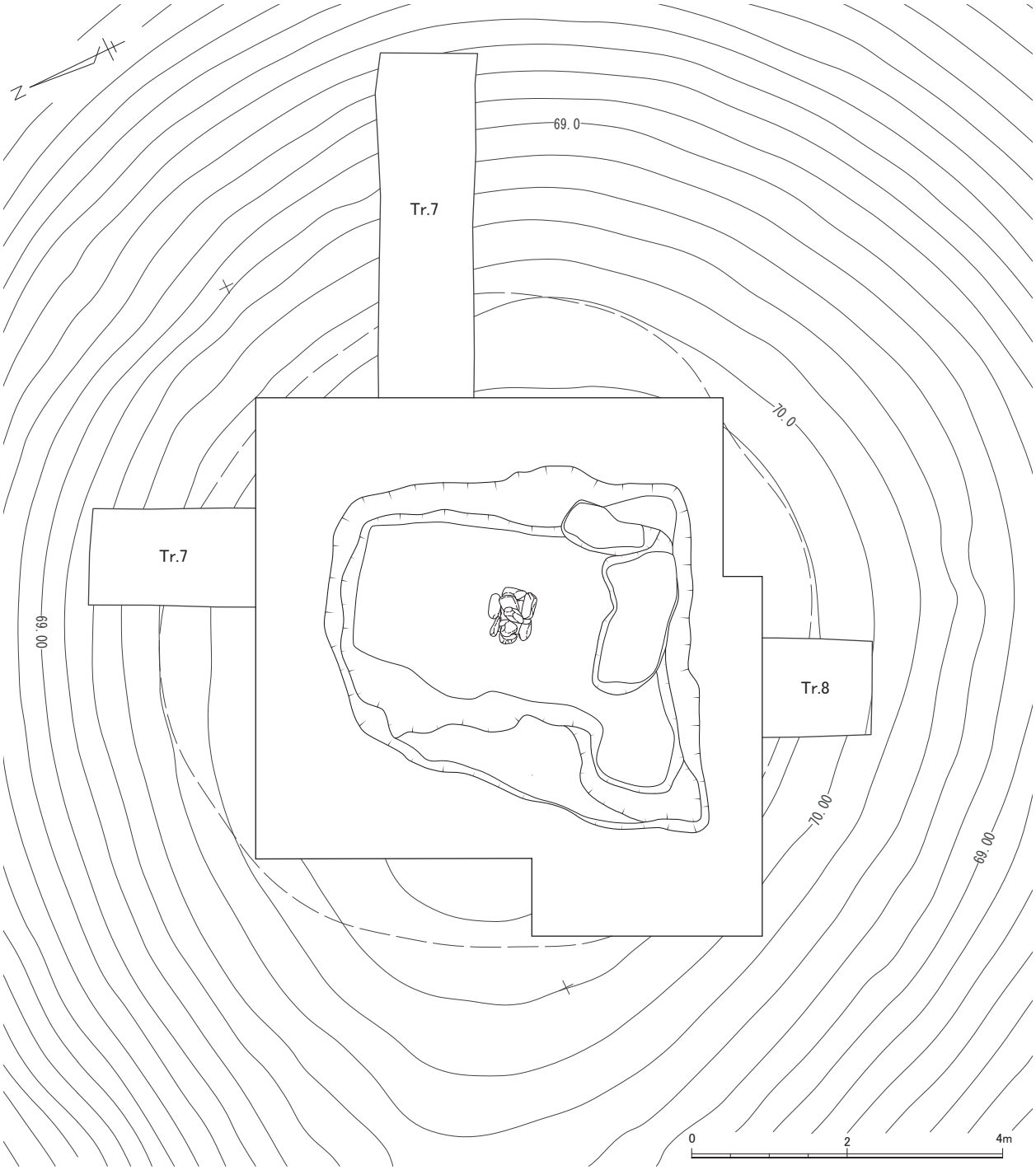
2014（平成26）年度に、第７・８トレンチで一部確認していた後円部墳頂の大正調査坑を全面検出し、再発掘するために設定した。墳頂中心を基点に主軸方向およびその直行方向に沿って四方に3.0ｍずつ幅を取り、一辺6.0ｍの正方形を作り、北西面には幅1.0ｍ、長さ3.0ｍの拡張区、南西面には幅0.5ｍ、長さ3.6ｍの拡張区を設けた。

まず、ここで1917年３月に刊行された報告書（『宮崎縣西都原古墳調査報告書』、以下『大正報告』と表記）における後円部大正調査坑の調査概要を整理しておきたい。

①縦10尺、横18尺の一区を画し、表土を除去して発掘に着手。
②深さ約４尺にして、南西壁付近に直刀の一部を発見。
③その部分を南方に２尺拡張したところ、鏡１・管玉19・直刀３・刀子２を発見。
④さらに精査を継続し、前方（北西側）２尺余にわたり鉄鉾１・鉄鏃多数を発見。
⑤遺物の出土した場所をさらに１尺余掘り下げたが、棺槨などの形跡なし。
⑥副葬品全体は主軸に沿って前後に長く、７尺にわたって出土した。
⑦後円部墳頂中心から約６尺南に偏した位置に鏡がある。
⑧埋葬主体部の調査後、墳丘中央部の掘削を続行し深さ約６尺に近づいたが、埋葬の形跡なし。

大正調査坑の再調査は、上記の成果を踏まえながら行った。大正調査は２日間で実施され、後述するように埋め戻しまでの期間も１か月程度と比較的短いことと、埋め戻しの際には掘り上げた土をそのまま戻した可能性が高いことなどから、大正調査坑の平面プランを確定する作業は非常に困難であった。直射日光の下では土の区別がつかないため、曇天時や日没直前の時間を利用して精査を行った。精査の結果、南北幅で約4.7ｍ、東西幅は北側で約3.0ｍ、南側で約4.5ｍの台形状のプランを検出した。これを①の規模と比較すると北側の東西幅はよく合うが、南北幅の差が大きい。この点が疑問であったが、位置や形状は『大正報告』に掲載された図（本書の第３図として転載）とよく合うことや、③・④・⑦などの諸点からすると大正調査坑がさらに南側へ広がる可能性は低いと考えられ、しかし北側へ広がるとなれば墳頂平坦面を越え墳丘斜面にまで及ぶことになり、かえって『大正報告』の図とも齟齬をきたす可能性があるため、検出プランのまま掘削に着手した。最終的には周囲の壁面が本来の墳丘盛土とみられる硬くしまった層となったため、これが本来の形状であったと判断した。

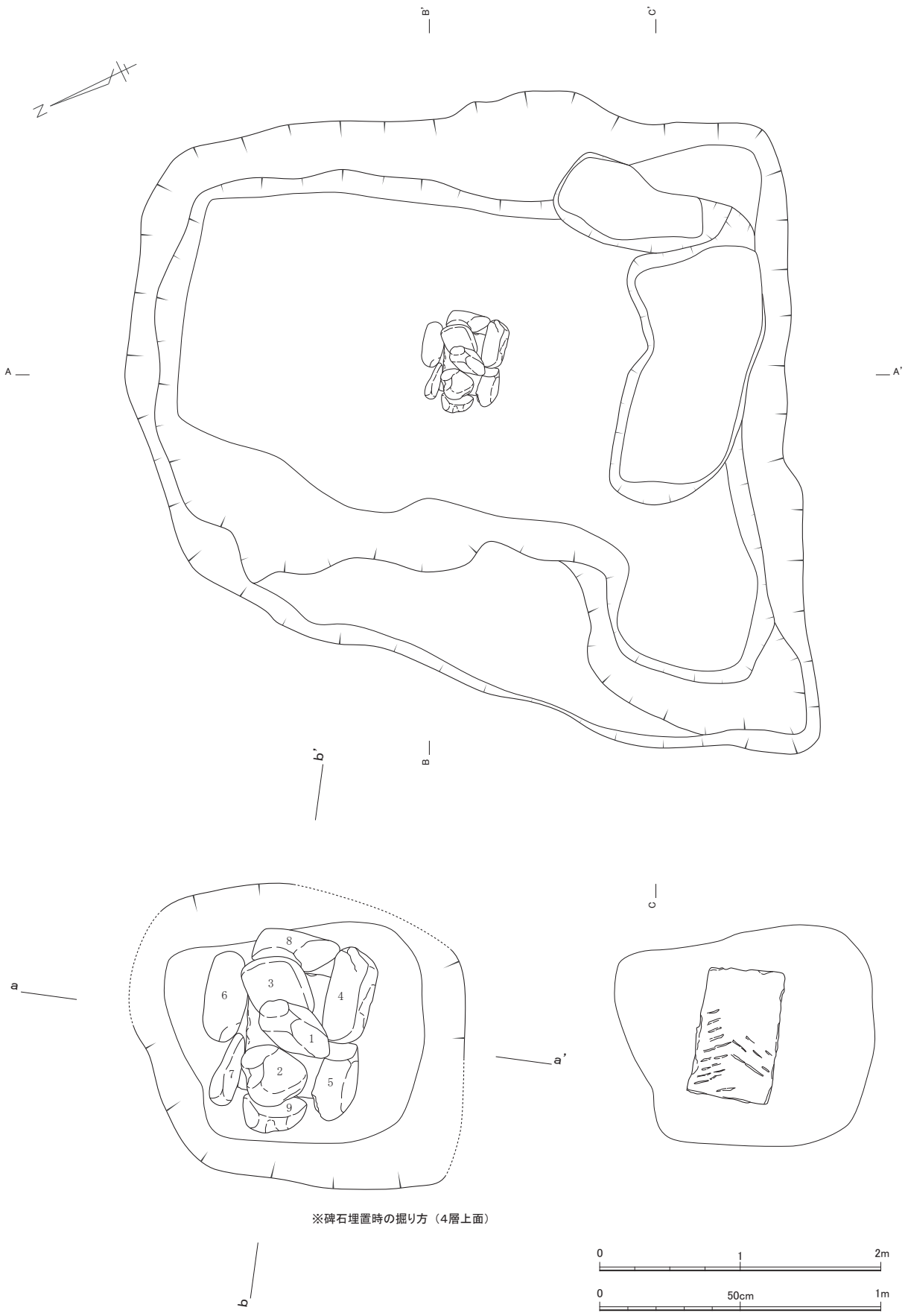
墳頂面から約70cm掘り下げた時点で、墳頂中心付近に長径25～35cmの大ぶりな円礫が集積されたような状態で顔を出し、既往の調査成果から大正調査終了後に埋設された碑石を被覆したものと判断した。円礫は全部で９点あり、長方形の碑石の短辺側に各１点、長辺側に各２点が添えられ、上面に３点が載せられていた。これらの円礫を外すと、碑石が露出した。碑石は主軸線よりやや南東に偏した方向に長軸を向け、北東の長辺側が僅かに沈みこむものの、ほぼ水平を保っていた。刻字面を上に向け、文字頭を前方部側（北西方向）に向けて置き、同大の蓋石をぴったり合わせてあった。被覆礫の底面レベルは碑石の蓋石とほぼ同じであることから、碑石安置後にいったん土を入れ



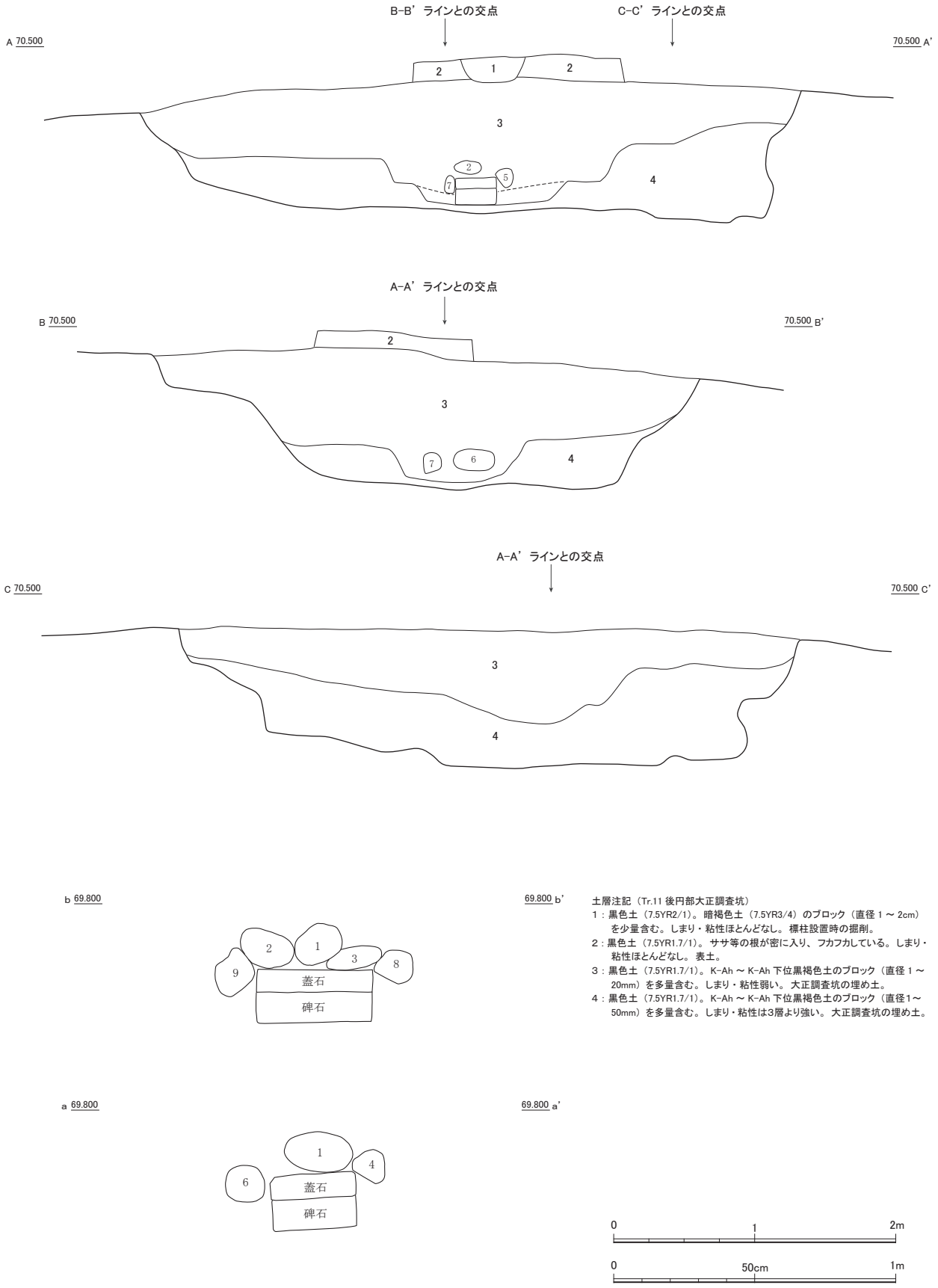
第 12 図　第 11 トレンチ（Tr.11）実測図（S=1/80）

て、碑石本体が隠れた時点で被覆礫を積んだと考えられる。大正調査坑の埋土が、被覆礫底面付近を境として分層できることも、上記の埋め戻し過程を裏付ける。碑石や被覆礫の特徴は、同時期に調査された無号Ｂ塚（現：西都原 284 号墳）で出土したものと酷似する。

碑石が安置されたレベルまで掘り下げる中で、大正調査坑の南半部を中心に鉄製品の破片が散布した状態で検出された。ほとんどは鉄鏃の細片であったが、刀の柄や茎の破片も含まれている。これらの鉄製品破片を取り上げながら精査を進めると、墳頂面から約 1.2 m 掘り下げた時点で破片が見られなくなり、K-Ah ブロックを多く含む硬質な土となった。南側の壁際は碑石安置面より窪んだ状態であった。④・⑤の点からすると、この部分はやや浅すぎるように思えたが、鉄製品の破片



第 13 図　第 11 トレンチ（Tr.11）後円部大正調査坑実測図（全体図 S=1/40, 碑石 S=1/20）



土層注記（Tr.11 後円部大正調査坑）

1：黒色土（7.5YR2/1）。暗褐色土（7.5YR3/4）のブロック（直径 1 ～ 2cm）を少量含む。しまり・粘性ほとんどなし。標柱設置時の掘削。

2：黒色土（7.5YR1.7/1）。ササ等の根が密に入り、フカフカしている。しまり・粘性ほとんどなし。表土。

3：黒色土（7.5YR1.7/1）。K-Ah ～ K-Ah 下位黒褐色土のブロック（直径 1 ～ 20mm）を多量含む。しまり・粘性弱い。大正調査坑の埋め土。

4：黒色土（7.5YR1.7/1）。K-Ah ～ K-Ah 下位黒褐色土のブロック（直径1～50mm）を多量含む。しまり・粘性は3層より強い。大正調査坑の埋め土。

第 14 図　第 11 トレンチ（Tr.11）後円部大正調査坑土層断面図（全体図 S=1/40，碑石 S=1/20）

は底面付近から約30cmまでの間に集中し、底面の形状自体は記述とも合致する点が多いため、これを大正調査坑の南半部における底面と判断した。

⑧によると、碑石の下を中心として墳丘面から約1.8ｍ付近まで掘り下げている。これは発見された埋葬主体部が墳丘中心から南側へ大きく偏っているため、中央部にもう一つの埋葬主体部が存在する可能性を考慮したことによる。発見された埋葬主体部が非常に浅い位置にある点からも、中央部に埋葬主体部が存在する可能性は高いと考えるが、大正調査の深掘りでも到達していないことから、かなり深い場所に位置するようである。今回の調査では、大正調査坑の壁面で埋葬主体部の掘り込みプランを検出できなかったことと、先述したように大正調査の掘削で副葬品等の出土が皆無であったことなどに加え、遺構保護の観点も考慮して碑石以下の掘削は行わなかった。

出土遺物は、大正調査坑底面付近から鉄製品破片が出土したほか、埋土中から縄文土器・石器、土師器、碧玉製管玉（第28図24）が出土した。土師器はほとんどが甕の破片と思われるが、細片で量も少ないことから、古墳に伴うものとは考えられない。鉄鏃破片は、鏃身に透かしのあるやや大きめの鉄鏃と長頸鏃があり、大正調査の出土遺物とほぼ合致する（図版59）。碑石（第29図右）は古墳名や調査の経緯、調査者の氏名などを記したもので、大正調査当時の宮崎県知事堀内秀太郎が製作させたものである。「大正六年二月」とあり、さらに埋め戻し完了後に設置された凝灰岩製標柱にも「大正六年一月調査」「同年二月復舊」とあることから、１月８日に終了した発掘調査の成果を元に碑石を製作し、２月になって埋め戻しが行われたことが分かる。埋め戻しの正確な日時は不明であるが、調査終了から埋め戻しまでの期間は１か月程度であったと推定する。

（９）第12トレンチ（第16図，図版19～21）

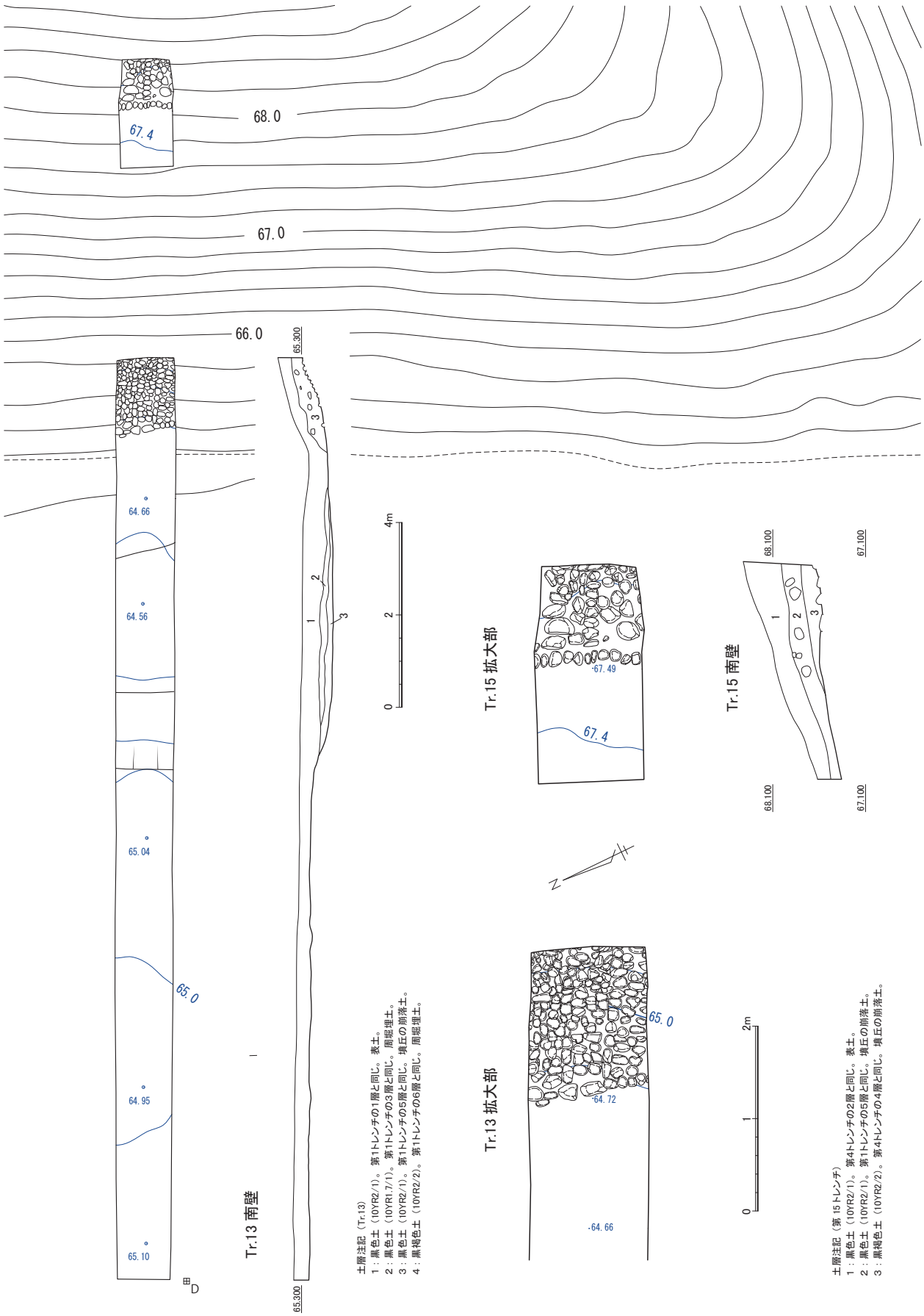
前方部北東側において主軸線と直行する方向で設定した。2014（平成26）年度の第５・10トレンチで検出されていた落ち込みが第２周堀であるのかを確定するため、幅は1.3ｍ、長さは26.0ｍと長めに設定した。第３・第５トレンチと同様に墳裾が直線的に切られている箇所であるが、やはり墳丘や第１周堀の埋土が切られている状況が確認できた。１層除去後にコンクリート製のＴ字形標柱を設置するために掘られた溝の一部を検出した。墳丘寄りのトレンチ端部では、葺石が残存しており、基底石や区画列石の一部が確認できた。基底石はくびれ部付近と同様に長径約40cmの大ぶりな円礫を横使いしている。土層断面を記録したトレンチ東壁側では、基底石外縁から約3.3ｍのところで周堀底面となり、底面は基底石外面から約6.8ｍのところで立ち上がる。そして、基底石外縁から約12.0ｍのところに傾斜変換点があり、ここが残存状態での第１周堀上端である。この上端付近はK-Ah下位の黒褐色土が露出していたが、第１周堀の上端から約3.7ｍのところで途切れ、黒色土となった。この黒色土は約5.5ｍ続き、その先は再び黒褐色土の地山となった。黒色土を掘削すると浅い溝状に掘りあがったため、第２周堀と確定した。出土遺物は、縄文土器、土師器・須恵器、陶磁器類、瓦片などで、そのうち須恵器杯蓋（第28図３）と須恵器甕か高杯形器台の口縁部片（第28図13）を掲載した。

第 15 図　第 11 トレンチ（Tr.11）後円部大正調査坑出土鉄製品分布図（S=1/40）

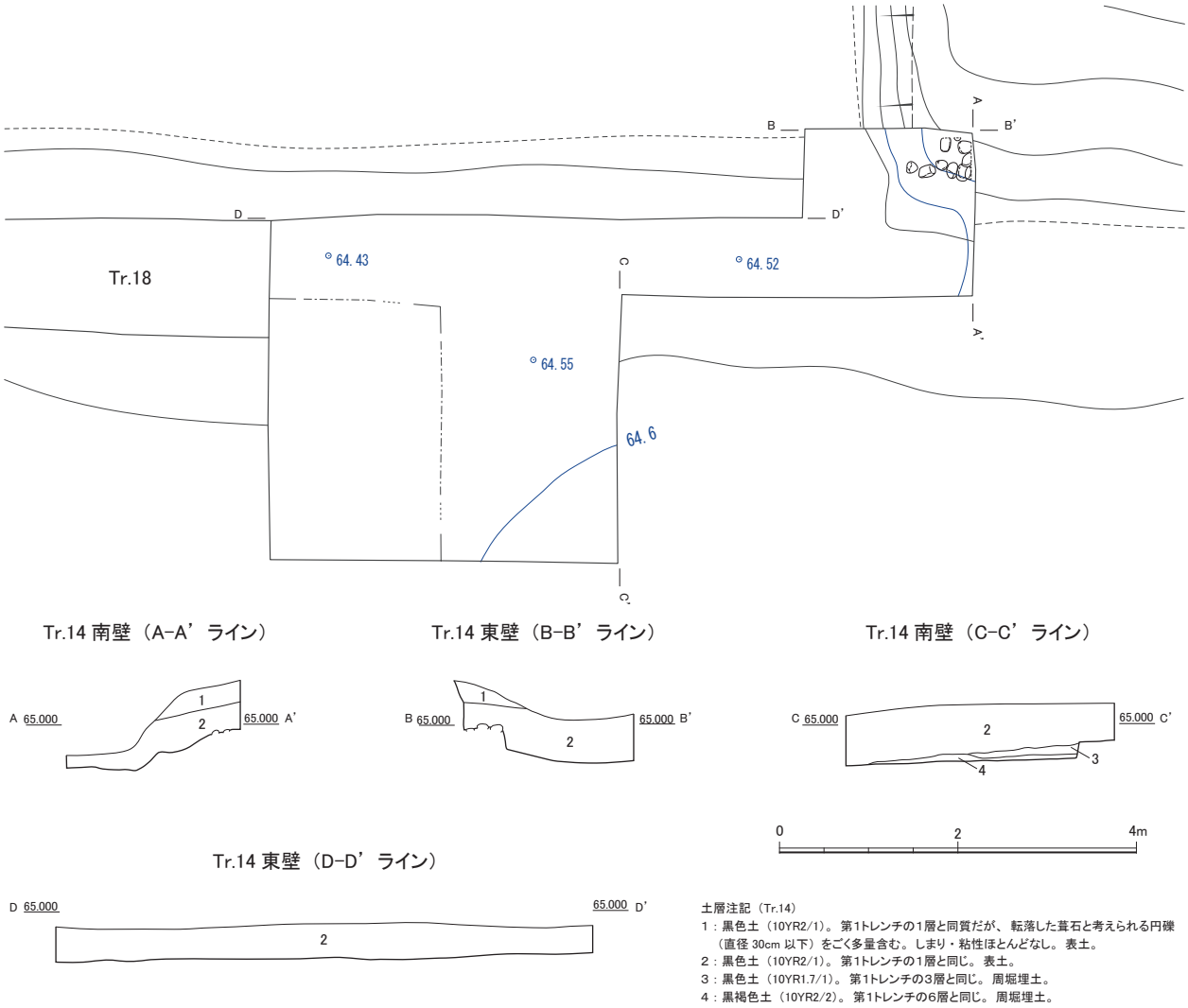
(10) 第 13 トレンチ（第 17 図，図版 22・23）

前方部北西側（前面中央）において主軸線に沿った方向で設定した。幅は1.3 m、長さは20.0 mである。墳丘寄りのトレンチ端部で残存状態が良好な葺石を確認した。基底石は小ぶりな円礫を立てるように埋め込んでいる。区画列石は明瞭なものがトレンチ中央よりやや南寄りに１箇所あり、北側にもう１箇所可能性のある部分が認められた。これが区画列石である場合、両者の心々距離は約50cmとなる。区画列石は主軸線に対してやや南東に偏向しながら上っている。

第 16 図　第 12 トレンチ（Tr.12）実測図（S=1/80）



第 17 図　第 13・15 トレンチ（Tr.13・15）実測図（全体図 S=1/120，拡大部 S=1/60）

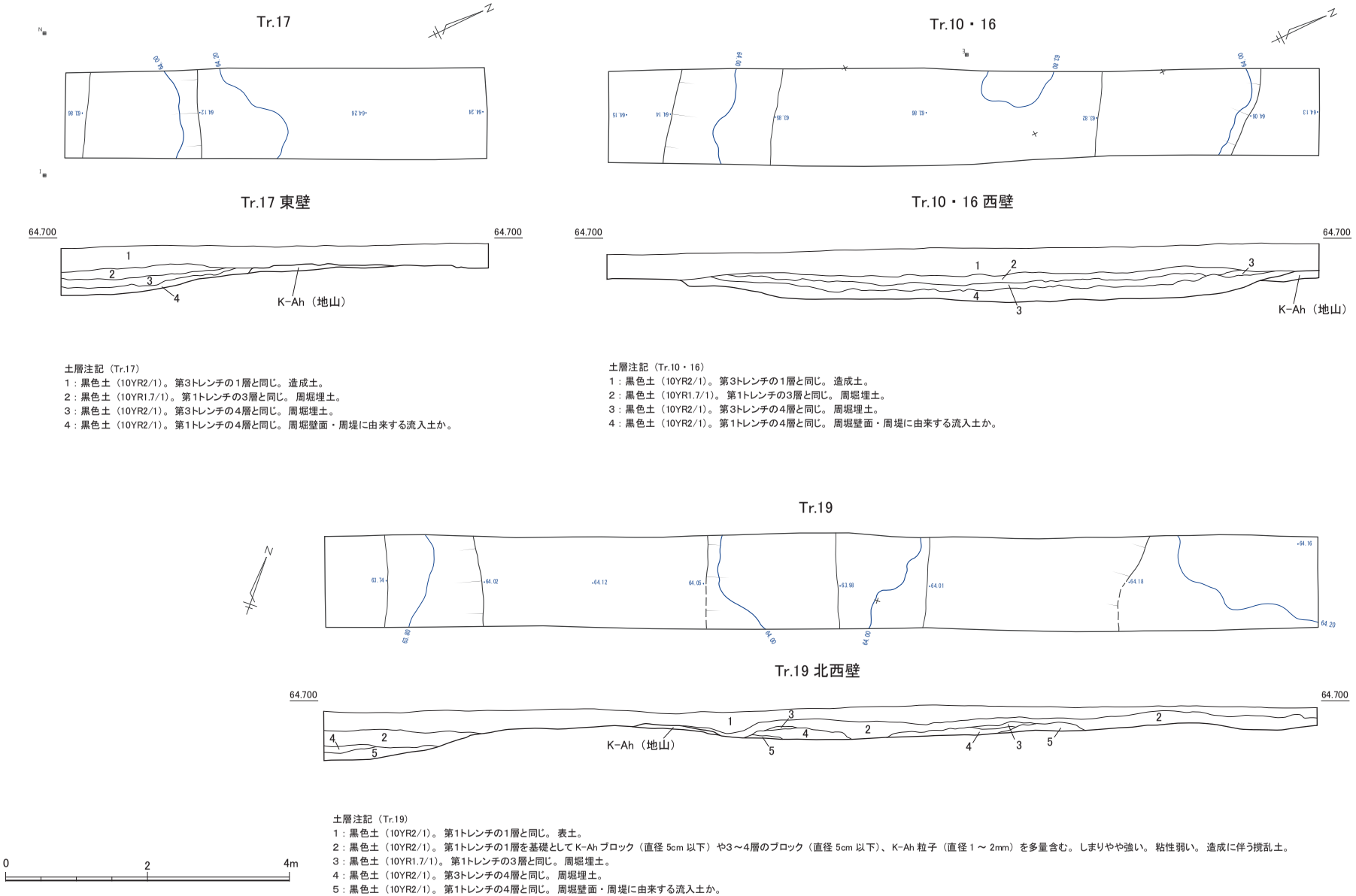


第 18 図　第 14 トレンチ（Tr.14）実測図（S=1/80）

土層断面を記録したトレンチ南壁側では、基底石外縁から約2.5 mのところで周堀底面となり、底面は基底石外縁から約5.6 mのところで立ち上がる。そして、基底石外縁から約7.3 mのところに傾斜変換点があり、ここが残存状態での第１周堀上端である。その先はK-Ahがトレンチ端部まで続くことから第２周堀は前方部前面中央まで巡らないことが明らかになった。墳丘の傾斜は、基底石内縁から約60cmまでは約13°と比較的緩やかで、その先は約25°となる。出土遺物は、縄文土器、須恵器・土師器、陶磁器類の破片がある。

(11) 第14トレンチ（第18図，図版25）

前方部左隅角部の残存状態を確認するためのトレンチである。現況墳丘の隅角部分にかかるよう一辺2.0 mの正方形で設定したが、墳丘が大きく削られており、手がかりがあまり得られなかったため、2.0 mの間隔をおいて一辺4.0 mの正方形を再設定し、それらを連結して一つのトレンチとした。拡張した一辺4.0 mの正方形部分では、墳丘から遠い側の北西面端部に近づくにしたがい、Kr-Thを含む黒色土（３層）が残存しており、第１周堀の痕跡であることが判明した。墳丘に近い範囲では表土直下でK-Ah下位の黒褐色土が地山として露出した。各トレンチにおける基底石のラインなどを手がかりに復元した左隅角部は、第14トレンチよりもやや南東寄りの部分に想定されることと



土層注記（Tr.17）
1：黒色土（10YR2/1）。第3トレンチの1層と同じ。造成土。
2：黒色土（10YR1.7/1）。第1トレンチの3層と同じ。周堀埋土。
3：黒色土（10YR2/1）。第3トレンチの4層と同じ。周堀埋土。
4：黒色土（10YR2/1）。第1トレンチの4層と同じ。周堀壁面・周堤に由来する流入土か。

土層注記（Tr.10・16）
1：黒色土（10YR2/1）。第3トレンチの1層と同じ。造成土。
2：黒色土（10YR1.7/1）。第1トレンチの3層と同じ。周堀埋土。
3：黒色土（10YR2/1）。第3トレンチの4層と同じ。周堀埋土。
4：黒色土（10YR2/1）。第1トレンチの4層と同じ。周堀壁面・周堤に由来する流入土か。

土層注記（Tr.19）
1：黒色土（10YR2/1）。第1トレンチの1層と同じ。表土。
2：黒色土（10YR2/1）。第1トレンチの1層を基礎としてK-Ahブロック（直径5cm以下）や3～4層のブロック（直径5cm以下）、K-Ah粒子（直径1～2mm）を多量含む。しまりやや強い。粘性弱い。造成に伴う撹乱土。
3：黒色土（10YR1.7/1）。第1トレンチの3層と同じ。周堀埋土。
4：黒色土（10YR2/1）。第3トレンチの4層と同じ。周堀埋土。
5：黒色土（10YR2/1）。第1トレンチの4層と同じ。周堀壁面・周堤に由来する流入土か。

第19図 第10・16・17・19トレンチ（Tr.10・16・17・19）実測図（S=1/80）

なったが（第30図）、この部分は第14トレンチ周辺よりも約20cm切り下げられており、左隅角部は完全に失われていると判断した。地山の黒褐色土からは、多数の赤化礫が顔を出しており、付近に縄文時代早期の集石遺構が存在する可能性が高い。

出土遺物は、縄文土器・石器、土師器・須恵器、陶磁器類、瓦の破片があるが、このうち須恵器甕の体部片（第28図７）を掲載した。第18トレンチとの接合資料である。

(12) 第15トレンチ（第17図，図版22・24）

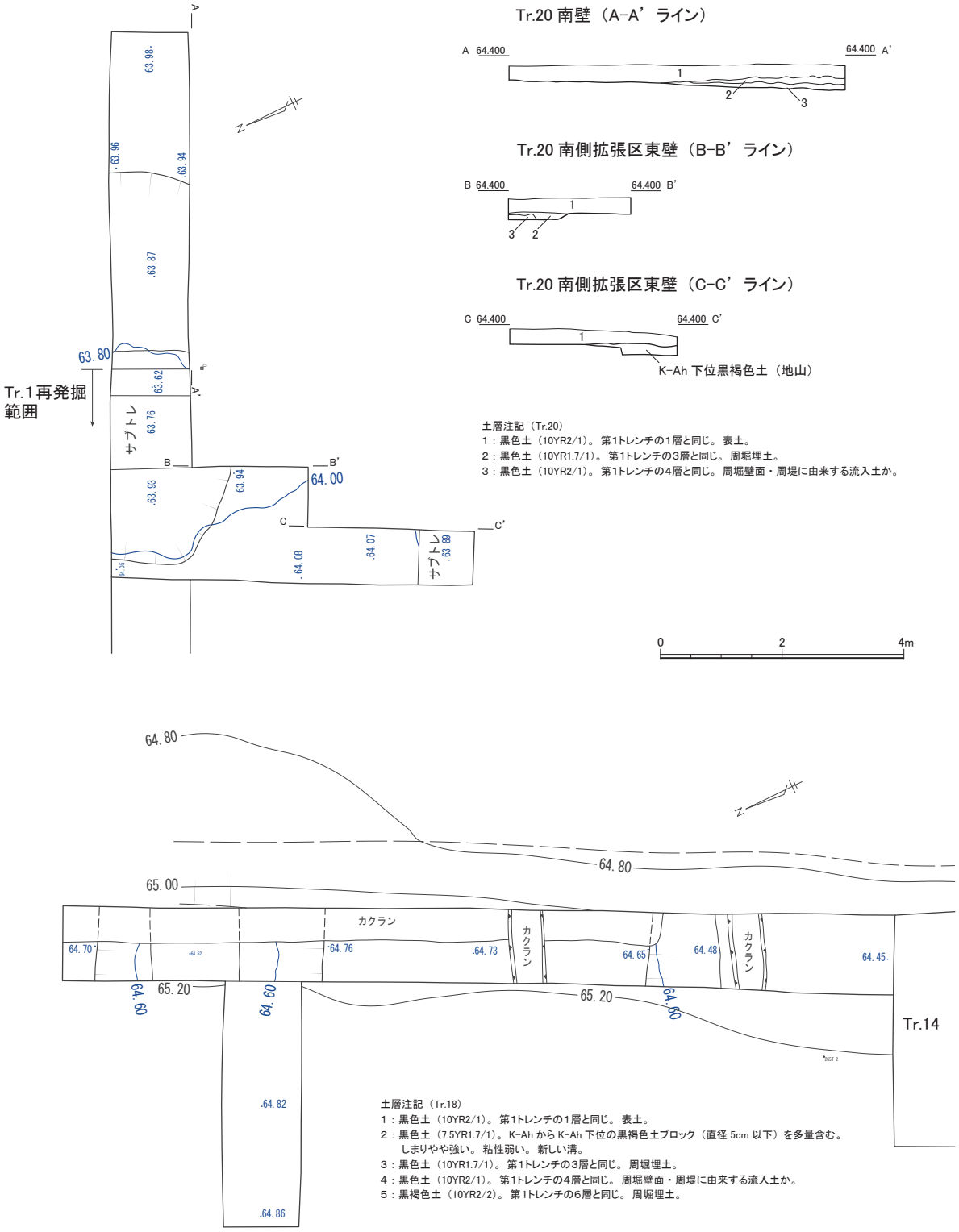
前方部前面において二段目斜面の葺石残存状況を確認するためのトレンチである。第13・24トレンチの間にあり、前方部主軸線上のラインを形成する。幅は1.2 m、長さは2.4 mである。二段目斜面基部付近に設定した他のトレンチと同様、墳丘肩部付近の盛土崩落により、比較的早い時期に葺石が埋没したと考えられ、葺石を良好な状態で確認できた。葺石は、二段目斜面の基底石・区画列石の一部を確認した。基底石は小ぶりな円礫を立てるように埋め込んでいる。トレンチのほぼ中央に区画列石が１箇所あるが、その左右で葺石の密度が異なる。左側は比較的密に石が埋め込まれ、右側はまばらである。二段目斜面の立ち上がりは、基底石内縁から約45cmは約６°の勾配でいったん下がり、そこから約18°の勾配で立ち上がる。出土遺物はなかった。

(13) 第16トレンチ（第19図，図版26）

後円部北東側において第２周堀の形状や規模を確認するためのトレンチである。2014（平成26）年度に設定した第10トレンチを北東側へ5.0 m延長し、第10トレンチも再発掘して第２周堀を検出した。幅は1.3 m、長さは第10トレンチまであわせて10.0 mである。第19図には第10・16トレンチの土層断面を一連のものとして掲載した。土層断面を記録したトレンチ西壁における計測では、残存状態での周堀幅が約8.1 mとなり、後述する第５・17トレンチの第２周堀幅からは急に広がっている。底面幅は約4.5 mである。周堀埋土の下半には、K-AhからK-Ah下位黒褐色土までの地山ブロックを含む層があり、周堤に由来するものかもしれない。出土遺物は縄文土器・石器、土師器・須恵器、陶磁器類、瓦の破片があった。須恵器には古代に下ると考えられるものも含まれる。

(14) 第17トレンチ（第19図，図版27）

2014（平成26）年度調査で、左くびれ部付近に設定した第５トレンチ北端部において検出された落ち込みが、第２周堀であることを確定するためのトレンチである。第５トレンチ北端部から20cmの間隔を空け、幅は1.3 m、長さは6.0 mで設定した。土層断面を記録したトレンチ東壁における計測では、残存状態での周堀幅が約2.7 mで、第５トレンチと合わせた全幅は約5.7 mとなる。第10・16トレンチと同様に、周堀埋土の下半には地山ブロックを含む層がある。出土遺物には、縄文土器・石器、土師器・須恵器、陶磁器類の破片があった。



第 20 図　第 18・20 トレンチ（Tr.18・20）実測図（S=1/100）

(15) 第18トレンチ（第20図，図版28・29）

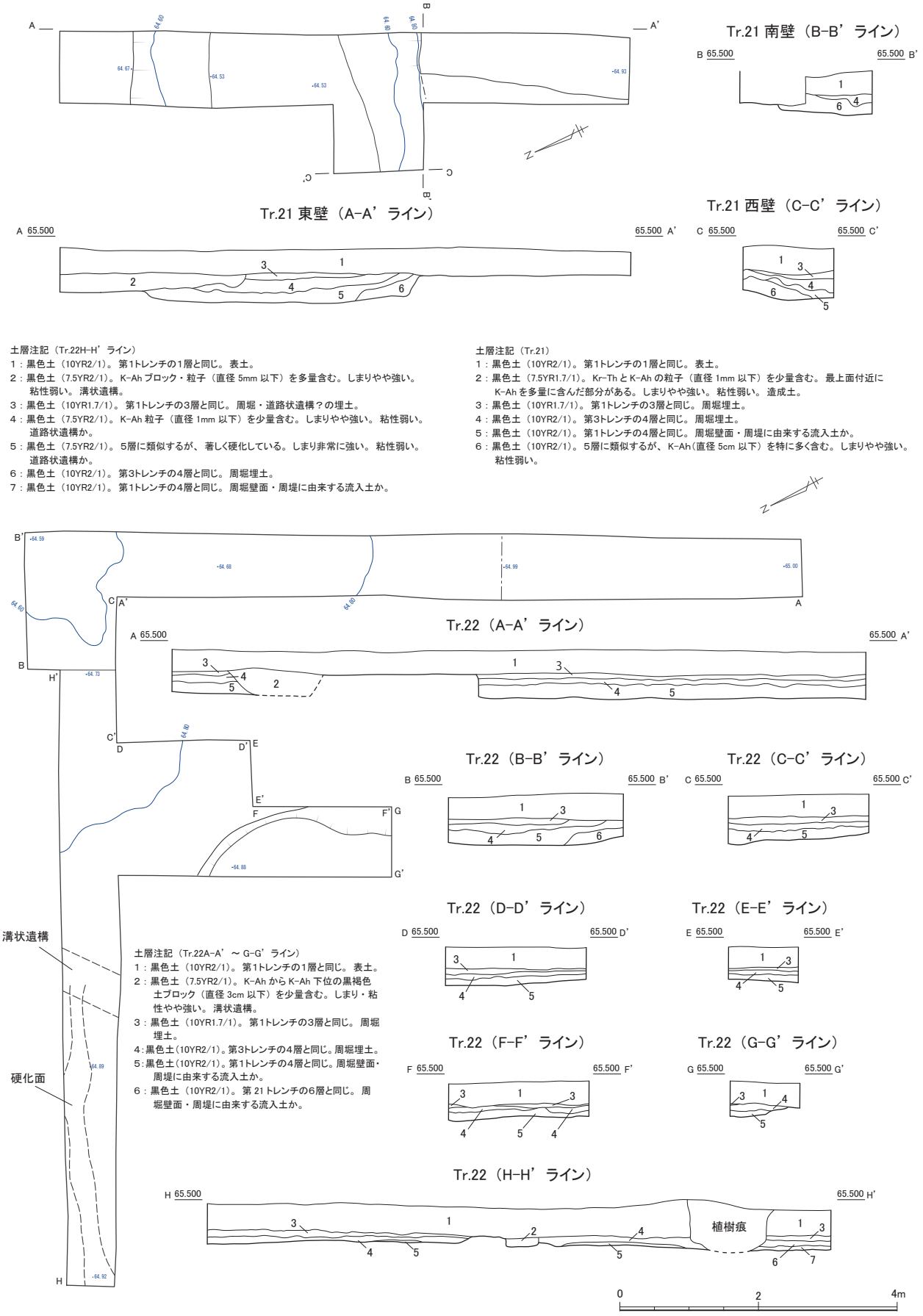
前方部左隅角付近における第１・２周堀の形状・規模を確認するためのトレンチである。第14トレンチを北東方向に延長する形で設定した。幅は1.3 m、長さは13.7 mである。表土（１層）を約40cm除去すると、部分的にK-AhやK-Ah下位の黒褐色土層が地山として露出し、この面で周堀の検出を試みた。畑地造成や耕作に伴うと考えられる浅い溝状遺構が縦横に走っており、残存状態は良くなかったが、トレンチ南西端付近で第１周堀、北東端付近で第２周堀の平面プランを確認した。第２周堀については、トレンチ北東端部から2.7 mのところに北西方向へ幅1.3 n、長さ4.0 mの拡張区を設け、第２周堀がさらに北西方向へと延びていることを確認した。残存状態での第２周堀の上端幅は約3.9 mである。出土遺物は、縄文土器・石器、土師器・須恵器、陶磁器類の破片で、このうち須恵器瑳体部片（第28図７）・甕胴部片（第28図20・21）を掲載した。

(16) 第19トレンチ（第19図，図版30・31）

後円部東側における第１・２周堀の形状・規模を確認するためのトレンチである。後円部の墳頂中心を通り、主軸線と45°の角度で交わるラインに沿って設定した。幅は1.3 m、長さは14.0 mである。表土（１層）を10～30cm除去すると、墳裾に近い側のトレンチ端部から約2.2 mは黒色土で、第１周堀の埋土と判断した。その先は地山のK-Ah層が露出したが、墳丘側トレンチ端部から約5.1 mのところで地山のK-Ahが途切れ、黒色土となった。この黒色土（２層）は直径5cm以下のK-Ahや黒色土のブロックが混じりあった土で、この層自体は撹乱と判断したが、ブロックとなっている黒色土は周堀埋土に由来すると思われたため、精査を行ったところ、本来の第２周堀埋土（３～５層）が残っている箇所が確認できた。第２周堀の埋土は、最も残りの良いところでも約20cmしかない。先述した撹乱の影響もあるが、第19トレンチにおける第１周堀と第２周堀の底面には約25cmの標高差があることから、東へ進むにしたがい第２周堀が急に深さを減じていることが分かる。出土遺物は、縄文土器・石器、土師器・須恵器、陶磁器類、瓦などの破片で、このうち須恵器の器台脚部片（第28図９・11）・甕胴部片（第28図17）を掲載した。

(17) 第20トレンチ（第20図，図版32・33）

2014（平成26）年度調査で、後円部南東側の主軸線上に設定した第１トレンチ端部において検出された落ち込みが、第２周堀であることを確定するためのトレンチである。第１トレンチを南東側へ5.5 m延長し、第１トレンチも3.5 m分を再発掘した。この時点では幅は1.3 m、長さは第１トレンチまであわせて9.0 mである。新たに掘削した部分で黒色土（２層）が途切れて地山のK-Ahとなったことから、この部分も第２周堀と確定した。残存する第２周堀の上端幅は、トレンチ南壁側で約6.1 mであった。第２周堀の延長方向を確認するため、トレンチ西端部から南側に一辺2.0 mの拡張区を設定して精査したところ、周堀の末端部が確認できた。最後に旧地形や土層堆積状況を確認するため、幅1.0 m、長さ3.0 mの拡張区を設定・掘削した。出土遺物は縄文土器・石器、土師器・須恵器、陶磁器類の破片が見られたが、量は非常に少なかった。



土層注記（Tr.22H-H’ ライン）
1：黒色土（10YR2/1）。第1トレンチの1層と同じ。表土。
2：黒色土（7.5YR2/1）。K-Ah ブロック・粒子（直径 5mm 以下）を多量含む。しまりやや強い。粘性弱い。溝状遺構。
3：黒色土（10YR1.7/1）。第1トレンチの3層と同じ。周堀・道路状遺構？の埋土。
4：黒色土（7.5YR2/1）。K-Ah 粒子（直径 1mm 以下）を少量含む。しまりやや強い。粘性弱い。道路状遺構か。
5：黒色土（7.5YR2/1）。5層に類似するが、著しく硬化している。しまり非常に強い。粘性弱い。道路状遺構か。
6：黒色土（10YR2/1）。第3トレンチの4層と同じ。周堀埋土。
7：黒色土（10YR2/1）。第1トレンチの4層と同じ。周堀壁面・周堤に由来する流入土か。

土層注記（Tr.21）
1：黒色土（10YR2/1）。第1トレンチの1層と同じ。表土。
2：黒色土（7.5YR1.7/1）。Kr-Th と K-Ah の粒子（直径 1mm 以下）を少量含む。最上面付近に K-Ah を多量に含んだ部分がある。しまりやや強い。粘性弱い。造成土。
3：黒色土（10YR1.7/1）。第1トレンチの3層と同じ。周堀埋土。
4：黒色土（10YR2/1）。第3トレンチの4層と同じ。周堀埋土。
5：黒色土（10YR2/1）。第1トレンチの4層と同じ。周堀壁面・周堤に由来する流入土か。
6：黒色土（10YR2/1）。5層に類似するが、K-Ah（直径 5cm 以下）を特に多く含む。しまりやや強い。粘性弱い。

土層注記（Tr.22A-A’ ～ G-G’ ライン）
1：黒色土（10YR2/1）。第1トレンチの1層と同じ。表土。
2：黒色土（7.5YR2/1）。K-Ah から K-Ah 下位の黒褐色土ブロック（直径 3cm 以下）を少量含む。しまり・粘性やや強い。溝状遺構。
3：黒色土（10YR1.7/1）。第1トレンチの3層と同じ。周堀埋土。
4：黒色土（10YR2/1）。第3トレンチの4層と同じ。周堀埋土。
5：黒色土（10YR2/1）。第1トレンチの4層と同じ。周堀壁面・周堤に由来する流入土か。
6：黒色土（10YR2/1）。第 21 トレンチの6層と同じ。周堀壁面・周堤に由来する流入土か。

第 21 図　第 21・22 トレンチ（Tr.21・22）実測図（S=1/80）

(18) 第21トレンチ（第21図，図版34）

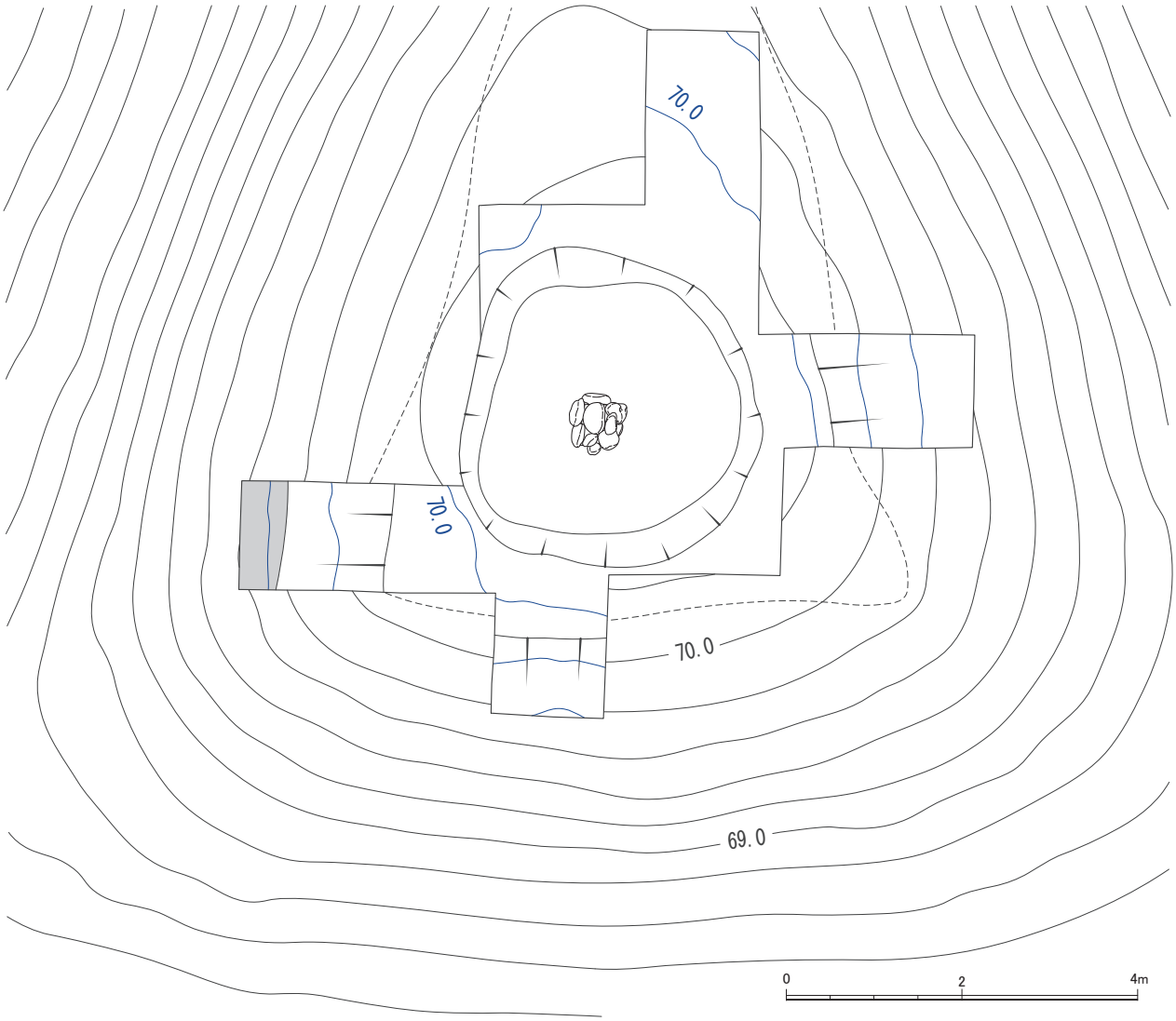
前方部左隅角付近における第２周堀の形状・規模を確認するためのトレンチである。第18トレンチの拡張区北西端部から2.5ｍの間隔を空け、北東～南西方向に設定した。幅は1.0ｍ、長さは8.0ｍである。トレンチ内で第２周堀の両側縁を検出した。残存する第２周堀の上端幅は、トレンチ東壁側で約4.2ｍであった。そして、第２周堀の南側には、周堀に直行するような方向で走る溝状のプランを検出した。これはK-Ah付近の地山ブロックを含んだ黒色土を埋土としており、当初は新しい溝とも考えたが、トレンチ西壁側に幅1.3ｍ、長さ1.0ｍの拡張区を設定して精査したところ、この層の上位にKr-Thを含む黒色土の堆積（４層）が確認できた。これにより、第２周堀が前方部前面側に向かって屈曲していることが判明した。出土遺物は縄文土器・石器、土師器・須恵器、陶磁器類の破片が見られたが、量は非常に少なかった。

(19) 第22トレンチ（第21図，図版35）

第21トレンチにおいて、第２周堀が前方部前面側へ向かって屈曲していることが分かったため、その形状や方向性を確認するために設定した。最初に第21トレンチの拡張区北西端部から3.0ｍの間隔を空け、幅1.3ｍ、長さ2.0ｍで北西～南北方向に設定したが、表土（１層）を除去すると、全面が第２周堀埋土になったため、北西方向と南西方向に順次拡張を行った。最終的には、北西方向に幅80cm、長さ9.0ｍ、南西方向には幅90cm、長さ10.0ｍまで掘り広げ、壁面を中心に精査を行った。その結果、南西方向の拡張区には一貫して周堀埋土が続くが、北西方向の拡張区では梅の木の植樹痕を境として周堀埋土が見られなくなることが分かった。この付近では周堀埋土の堆積が薄く、撹乱の影響もあることから、非常に分かりづらかったが、南西方向に拡張区を設け精査を進めたところ、地山のK-Ahが途切れるラインを検出し、掘り下げると浅い溝状を呈したことから、これを第２周堀と判断した。出土遺物は縄文土器・石器、土師器・須恵器、陶磁器類の破片が見られた。他のトレンチと比較して、黒曜石やチャートの剥片が多く、石鏃も数点見られた。近隣で石器製作が行われた可能性がある。須恵器甕の頸部片（第28図14）を掲載した。

(20) 第23・24トレンチ（第22図）

前方部墳頂の形状や大正調査坑の位置を確認するためのトレンチである。第23トレンチは墳頂中心から南東および南西方向へ、第24トレンチは墳頂中心から北東および南西方向へ、どちらもＬ字形に設定した。幅はどちらも1.3ｍで、長さは第23トレンチが墳頂中心側のコーナーから南東へ5.0ｍ、南西へ4.0ｍ、第24トレンチが北東へ4.5ｍ、北西へ3.0ｍである。ササ等の根が密に入り込んだ表土（１層）を除去すると、K-AhからK-Ah下位黒褐色土付近の地山ブロックが混じった墳丘盛土が露出し、後円部と同様にこの面で精査を行ったところ、大正調査坑の平面プランが部分的に検出できたため、墳頂を中心に東西幅4.0ｍ、南北幅3.5ｍのトレンチを再設定し（第28トレンチ）、引き続き精査を行った。出土遺物は縄文土器、弥生土器の破片などで、古墳に関連するものは認められなかった。



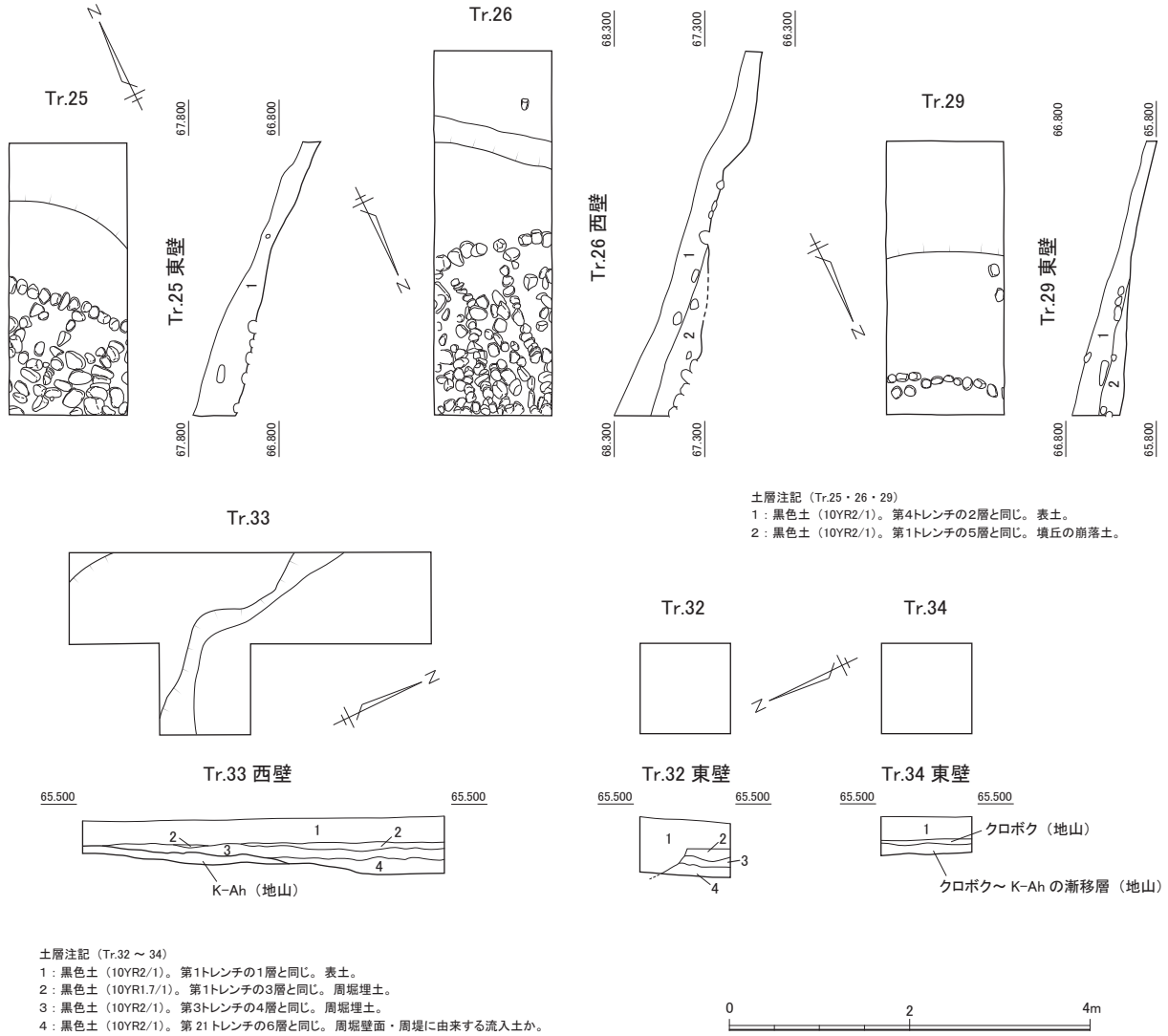
第 22 図　第 23・24・28 トレンチ（Tr.23・24・28）実測図（S=1/80）

(21) 第25トレンチ（第23図，図版36・37）

前方部左側縁において二段目斜面の葺石残存状況を確認するためのトレンチである。第12・24トレンチの間にあり、前方部主軸線と直行するラインを形成する。幅は1.3 m、長さは3.0 mである。葺石の残存状態は良好とは言えないが、基底石列と３箇所の区画列石を確認した。基底石は直径15cm前後のかなり小さな円礫を並べている。区画列石間の心々距離は約45 ～ 55cmであった。二段目斜面の立ち上がりは、確認できた基底石内縁から約90cmまでの部分では、約12°の勾配である。出土遺物は縄文土器の小片が２点のみである。

(22) 第26トレンチ（第23図，図版38・39）

前方部右側縁において二段目斜面の葺石残存状況を確認するためのトレンチである。第23・27トレンチの間にあり、前方部主軸線と直行するラインを形成する。幅は1.3 m、長さは4.0 mである。二段目斜面の中では、葺石の残存状態が最も悪く、基底石列にも乱れがあり、区画列石となる可能性がある場所も２箇所あるが、石の通りは良くない。区画石列だとした場合の心々距離は、狭いところで約40cm、広いところで約65cmである。基底石は反対側の第25トレンチより少し大きい。二

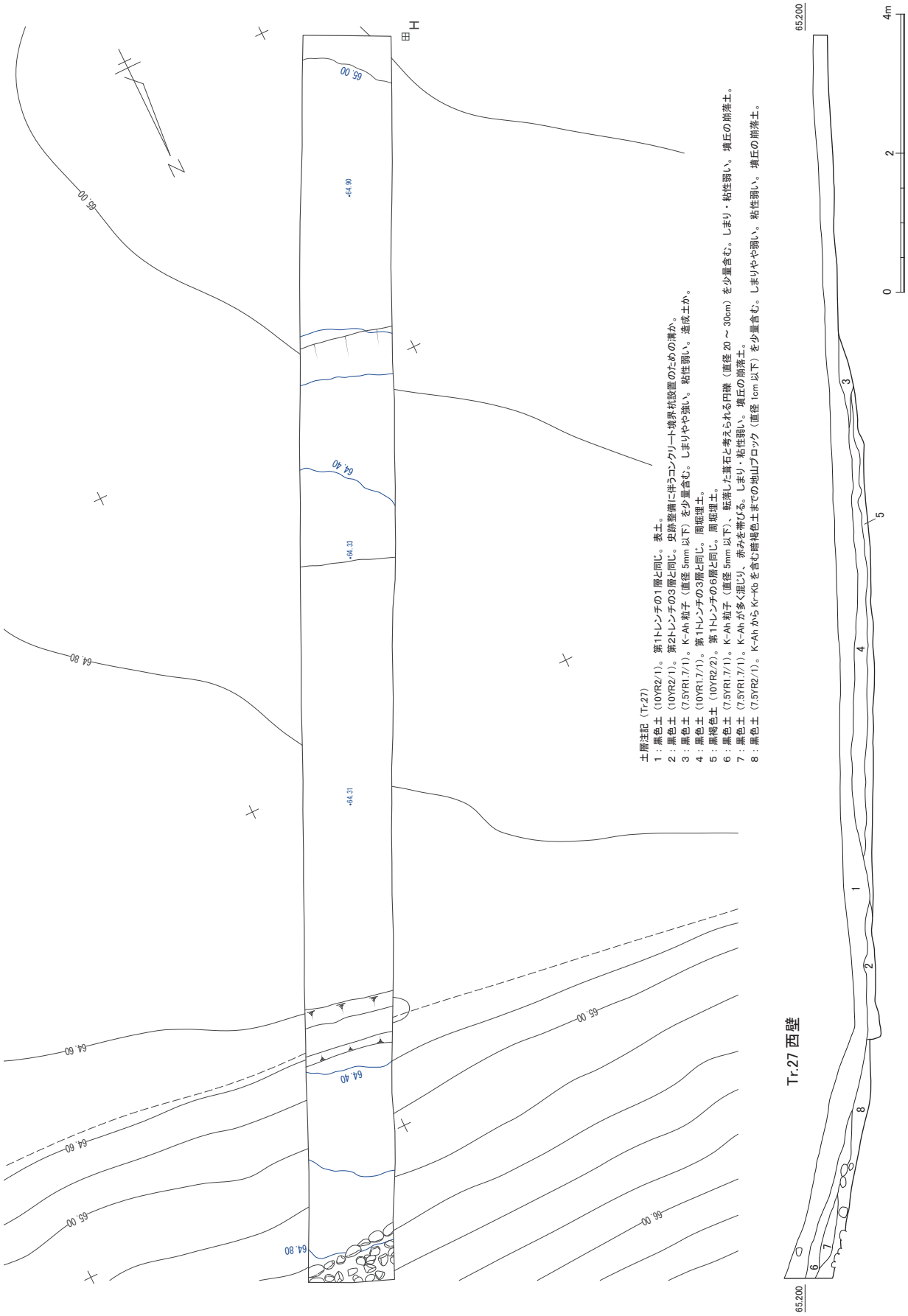


第 23 図　第 25・26・29・32 ～ 34 トレンチ（Tr.25・26・29・32 ～ 34）実測図（S=1/80）

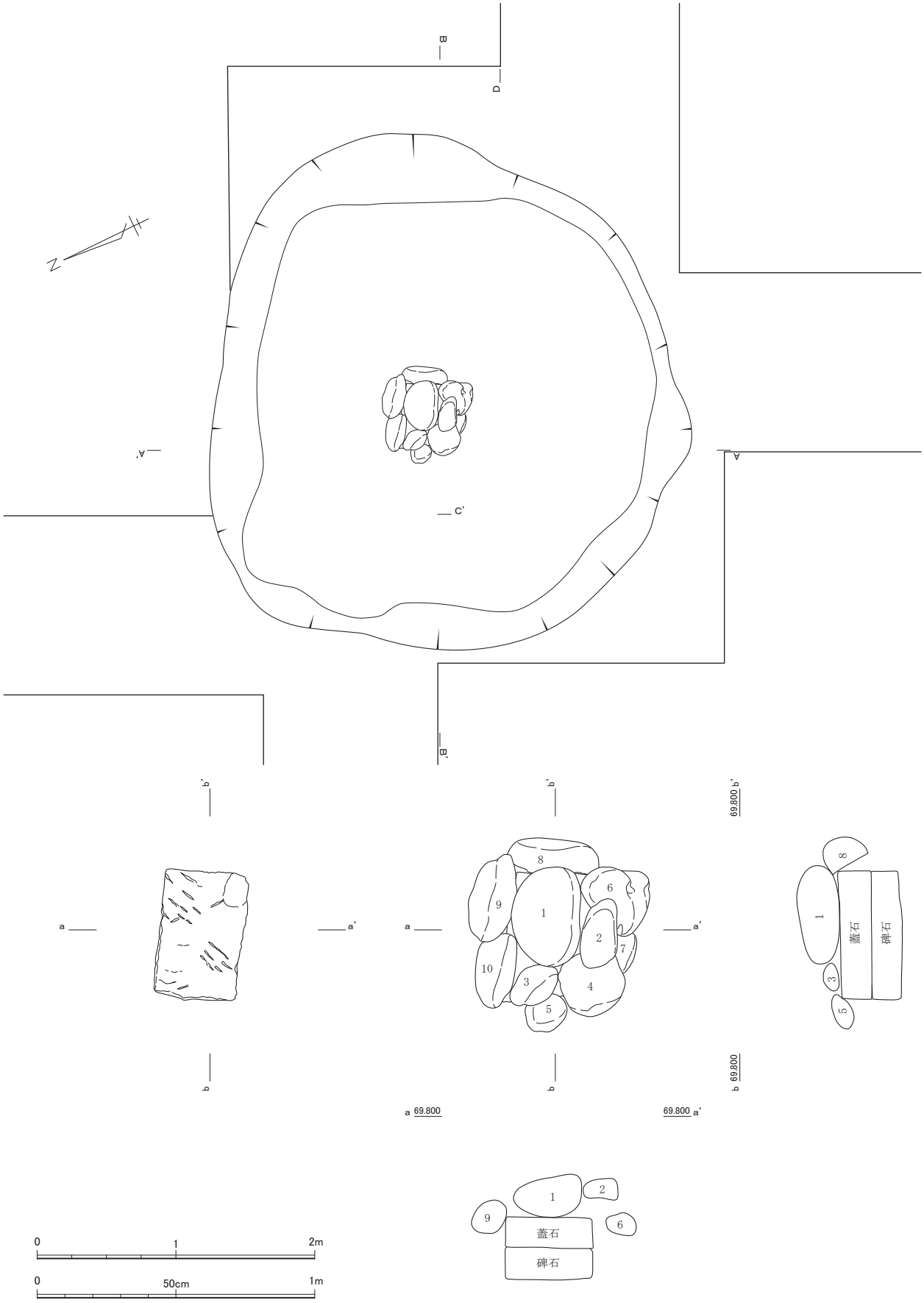
段目斜面の立ち上がりは、基底石内縁から約1.3 mまでは約５°で、その先は約14°の勾配である。出土遺物は縄文土器・石器・弥生土器の破片が少量あった。

(23) 第27トレンチ（第24図，図版40）

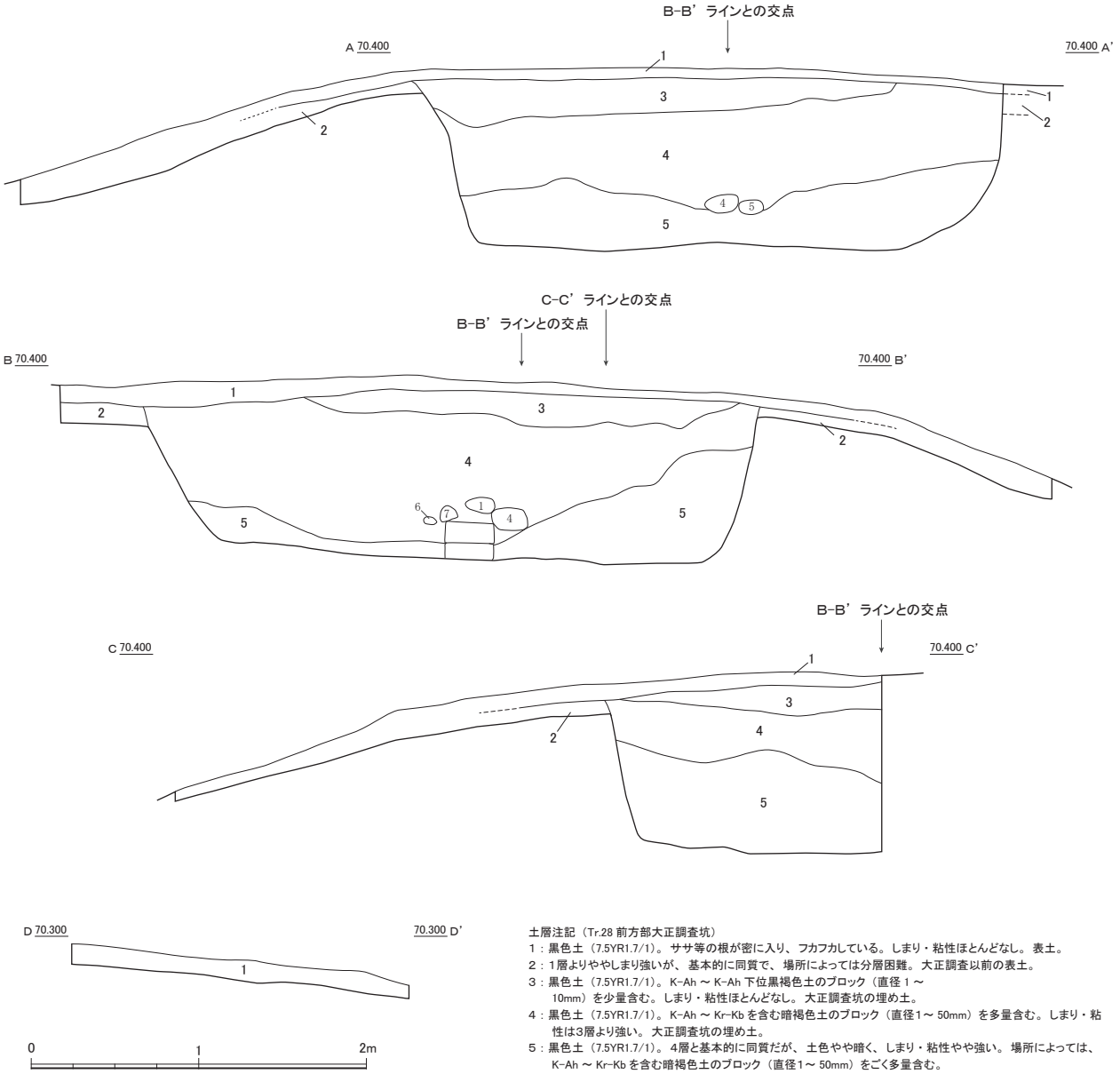
前方部南西側において主軸線と直行する方向で設定した。幅は1.3 m、長さは17.7 mである。表土（１層）を除去すると、墳裾に近い側のトレンチ端部から約13.4 mは黒色土となった。現況の墳裾付近のみコンクリート製のＴ字形標柱を設置するために掘られた溝が検出されたが、その先はKr-Thが含まれており、第１周堀の埋土と判断した。さらにその先では地山のK-Ah下位黒褐色層が露出し、第２周堀の痕跡はなかった。墳丘寄りのトレンチ端部では、葺石が残存しており、基底石や区画列石の一部が確認できた。基底石は直径約20cmの円礫を横使いしている。土層断面を記録したトレンチ西壁側では、基底石外縁から約2.0 mのところで周堀底面となり、底面は基底石外面から約9.5 mのところで立ち上がる。そして、基底石外縁から約12.7 mのところが残存状態での第１周堀上端である。一段目斜面の立ち上がりは、確認できた基底石内縁から約50cmまでの部分では、約15°の勾配である。出土遺物は縄文土器、土師器、陶磁器類、瓦の破片が少量で、須恵器は皆無である。



第 24 図　第 27 トレンチ（Tr.27）実測図（S=1/80）



第 25 図　第 28 トレンチ（Tr.28）前方部大正坑実測図（全体図 S=1/40, 碑石 S=1/20）



土層注記（Tr.28 前方部大正調査坑）
1：黒色土（7.5YR1.7/1）。ササ等の根が密に入り、フカフカしている。しまり・粘性ほとんどなし。表土。
2：1層よりややしまり強いが、基本的に同質で、場所によっては分層困難。大正調査以前の表土。
3：黒色土（7.5YR1.7/1）。K–Ah ～ K–Ah 下位黒褐色土のブロック（直径 1 ～ 10mm）を少量含む。しまり・粘性ほとんどなし。大正調査坑の埋め土。
4：黒色土（7.5YR1.7/1）。K–Ah ～ Kr–Kb を含む暗褐色土のブロック（直径1～ 50mm）を多量含む。しまり・粘性は3層より強い。大正調査坑の埋め土。
5：黒色土（7.5YR1.7/1）。4層と基本的に同質だが、土色やや暗く、しまり・粘性やや強い。場所によっては、K–Ah ～ Kr–Kb を含む暗褐色土のブロック（直径1～ 50mm）をごく多量含む。

第 26 図　第 28 トレンチ（Tr.28）前方部大正調査坑土層断面図（S=1/40）

(24) 第28トレンチ (第22・25・26図, 図版41・42)

第23・24トレンチの項で述べたように、墳頂を中心に東西幅4.0 m、南北幅3.5 mとして設定し、大正調査坑の平面プラン検出を試みた。ササ等の根が密に入り、しまりや粘性での判別が難しかったが、地山ブロックの入り方などを手がかりに東西直径約3.7 m、南北直径約3.4 mの円形に近いプランを認識した。調査坑は『大正報告』では、主軸に並行して縦12尺、横10尺の規模とされ、挿図では長方形に描かれている。形の点で疑問があったが、規模自体はよく合致するため、検出したプランに基づき掘り下げたところ、墳頂面から約70cm下で墳丘中心付近に10点の円礫が集積された状態で検出され、その中から碑石（第29図左）が出土した。碑石・被覆礫の設置方法やそれに伴う埋め戻し過程は、基本的に後円部碑石と同様である。大正調査において深さ5尺以上の掘削が行われ、遺物は全く出土しなかったとされていることや、前方部の形状から大規模な埋葬坑を想定しづらいことなどから、前方部への埋葬はなかったと判断し、碑石の取り上げをもって調査を完了した。出土遺物は縄文土器・石器、弥生土器、土師器の破片で、古墳に関係するものは含まれない。

(25) 第29トレンチ（第23図，図版43・44）

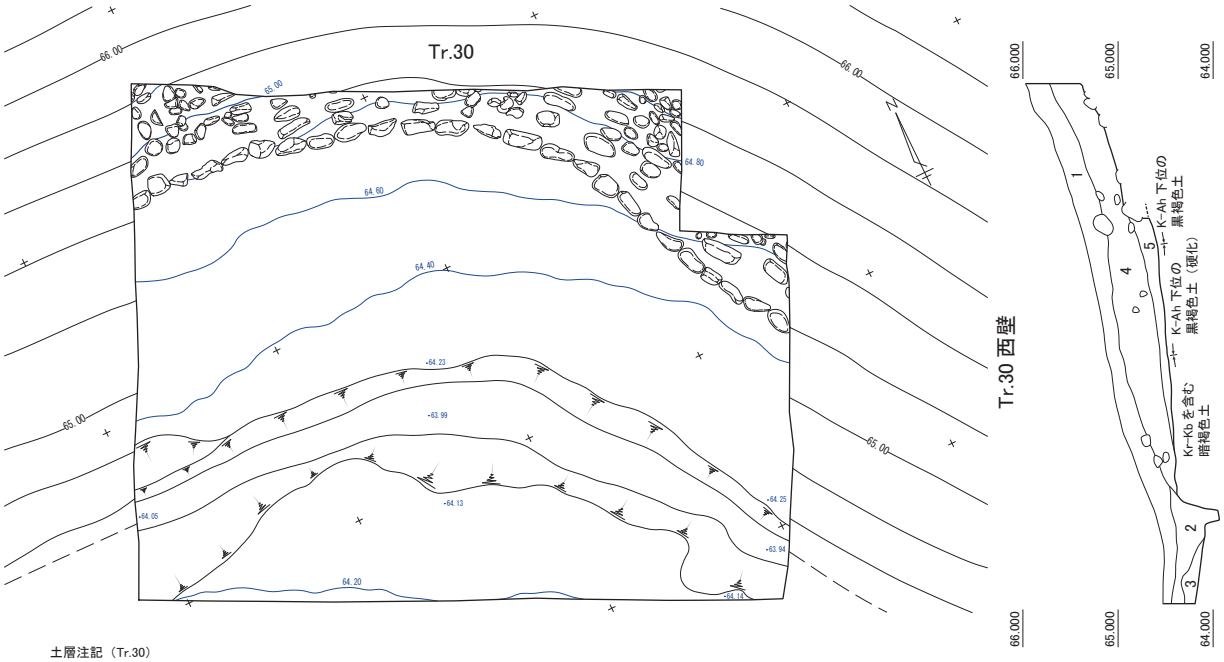
後円部二段目斜面の葺石残存状況を確認するためのトレンチである。第２・８トレンチの間にあり、後円部中央を通り主軸線と直行するラインを形成する。幅1.3 m、長さ3.0 mである。基底石列を検出したが、直径約10cmの小さな円礫を用いている。出土遺物は縄文土器・石器、弥生土器の破片である。

(26) 第30トレンチ（第27図，図版45）

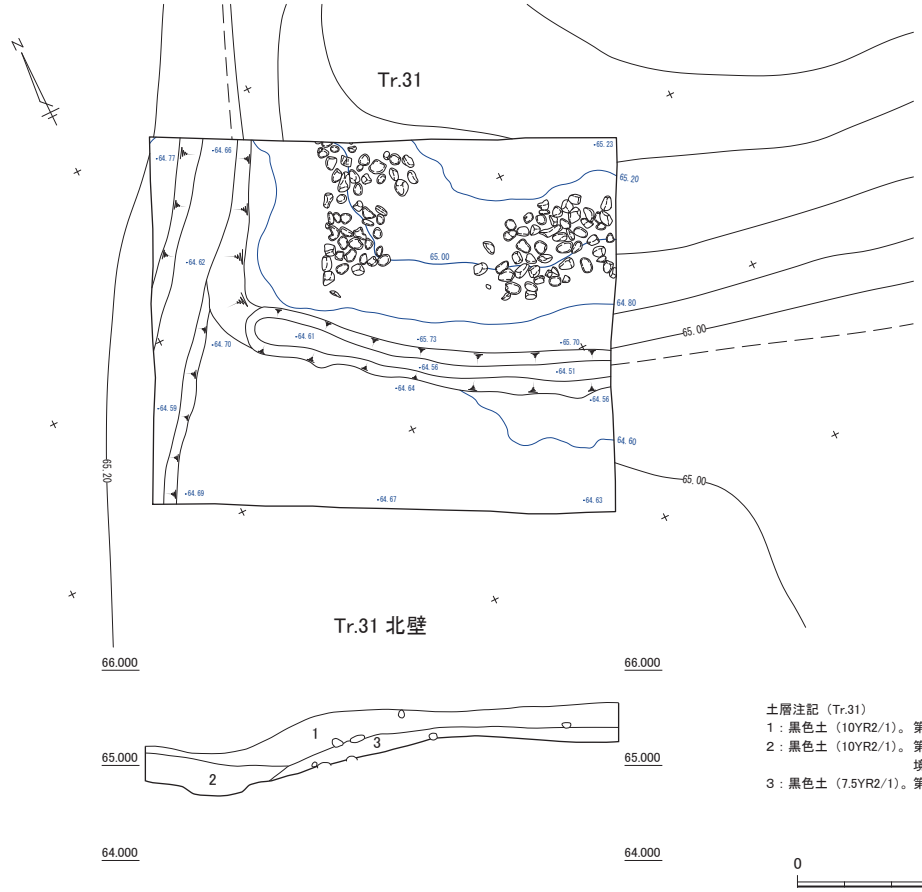
右くびれ部の形状や葺石残存状況を確認するためのトレンチである。表土（１層）を除去すると、現況の墳裾付近ではコンクリート製のＴ字形標柱を設置するために掘られた溝が検出された。その一方、墳丘側には墳丘崩落土（４層）が厚くたまっており、墳丘面から約60cm掘り下げたところで葺石を検出した。当初は南北幅4.0 m、東西幅7.0 mの長方形として設定したが、基底石列の並びを追って、墳丘側に南北幅1.5 m、東西幅6.0 mの拡張区を設けた。精査の結果、基底石列を良好な状態で検出した。基底石は長径20 ～ 40cmの大ぶりな円礫を横使いしており、前方部から後円部へむけてなだらかな曲線を描いている。区画列石はやや不明瞭だが８箇所程度が認められ、列石間の心々距離は約45 ～ 65cmである。トレンチ西壁で土層断面を記録する際に精査したところ、基底石は地山のK-Ah下位黒褐色土より約10cm高い位置にあり、基底石と地山の間には直径５ cm以下のK-AhからK-Ah下位黒褐色土までの地山ブロックを多量に含む黒色土となっていた。この黒色土は墳裾に近づくとKr-Kbを含む暗褐色土の直上に乗っており、この点からも自然堆積と考えにくく、人為的な盛土と判断した。第１トレンチの項で述べたように、葺石は組み合わず個々に墳丘へ埋め込まれたような状態である。墳丘は墳裾付近では基本的に地山削り出しであるが、葺石を地山に埋め込むのではなく、地山の上に薄い盛土を行いつつ葺石が行われている可能性を想定しておきたい。墳丘面に対しやや斜交する方向ではあるが、土層断面を記録したトレンチ西壁付近における一段目斜面の立ち上がりは、基底石内縁から約90cmまでは約18°で、その先は約30°の勾配である。出土遺物は縄文土器、土師器があわせて数片で、非常に少なかった。

(27) 第31トレンチ（第27図，図版46）

前方部右隅角部の残存状態を確認するためのトレンチである。現地の状況や測量図の検討から、右隅角部は大きな改変を受けていないと考えられたため、現況の右隅角部をおよその中心として周堀側をやや広めにとった長方形のトレンチとした。南北幅が4.0 m、東西幅が5.0 mである。表土（１層）を除去すると、現況の墳裾付近ではコンクリート製のＴ字形標柱を設置するために掘られた溝が検出された。また墳丘側には墳丘崩落土（３層）が10 ～ 20cm堆積しており、その下から葺石を検出した。葺石は残存状態が悪く、特に稜線付近は完全に失われている。前面と側縁は石が面的に広がったため本来の葺石と判断したが、基底石や区画列石は明確ではない。ただし、前面側は最も隅角に近い部分の葺石２点が立つように埋め込まれており、前方部前面中央に設定した第13トレンチの基底石列と同じラインに乗ることから、これら２点の葺石を基底石と判断した。出土遺物は黒曜石の剥片が２点のみであった。



土層注記（Tr.30）
1：黒色土（10YR2/1）。第4トレンチの2層と同じ。表土。
2：黒色土（10YR2/1）。第2トレンチの3層と同じ。史跡整備に伴うコンクリート境界杭設置のための溝か。
3：黒色土（10YR2/1）。第2トレンチの6層と同じ。大規模な撹乱。
4：黒色土（7.5YR2/1）。第 27 トレンチの8層と同じ。墳丘の崩落土。
5：黒色土（7.5YR2/1）。K-Ah から K-Ah 下位の黒褐色土までの地山ブロック（直径 5cm 以下）、K-Ah 粒子（直径 1 ～ 2mm）を多量含む。しまりやや強く。粘性弱い。墳丘盛土。



土層注記（Tr.31）
1：黒色土（10YR2/1）。第4トレンチの2層と同じ。表土。
2：黒色土（10YR2/1）。第2トレンチの3層と同じ。史跡整備に伴うコンクリート境界杭設置のための溝か。
3：黒色土（7.5YR2/1）。第 27 トレンチの8層と同じ。墳丘の崩落土。

0　2　4m

第 27 図　第 30・31 トレンチ（Tr.30・31）実測図（S=1/80）

(28) 第32トレンチ（第23図，図版47）

第２周堀の外縁を確認するためのトレンチである。第21トレンチで検出した第２周堀外縁ラインが延びると予想した位置に1.5ｍの間隔を空けて設定した。一辺1.0ｍの正方形である。精査を行ったところ、南半部には周堀埋土が確認できたが、北半部は１層が周堀埋土を切っており、立ち上がりは確認できなかった。出土遺物はなかった。

(29) 第33トレンチ（第23図，図版48）

第２周堀の末端部を確認するためのトレンチである。第22トレンチの南西方向拡張部端から2.0ｍの間隔を空けて設定した。幅は1.0ｍ、長さは4.0ｍである。表土（１層）の厚さが25～30cmで、それを除去するとほとんど全面が黒色土となったが、トレンチ西側隅だけは地山のK-Ahが露出した。黒色土は北半側を中心にKr-Thが見られ（３層）、第２周堀の埋土であると判断した。これを掘り上げると、北から南へ向かって立ち上がる浅い溝状の掘り込みとなった。掘り込み下端の形状と後述する第34トレンチの所見とを勘案し、ここが周堀の末端部であると判断した。出土遺物は縄文土器、土師器、陶磁器類の破片が少量であった。

(30) 第34トレンチ（第23図，図版49）

第33トレンチで検出した溝状の立ち上がりが、第２周堀の末端部であることを確定するためのトレンチである。第33トレンチの延長上に、4.0ｍの間隔を空けて設定した。一辺1.0ｍの正方形である。表土（１層）を約30cm除去すると黒色土となったが、この黒色土は非常に薄く、約５cm掘り下げるとK-Ahとの漸移層となって、最終的にはK-Ahが露出した。各層がほとんど水平に堆積していることから、黒色土も自然堆積のクロボクであり、周堀はここまで延びていないと判断した。出土遺物は須恵器の破片が１点のみであった。

第５節　出土遺物

西都原265号墳の出土遺物は、今回の調査で出土したものの他に、大正調査で出土した遺物の一部が宮崎県立西都原考古博物館に所蔵されている。

（１）今回調査における出土遺物（第28・29図，図版50～60）

発掘調査を実施した計34箇所のトレンチのうち、第８・15・32トレンチを除く31箇所のトレンチから遺物が出土した。出土遺物の総量は、深さ10cmのコンテナで５箱相当である。

265号墳に関連する遺物としては、第11トレンチの大正調査坑埋め土から出土した鉄製品の破片や碧玉製管玉、造り出し上面から出土した土師器、墳丘付近や周堀から出土した須恵器などがあるが、鉄製品や土器類はいずれも細片で、全体像を把握できる資料は皆無であった。須恵器は墳丘北東側のトレンチで多く、南西側のトレンチではほとんど見られなかった。

その他の出土遺物としては、縄文土器・石器、弥生土器、土師器・須恵器、陶磁器、瓦、煙管などがあった。縄文土器のうち周堀内出土のものは早期土器が多く、これは周辺のK-Ah下位黒褐色土に包含されていたものと考えられる。一方、墳丘上のトレンチから出土した縄文土器には、黒色磨研土器など後期～晩期の土器や弥生土器も見られる。石器は剥片のほかに、石鏃・石斧・磨石・石錘などが含まれていた。土師器・須恵器には、７世紀以降に下ると考えられる資料も少量ある。陶磁器は中世から現代にかけてのものがあり、瓦は近代～現代と考えられる。このうち、265号墳に関連する遺物を中心に、土器類23点と玉類２点を図化・掲載した。

土器類（第28図１～23）

１・２は土師器である。１は壺の口縁部で、第６トレンチ造り出し上面からの出土である。胎土には火山ガラスを多く含んでおり、内外面とも丁寧なナデを施す。口径は復元径で8.4cmである。２は高杯の脚部で、やはり第６トレンチ造り出し上面からの出土である。胎土は火山ガラスを多く含み、１と類似する。細く高い脚となっており、内面には下部からヘラ状の工具を差し入れてナデたような痕跡が残る。

３～23は須恵器である。３は杯蓋の口縁部片で、第12トレンチからの出土である。天井部が高く、天井部と体部の境には明瞭な稜を持つ。また、口縁端部には内傾する端面がある。４は杯身の口縁部片で、トレンチ排土をフルイにかけて発見した。立ち上がりが高く、口縁端部内面にわずかなくぼみを作る。５は小さな破片であるが、内外面の色調などから高杯の脚部片と考えた。端部が玉縁状に肥厚し、外面には櫛描波状文を巡らせる。内外面は灰色系の発色であるが、断面はにぶい赤褐色（5YR4/3）を呈する部分がある。

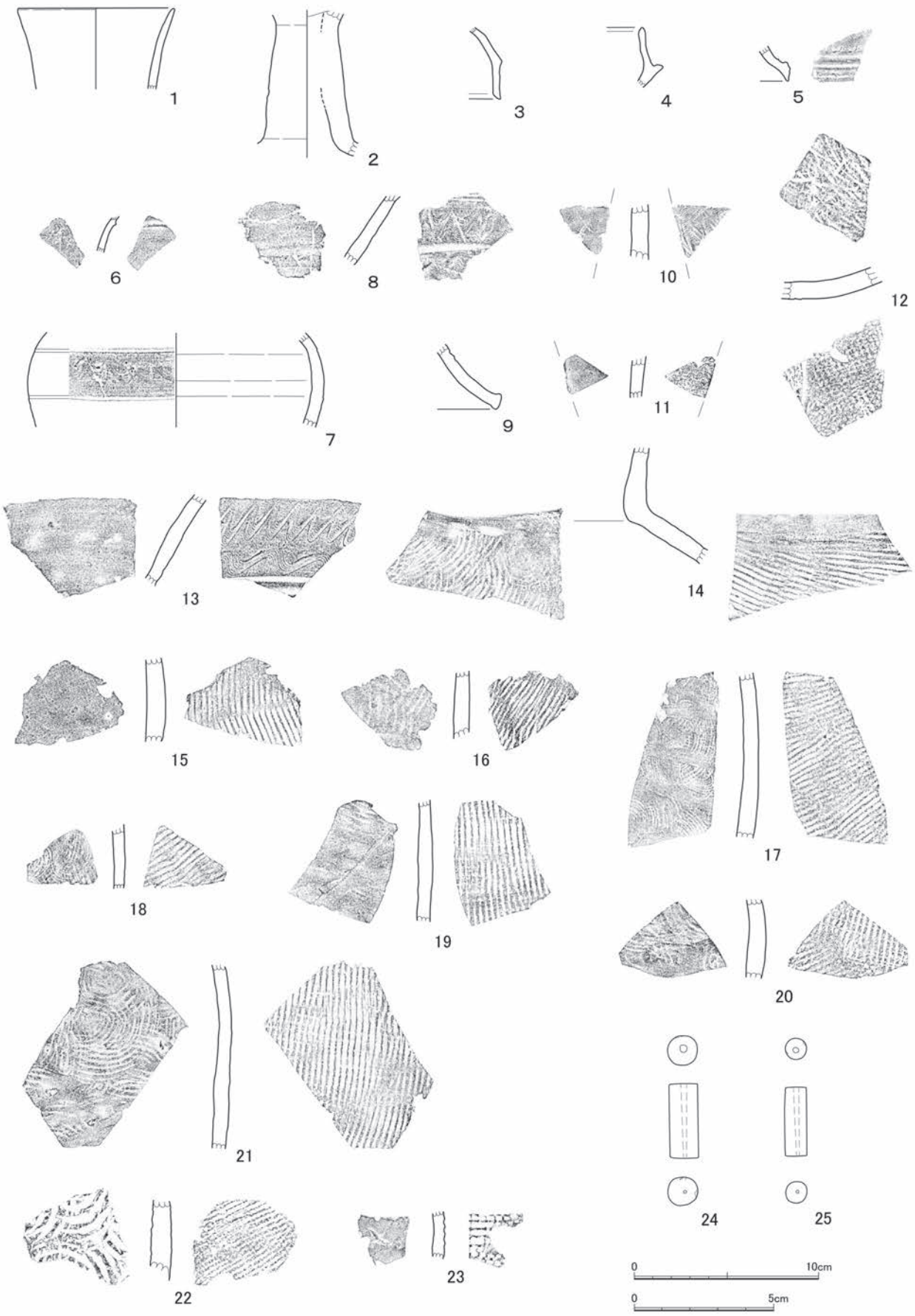
６・７は壷形瓻である。６は口縁部片で、トレンチ排土をフルイにかけて発見した。外面に稜と櫛描波状文がある。内面はほぼ全体に自然釉がかかっている。外面は黒色系だが、断面は褐灰（10YR4/1）を呈する部分がある。７は体部片で、第14トレンチと第18トレンチの接合資料である。胴部最大径は復元径で16.0cmとなり、大型の瓻である。約2.3cmの間隔を空けて施した２本の沈線

で帯状の区画を作り、その中に１条の櫛描波状文を巡らせる。櫛描波状文は13本以上の条線からなり、最も広がる部分では幅が約8.0mmである。波の一単位における縦幅と横幅はともに約1.3cmとなっており、細かく丁寧な印象を受ける。上端付近には自然釉が垂下する部分がある。内外面は灰色系だが、断面は灰褐（7.5YR4/2）を呈する。

８～12は器台と考えられる。８は高杯形器台の杯部体部片で、第６トレンチからの出土である。残存部位では沈線２条と櫛描波状文２条が交互に巡る。また最上部の沈線上端部分には弱い稜がある。櫛描波状文は13本の条線からなり、最も広がる部分の幅は約1.2cmを測る。波の一単位における縦幅は約1.8cm、横幅が約1.4cmであり、縦長の波となっている。９は端部を除く外面のほぼ全面に自然釉がかかっていた痕跡があることから脚部片と考えた。緩やかに外反しており、脚部内面端部のみで接地する。端部は外面が弱く肥厚し、残存部上端付近では２条の沈線が巡る。内面は灰～黒褐系の発色だが、断面は灰褐（7.5YR4/2）を呈する。10は脚部片で、第３トレンチからの出土である。逆三角形状の破片となっているが、表面を見た場合の左側縁は透かし孔の部分であり、透かし孔は正位の三角形か台形と考えられる。表面には残存部だけで２条の櫛描波状文が確認できる。櫛描波状文は11本の条線からなり、最も広がる部分の幅は約1.2cmである。11も脚部片で、第19トレンチからの出土である。10と同様に逆三角形の破片であるが、表面を見た場合の右側縁が透かし孔の部分であり、透かし孔は正位の三角形と考えられる。櫛描波状文は弱く、はっきりしない部分もあるが、９本の条線からなり、残存部分では１条が確認できる。内外面は黒色系だが、断面は灰褐（7.5YR4/2）を呈する。12は高杯形器台の杯部底部片で、第５トレンチからの出土である。内面に同心円当て具痕、外面に擬格子目タタキ痕を残す。内面は当て具痕上から不定方向の粗いナデを施すが、当て具痕をナデ消してしまうことはなく、器面も平滑にはなっていない。脚部の貼り付けにあたっては、接合部に同心円状の沈線を施している。

13は甕か器台の口縁部と考えられる。第12トレンチ４層からの出土である。外面に櫛描波状文２条と沈線１条が確認できる。櫛描波状文は９本の条線からなり、最も広がる部分の幅は約1.2cmである。波の一単位における縦幅・横幅は上段と下段では異なり、上段は縦幅が約2.4cm、横幅が約1.2cm、下段は縦幅が約1.3cm、横幅が約2.7cmである。

14～23は甕である。14は頸部片で第22トレンチからの出土である。肩部側は内面に同心円当て具痕、外面に平行タタキ痕を残す。同心円当て具痕の上からナデを施した部分があるが、大半は当て具痕がそのまま残っている。口縁部側は内外面ともに横位のナデを施す。15は胴部片で、第５トレンチからの出土である。外面には平行タタキ痕が残るが、内面は非常に丁寧にナデており、当て具痕が残らない。内外面は灰色系だが、断面は灰褐（7.5YR4/2）を呈する。16は胴部片で、第３トレンチからの出土である。外面には平行タタキ痕が残るが、内面は同心円当て具痕の上から丁寧にナデており、当て具痕は微かに見える程度となっている。内外面は黄灰色系だが、断面はにぶい褐（7.5YR5/4）を呈する。17は胴部片で、第19トレンチからの出土である。外面には平行タタキ痕を残す。内面は同心円当て具痕が残るが、この17と18は同心円の条線が細かく入り、当て具痕の直径も他より小さい可能性がある。当て具痕の上から粗い不定方向のナデを施すが、当て具痕は部分的に消える程度となっている。内面は灰色系で、外面もやや赤みがかった灰色であるが、断面はにぶ



第 28 図　出土土器・玉類実測図（1～23：S=1/3，24・25：S=1/2）

い褐（7.5YR5/3）を呈する。18は胴部片で、第１トレンチからの出土である。外面に平行タタキ痕、内面に同心円当て具痕が残る。内面は当て具痕の上からナデを施したようで、やや平滑になっているが、当て具痕が消えるほどではない。内外面ともに灰色系だが、断面は灰褐（5YR4/2）を呈する。19は胴部片で、第４トレンチからの出土である。外面に擬格子目タタキ痕、内面に同心円当て具痕が残る。内面は当て具痕の上から不定方向のナデを粗く施す。20は胴部片で、第18トレンチで検出された第２周堀からの出土である。外面に擬格子目タタキ痕、内面に同心円当て具痕が残る。内面は当て具痕の上から不定方向のナデを粗く施す。21は胴部片で、第18トレンチからの出土である。外面に擬格子目タタキ痕、内面に同心円当て具痕が残る。同心円当て具痕の上からナデを施した部分があるが、大半は当て具痕がそのまま残っている。22は胴部片で、第４トレンチからの出土である。粗くざっくりとした印象の胎土で、他の須恵器とは特徴が異なる。外面に擬格子目タタキ痕があり、内面は同心円当て具痕の上からナデ調整を全く行わない。これは今回出土した須恵器甕片の中で唯一の事例である。23は胴部片で、トレンチ排土をフルイにかけて発見した。外面にはっきりした格子目タタキ痕を残す。内面は非常に丁寧にナデており、当て具痕が残らない。これも今回出土した須恵器甕片の中で唯一の事例である。

玉類（第28図24・25）

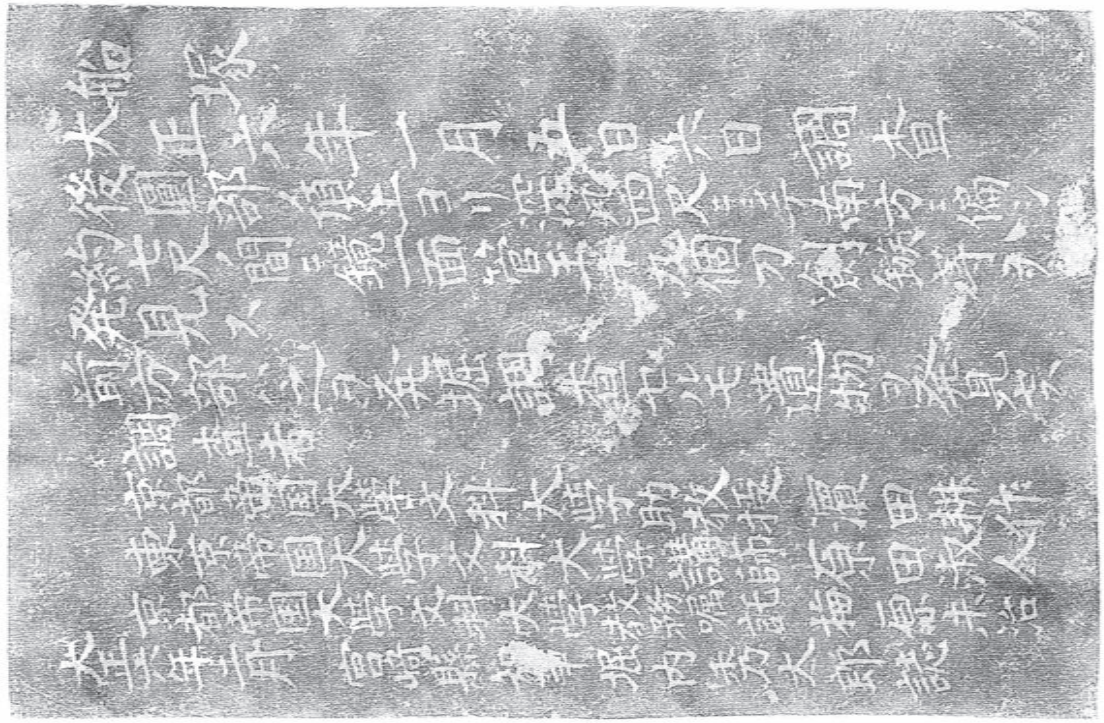
24・25はいずれも碧玉製管玉である。25は第７トレンチにおける大正調査坑検出時に出土し、24は大正調査坑の埋め土をフルイにかけて発見した。大きさは異なるが、色調はほぼ同じで製作技法も類似する。大正調査時に発見された管玉19点と一連のものであったと考える。

鉄製品（図版59）

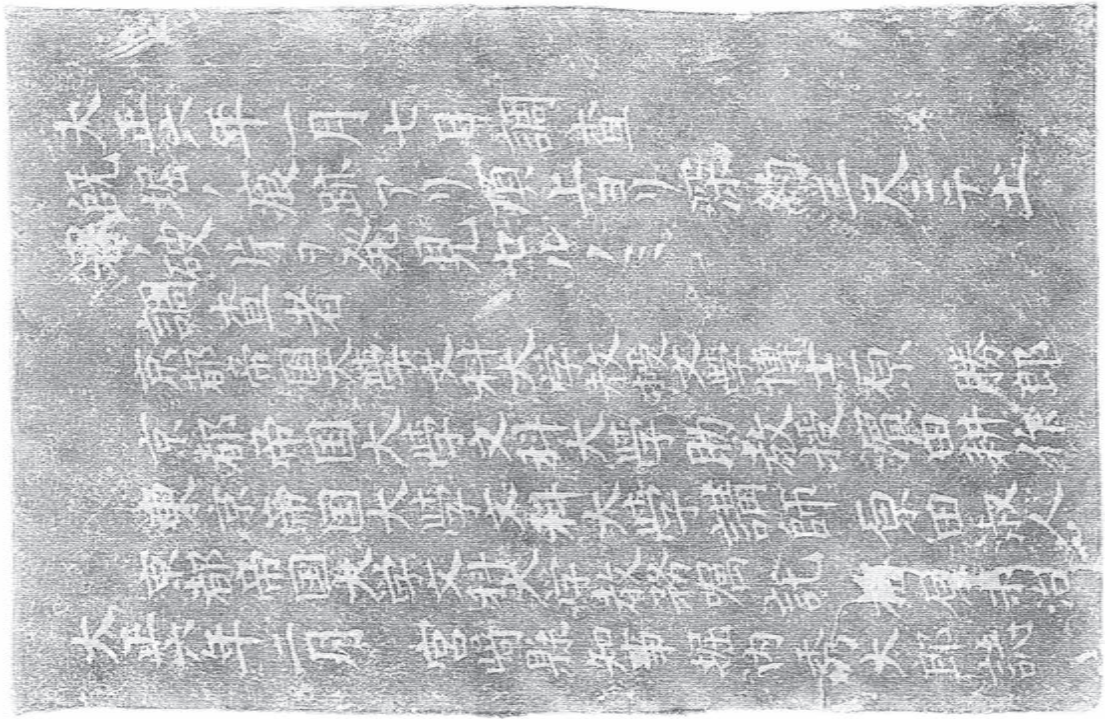
第11トレンチの大正調査坑再発掘時に、底面付近を中心に鉄製品の破片が出土した。ほとんどが細かな破片であったが、刀の柄部分、透かしのある短茎鏃、長頸鏃などのほか、頭部の折れ曲がった釘状のものも含まれていた。刀の破片には柄巻や付着した織物の痕跡も認められる。

碑石（第29図）

前方部と後円部の大正調査坑から１点ずつ、大正調査の経緯を記した凝灰岩製の碑石が出土した。これらは当時の宮崎県知事堀内秀太郎が作成させたものを、1917（大正６）年２月の埋め戻しに際して埋置したものであるが、前方部碑石記載の調査日時や参加者は、『大正報告』の巻頭に記された調査経過や宮崎県教委保管『名勝旧蹟古墳』の中に綴じられた当時の覚書と内容が相違する。後二者によると、１月５日午前に265号墳前で祭典実施後、後円部の調査に着手し、午後１時半頃に遺物を発見した。６日は後円部の調査を継続し、それが終了した後に前方部の調査と後円部墳丘斜面で葺石の調査を行って午後４時終了とあり、原勝郎は６日午後９時に妻町（現西都市の中心市街地一帯）へ到着したので、265号墳の調査には参加しなかった。なぜ事実と異なる記載になったのかは、今のところ明らかにはしえないが、同時代資料であってもその取扱いにあたっては十分な資料批判が必要であることを示している。



後円部碑石



前方部碑石

第 29 図　大正調査坑出土碑石の刻字面拓本（S=1/3）

第２表　西都原 265 号墳出土遺物観察表（土器類①）

No.	出土位置	種別器種	残存部位	調整・文様		色調		胎土	焼成
				外面	内面	外面	内面		
1	Ｔｒ．6造出	土師器壺	口縁部片	丁寧なナデ	丁寧なナデ	明黄褐 10YR7/6	明黄褐 10YR7/6	1mm 以下の黒色鉱物、火山ガラスを多量、2mm 以下の礫、褐色粒子を少量含む	良好
2	Ｔｒ．6造出	土師器高杯	脚部片	ナデ	ヘラ状の工具によるナデ	明赤褐 5YR5/6 橙 7.5YR6/6	明赤褐 10YR7/6	1mm 以下の黒色鉱物、火山ガラスを多量、1mm 以下の褐色粒子を少量含む	良好
3	Tr.12	須恵器杯蓋	口縁部片	天井部：回転ヘラ削り、口縁部：回転ナデ	回転ナデ	灰 5Y5/1	灰 5Y5/1	1mm 以下の黒色・白色粒子を少量含む	良好
4	一括	須恵器杯身	口縁部片	体部：回転ヘラ削り、口縁部：回転ナデ	回転ナデ	灰 5Y5/1	灰 5Y5/1	2mm 以下の黒色・白色・灰色粒子を多量、2mm 以下の石英を少量含む	良好
5	Tr.1	須恵器高杯？	脚部片	回転ナデの後、櫛描波状文	回転ナデ	灰 N4/ 灰 7.5Y5/1	灰 7.5Y4/1	1mm 以下の白色粒子を少量含む	良好
6	一括	須恵器𤭯	口縁部片	回転ナデの後、櫛描波状文	全面に自然釉付着（回転ナデ）	黒 N2/	黒 N2/	1mm 以下の白色粒子を多量、2mm 以下の石英を少量含む	良好
7	Tr.14 Tr.18	須恵器𤭯	体部片	回転ナデの後、沈線と櫛描波状文	回転ナデ	灰 5Y4/1	灰 5Y5/1	1mm 以下の黒色・白色粒子を多量、3mm 以下の石英、灰色・赤褐色粒子を少量含む	良好
8	Tr.6	須恵器器台	杯部体部片	回転ナデの後、沈線と櫛描波状文	回転ナデ	灰 5Y5/1	灰 5Y5/1	1mm 以下の黒色・白色粒子を多量、3mm 以下の石英を少量含む	良好
9	Tr.19	須恵器器台？	脚部片	回転ナデの後、沈線	回転ナデ	褐灰 10YR5/1	黄灰 2.5Y4/1 黒褐 2.5Y3/1	1mm 以下の黒色・白色粒子を少量含む	良好
10	Tr.3	須恵器器台	脚部片	回転ナデの後、櫛描波状文	回転ナデ	灰 5Y5/1	灰 7.5Y4/1	1mm 以下の黒色・白色粒子を多量含む	良好
11	Tr.19	須恵器器台	脚部片	回転ナデの後、櫛描波状文	回転ナデ	オリーブ黒 5Y3/1	オリーブ黒 7.5Y3/1	1mm 以下の黒色・白色粒子を少量含む	良好
12	Tr.5	須恵器器台	杯部底部片	底部：脚部貼り付け後にナデ、体部：擬格子目タタキ痕	同心円当て具痕の上から不定方向のナデ	灰 7.5Y4/1	灰 5Y5/1	1mm 以下の黒色・白色粒子を多量、3mm 以下の石英を少量含む	良好
13	Tr.12 4層	須恵器甕か器台	口縁部片	回転ナデの後、沈線と櫛描波状文	回転ナデ	オリーブ黒 5Y3/1	灰 5Y4/1	1mm 以下の黒色・白色粒子を多量、3mm 以下の石英を少量含む	良好
14	Tr.22	須恵器甕	頸部片	肩部：平行タタキ痕、口縁部：横位のナデ	肩部：同心円当て具痕の上から部分的なナデ、口縁部：横位のナデ	オリーブ黒 7.5Y3/1	灰 5Y5/1	2mm 以下の黒色粒子を多量、5mm 以下の石英を少量含む	良好
15	Tr.5	須恵器甕	胴部片	平行タタキ痕	丁寧なナデ（当て具痕をナデ消したか）	灰 N4/	灰 N4/	1mm 以下の白色粒子を多量、1mm 以下の石英、灰色粒子を少量含む	良好
16	Tr.3	須恵器甕	胴部片	平行タタキ痕	同心円当て具痕の上から丁寧なナデ	黄灰 2.5Y5/1	黄灰 2.5Y4/1	1mm 以下の黒色・白色粒子を多量、3mm 以下の石英、灰色・赤褐色粒子を少量含む	良好

第３表　西都原 265 号墳出土遺物観察表（土器類②）

No.	出土位置	種別器種	残存部位	調整・文様		色調		胎土	焼成
				外面	内面	外面	内面		
17	Tr.19	須恵器甕	胴部片	平行タタキ痕	同心円当て具痕の上から粗い不定方向のナデ	赤灰 2.5YR6/1	灰 5Y5/1	1mm 以下の黒色・白色粒子を多量、3mm 以下の石英、灰色・赤褐色粒子を少量含む	良好
18	Tr.1	須恵器甕	胴部片	平行タタキ痕	同心円当て具痕の上から弱いナデ	灰 N5/	灰 7.5Y4/1	1mm 以下の黒色・白色粒子を多量、3mm 以下の石英、灰色・赤褐色粒子を少量含む	良好
19	Tr.4	須恵器甕	胴部片	擬格子目タタキ痕	同心円当て具痕の上から粗い不定方向のナデ	灰 5Y4/1	灰 5Y4/1	1mm 以下の黒色・白色粒子を多量、2mm 以下の褐色粒子を少量含む	良好
20	Tr.18 ２堀	須恵器甕	胴部片	擬格子目タタキ痕	同心円当て具痕の上からナデ	灰 N4/	灰 N4/	1mm 以下の黒色・白色粒子を多量、2mm 以下の褐色粒子を少量含む	良好
21	Tr.18	須恵器甕	胴部片	擬格子目タタキ痕	同心円当て具痕の上から粗い不定方向のナデ	灰 N4/	灰 N4/	1mm 以下の黒色・白色粒子を多量、2mm 以下の褐色粒子を少量含む	良好
22	Tr.4	須恵器甕	胴部片	擬格子目タタキ痕	同心円当て具痕	灰黄褐 10YR5/2	褐灰 10YR4/1	1mm 以下の黒色・灰色粒子を多量、5mm 以下の石英を少量含む	良好
23	一括	須恵器甕	胴部片	格子目タタキ痕	丁寧なナデ（当て具痕をナデ消したか）	黄灰 2.5Y5/1	黄灰 2.5Y6/1	1mm 以下の黒色・白色粒子を多量、2mm 以下の石英を少量含む	良好

第４表　西都原 265 号墳出土遺物観察表（玉類）

No.	出土位置	材質	種別	各部の大きさ（mm）					重量（g）	色調	備考
				長	幅	厚	孔径（大）	孔径（小）			
24	Tr.11 大正調査坑	碧玉	管玉	26.5	10.5	10.5	2.5	1.0	5.4	濃緑	側面・両端面に研磨痕　赤色顔料付着
25	Tr.7	碧玉	管玉	24.5	8.0	8.0	2.0	1.0	2.9	濃緑	側面・両端面に研磨痕

（２）大正調査における出土遺物（第３図，図版61 ～ 64）

大正調査では、後円部墳頂から変形十字文鏡１、碧玉製管玉19、鉄刀３、鉄鉾１、刀子２、鉄鏃多数が出土しており、『大正報告』には鏡の写真と断面図、管玉３点と鉄鏃７点の実測図が掲載されている。『大正報告』巻頭の調査経過によると、１月８日に遺物整理を行ったとあり、宮崎県教委保管『名勝旧蹟古墳』の中に実測図の浄書や鏡の拓本が残っているため、報告書作成のための整理作業が調査後ただちに行われ、出土遺物は持ち帰られずに宮崎県に残された可能性が高い。このうち管玉、鉄刀、刀子などは所在が不明になっているが、変形十字文鏡、鉄鉾、鉄鏃の一部は、宮崎県総合博物館での所蔵を経て、現在は宮崎県立西都原考古博物館に所蔵されている。鉄鏃は破片まで含めると約20点にのぼるが、宮崎県総合博物館の『西都原発掘75周年点』図録に掲載された写真とも数が微妙に異なっており、全てが265号墳出土遺物であるかの検証は難しい。

第Ⅲ章　総括

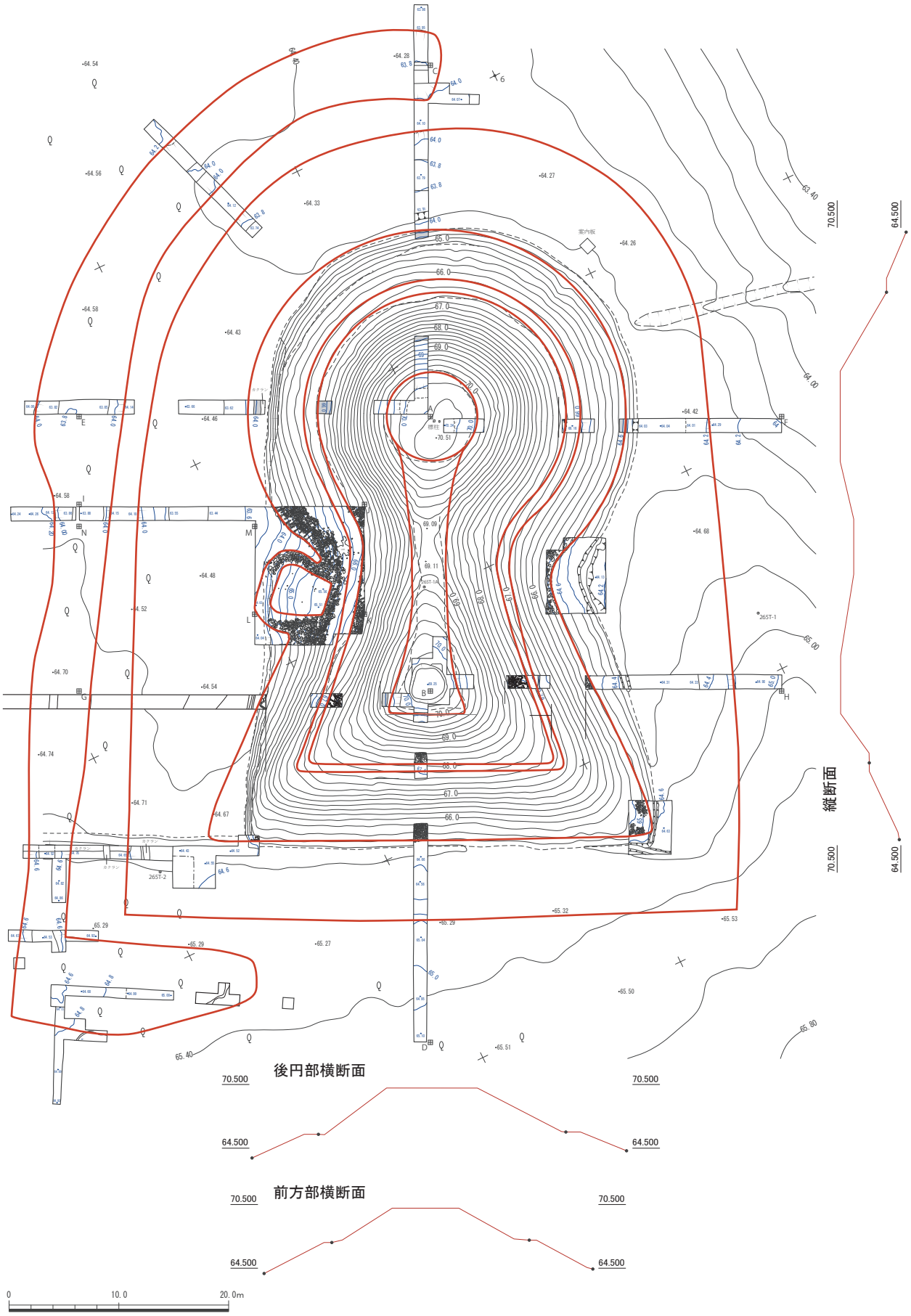
第１節　西都原265号墳の墳丘復元について

今回の調査で得られた所見を元に、265号墳の墳形復元を試みる。まず、墳丘については、葺石が残存しており、墳丘斜面が本来の形状を保っていることが確実なトレンチで、墳丘斜面の勾配を整理してみると、前方部一段目は前面の第13トレンチが、基底石内縁から約60cmまでは約13°で、その先は約25°である。右側縁の第27トレンチでは、確認できた基底石内縁から約50cmまでの部分で約15°である。くびれ部については、右側縁の第30トレンチで基底石内縁から約90cmまでは約18°で、その先は約30°である。また第４トレンチの造り出し基部では、約25°である。つまり、前方部からくびれ部にかけては、基底石から近い部分では15°前後の比較的緩やかな勾配で、その先が25°～30°と急に立ち上がることが分かる。

前方部二段目は前面の第15トレンチが、基底石内縁から約45cmは約６°の勾配でいったん下がり、そこから約18°の勾配となる。左側縁の第25トレンチでは、確認できた基底石内縁から約90cmまでの部分で約12°、右側縁の第26トレンチでは、基底石内縁から約1.3ｍまでは約５°で、その先は約14°の勾配となる。つまり、前面から右側縁にかけては、基底石から近い部分が約－６°～５°の勾配で、その先が15°前後で立ち上がる。左側縁は下がったりしない代わりに、他の面より緩やかな角度でコンスタントに立ち上がる可能性がある。これらの勾配を踏まえつつ、テラスが水平であったとの仮定で作図すると、前方部のテラス幅は約60cmで、くびれ部ではそれより広い約1.1ｍと想定できる。テラスの標高は、前方部前面が約67.6ｍ、両側縁部で約67.1～67.3ｍ、左くびれ部付近で約66.5ｍとなり、徐々に下がってくる。

次に後円部一段目では、第１トレンチでは確認部分で約23°、第２トレンチでは確認部分で約22°と近似した値を示している。後円部二段目は第９トレンチで基底石内縁から約45cmまでは約３°の勾配でいったん下がり、そこから先は約30°の急勾配で立ち上がる。第９トレンチの基底石付近の標高が約66.0ｍで、第29トレンチでは約66.1ｍと近似した値を示すため、テラスが標高約66.0ｍのところで水平に設けられていたと仮定すると、後円部北東側の第７・９・３トレンチのライン、同じく南西側の第８・29・２トレンチのライン、いずれにおいても幅約1.2ｍに復元できる。その場合、墳丘二段目斜面の勾配は、北東側で約35°、南西側で約27°となる。

墳丘規模について整理すると、後円部径が基底石間で約34.4ｍとなる。第１周堀の底面に至った部分での計測は、第２トレンチにおける撹乱の影響が大きく、不可能であった。前方部前面幅は、左隅角が失われており確定できないが、基底石の部分で約40.5ｍと推定される。墳長は基底石間で約55.6ｍ、第１周堀の底面に至った部分では約61.5ｍとなる。造り出しは、前方部・後円部それぞれの基底石が造り出しに向かって屈曲する部分での基底石間の幅が約7.1ｍ、テラスに近い側の上面幅は約3.1ｍ、造り出しの中心軸における残存長は約6.2ｍである。先端部が失われているため、形状を確定することはできないが、残存する基底石の並びからすると、先端に向かうにつれてやや幅



第 30 図　西都原 265 号墳の墳丘復元案（S=1/500）

広になり、角部は丸味を帯びていた可能性が高い。

墳丘周囲を巡る第１周堀は、第13トレンチと第18トレンチで検出したプランの延長が直交することから、盾形周堀になると推定した。現状における第１周堀の幅は、前方部側の主軸上で基底石外縁から約7.3ｍ、後円部側の主軸上で約9.2ｍである。

第２周堀は、後円部のほぼ主軸線上から前方部の左隅角付近までの、およそ墳丘左半部に巡ることが判明した。265号墳周辺では、ほぼ全面にわたって地山のクロボク～K-Ah上半部が失われており、第２周堀も本来の形状を残しているわけではないが、左くびれ部に近い第５・17トレンチでは幅約5.7ｍしかないのに、後円部側に隣接する第10・16トレンチでは幅が約8.1ｍとなり、急に広がっていることからすると、本来の形状としても場所によって幅が異なっていた可能性が高い。第１周堀と比べると、全体的にかなり浅く掘られているが、両側の末端部に向けて徐々に浅くなっており、末端部では自然に消えていくような形状であったと推定される。

第１周堀では外縁側から、第２周堀ではそれとは逆に内縁側から、K-AhやK-Ah下位黒褐色土の地山ブロックを含む土が流入している状況がいくつかのトレンチで観察できたため、第１・第２周堀間に周堤が存在した可能性もあるが、先述したように表層の地山が失われている影響が大きく、検証する手立てがない。

今回の調査によって、西都原265号墳が造り出しと第２周堀を持つことが明らかになった。これらはいずれも、西都原古墳群では女狭穂塚に続く２例目となる。造り出しは左くびれ部のみにあり、第２周堀も墳丘左半部にのみ巡ることから、西都原265号墳の築造に際しては、左側つまり北東側を意識したことが明らかであるが、この方向はすぐに段丘崖面となり、眼下に穂北地域が広がっている。この点は被葬者の出自、性格等を考えるうえで重要な要素である。

第２節　西都原265号墳の築造時期について

今回調査の出土遺物と大正調査の出土遺物について分析を行い、西都原265号の築造時期を推定してみる。

まず土器については、大正調査では出土していなかったが、今回の調査でまとまった量の資料が得られた。全て細片であり、全体像の分かるものはないが、造り出しから出土した土師器は葬送儀礼に関係する可能性が高いため、まずはそれらについて検討し、須恵器については全体的な傾向を整理して年代の絞り込みを試みる。造り出しから出土した土師器小型壺（第28図１）は口縁部が短く、６世紀代に下る可能性は低いと考えられる。高杯の脚部（第28図２）も細長い形態からすると、少なくとも６世紀代には下らないであろう（松永2001、今塩屋・松永2002）。

須恵器は墳丘北東側の周堀などから出土している。古墳の築造や葬送儀礼に伴うと断定できる資料は認められないが、大多数を占める甕片のうち、内面の同心円当て具痕の上からナデ調整を全く行わないものと、外面に格子目タタキ痕を残すものがそれぞれ１点あったのみで、残りは外面が平行タタキ痕か擬格子目タタキ痕を残し、内面は当て具痕を全く残さずにナデ消すもの、微かに同心円当て具痕が残るもの、部分的あるいは不定方向にナデ調整を行い同心円当て具痕の大半は残るもの

に分けられる。このうち、大まかな傾向としては外面に平行タタキ痕を残すもの（第28図15～18）が内面のナデを丁寧に施されており、外面に擬格子目タタキ痕を残すもの（第28図19～21）はややナデ調整が粗いといえそうである。色調に関しても、前者は内外面が黒・灰色系でありながら、断面がエンジ色系を呈するという特徴がある。この色調に関しては、次に述べる壺形瑕とも一致する。

壺形瑕は胴部最大径が16.0cmあり、体部の帯状区画内に櫛描波状文を巡らせる。このような大型の壺形瑕は、TK47型式を境に姿を消すとされている（田辺1981）。杯は数が少なく破片も小さいことから、全体の形状や法量を検討することができない。残存部での特徴を整理すると、杯蓋は天井部が高く、天井部と体部の境に明瞭な稜を持ち、口縁端部には内傾する端面がある。そして、杯身は立ち上がりが高く、口縁端部内面にわずかなくぼみを作るなど、多くの面で類似しており同じ時期に属する可能性は高い。これらが、先述したTK47型式あるいはそれに先立つTK23型式としても矛盾する特徴ではない。つまり、大型の壺形瑕を軸として各器種の特徴を総合すると、TK23～TK47型式に属するものが須恵器の中に多数含まれている可能性は高く、一部はさらに古い時期に位置づけられるのかもしれない。

次に鉄鏃について考えてみる。大正調査で出土した鉄鏃は、『大正報告』によると長頸鏃が多数を占め、大型の鉄鏃が数点のみであったとされる。この大型の鉄鏃は、『大正報告』の実測図と宮崎県立西都原考古博物館所蔵品の特徴が一致するため、所蔵品がまさに大正調査の出土遺物であると考えてよさそうである。型式的には水野敏典氏の分類による圭頭式有茎鏃に該当すると思われ（水野2003）、その一部は鏃身に透かしが入っている。そして、今回の調査では、鏃身が三角形で透かしのある短茎鏃と長頸鏃の破片が出土している。先述したように西都原考古博物館所蔵品が全て265号墳出土遺物とは断定できない状況ではあるが、大枠でいえば長頸鏃を主体とし、それに少量の有茎鏃と短茎鏃が伴うセットと捉えてよいだろう。その場合の年代的位置づけは、和田理啓氏の編年によるⅣ期またはⅤ期に該当すると考えられ、これは概ね須恵器編年のTK23～TK47型式に並行する（和田2007）。

変形十字文鏡は、辻田淳一郎氏によると内行花文鏡のレイアウトを基礎として十字文を付加した倭鏡とされ、雲雷文帯状文の特徴、紐孔が方形を呈する点、内区の細線渦状文の表現などから、古墳時代中期に製作された倭鏡である可能性が想定されている（辻田2015）。

以上、出土遺物の年代観からしても、西都原265号墳の築造時期は6世紀代ではなく、5世紀後葉頃に遡る可能性が非常に高いといえる。また、鉄製品や鏡は埋葬主体部から出土したものであるが、前章で触れたように大正調査で発見された埋葬主体部は墳丘中心から南側へ大きく偏っているため、中央部にもう一つの埋葬主体部が存在する可能性が残されており、その場合は築造時期がさらに遡ることになる。

参考文献

今塩屋毅行・松永幸寿 2002「日向における古墳時代中～後期の土師器　－宮崎平野部を中心として－」『古墳時代中・後期の土師器　－その編年と地域性－』第５回九州前方後円墳研究会発表要旨資料

西都市 2015『西都市史』資料編

西都市 2016『西都市史』通史編上巻

田辺昭三 1981『須恵器大成』　角川書店

辻田淳一郎 2015「西都原古墳群の鏡」『西都原古墳群　総括報告書』平成 24 ～ 26 年度西都原古墳群基礎調査報告　宮崎県教育委員会

津曲大祐 2008「南九州の後期古墳」『後期古墳の再検討』第 11 回九州前方後円墳研究会佐賀大会発表要旨・資料集

中村　浩 編 1995『須恵器集成図録』第１巻近畿編Ⅰ　雄山閣出版株式会社

濱田耕作・梅原末治 1917『宮崎縣西都原古墳調査報告書』

濱田耕作・原田　仁・久保平一郎 1940『日本古文化研究所報告　第十　西都原古墳の調査』　日本古文化研究所

東　憲章 2017『古墳時代の南九州の雄　西都原古墳群』シリーズ「遺跡を学ぶ」121　新泉社

松永幸寿 2001「宮崎平野部における弥生時代後期中葉～古墳時代中期の土器編年」『宮崎考古』第 17 号　宮崎考古学会

水野敏典 2003「古墳時代中期における鉄鏃の分類と編年」『橿原考古学研究所論集』巻 14　八木書店

宮崎県 1997『宮崎県史叢書　宮崎県前方後円墳集成』

宮崎県教育委員会 2012『特別史跡西都原古墳群　地中探査・地下マップ制作事業報告書(1)』

宮崎県教育委員会 2014『西都原 47 号墳　西都原 284 号墳』特別史跡西都原古墳群発掘調査報告書第 11 集

宮崎県総合博物館 1988『西都原発掘 75 周年展』

和田理啓 2007「九州における古墳時代中期の鉄鏃」『九州島における中期古墳の再検討』第 10 回九州前方後円墳研究会宮崎大会発表要旨・資料集

図　版

図版 1　西都原 265 号墳全景（南西から撮影）

2016（平成 28）年度の調査状況。西都原 265 号墳は、台地北縁の段丘崖面に平行するように主軸をとり、前方部を北西、後円部を南東に向ける。樹木がなければ台地下の穂北地域を一望できる立地であり、穂北側からも 265 号墳を見ることができたと考えられる。

図版２　西都原265号墳全景（北東から撮影）

2014（平成26）年度の調査状況。造り出しは左くびれ部のやや前方部寄りに取り付く。写真手前のトレンチ端部では地山の鬼界アカホヤ火山灰（K-Ah）が途切れているが、2015・2016（平成27・28）年度の継続調査によって、この部分は墳丘北半部に巡る第２周堀であることが判明した。

図版３　発掘調査前の状況
（南から撮影）

手前が後円部である。現況でも２段築成の状況がよくわかる。

図版４　発掘調査前の状況
（北から撮影）

図版３の反対方向から撮影。前方部幅が後円部径よりも大きく、高さも後円部とほとんど差がない。

図版５　発掘調査前の状況
（北西から撮影）

左くびれ部が少し盛り上がっている。地中レーダー探査結果によって、ここに造り出しの存在が想定されるに至った。

図版６　第１トレンチ調査状況（東から撮影）

後円部の主軸線上にあたる。墳丘周囲に第１周堀が巡り、墳裾には葺石が一部残る。トレンチ手前側の端部ではK-Ahが途切れているが、2016（平成28）年度に設定した第20トレンチによって、ここが第２周堀の前方部側末端部であることが判明した。

図版７　第１トレンチ墳裾付近（東から撮影）

葺石は組み合わず個々に墳丘へ埋め込まれたような状態である。写真手前は墳丘盛土とともに周堀内へ落ち込んだ葺石である。

図版８　第２トレンチ調査状況（南西から撮影）

後円部南西側で主軸線と直行する。地山は霧島小林軽石（Kr-Kb）を含む暗褐色土である。撹乱の影響が大きく、周堀に関する所見はほとんど得られなかった。

図版９　第２トレンチ墳裾付近
（南西から撮影）

図版８を撮影後に墳丘側へ1.0ｍ拡張したところ、葺石を検出した。現況の墳裾よりもかなり高い位置に基底石があり、撹乱の影響が大きいことを裏付ける。

図版10　第３トレンチ調査状況
（北東から撮影）

第３・４～６・12トレンチを設定した墳丘北側は、前方部から後円部にかけて墳裾が直線的に切られていた。第３トレンチはこの改変の影響が大きく、葺石も基底石は失われていた。第１周堀底面には葺石以外にも、縄文土器や赤化礫がたまっており、付近に集石遺構が埋没していると考えられる。

図版11　第４～６トレンチ調査状況（北から撮影）

造り出しの全景。先端部は欠損する。先端部では残存する葺石の上端付近にK-Ahの堆積があり、造り出しのベースは地山削り出しであることが分かる。

図版12　第４～６トレンチ調査状況（北東から撮影）

葺石は墳丘一段目斜面から造り出し斜面まで一連のものとして施されており、上述した土層堆積状況も勘案し、造り出しが当初から墳丘と一体的に造られたと判断した。

図版13　第９トレンチ調査状況（北西から撮影）

後円部二段目斜面の葺石がよく残っている。基底石列と区画列石以外は礫の密度が低く、まばらに埋め込まれている。

図版14　第11トレンチ大正調査坑検出状況（南東から撮影）

直射日光の下では墳丘盛土と大正調査坑埋め土の区別がつかないため、曇天時や日没直前の時間を利用して精査を行った。赤テープを貼った竹串を繋いだラインが大正調査坑の平面プランである。墳頂の凝灰岩製標柱は、太い方が大正調査終了時、細い方が史跡指定時に立てられた。

図版15　第11トレンチ碑石被覆礫検出状況（南東から撮影）

図版14とほぼ同一の撮影位置。碑石を調査坑の中央に埋置し、その直上に標柱が立てられた。

図版16　第11トレンチ碑石被覆礫検出状況（南東から撮影）

被覆礫のアップ。隙間から碑石の蓋石が見えている。蓋石と被覆礫の底面レベルが揃うことから、碑石本体が隠れる高さまで埋め戻した後に被覆礫を置いたことが分かる。

図版17　第11トレンチ碑石検出状況（南東から撮影）

被覆礫を置く段階では、このような状況であったと考えられる。

図版18　第11トレンチ碑石・鉄製品検出状況（西から撮影）

碑石は本体まで掘り出した状態。画面右側は大正調査で埋葬主体部が発見された箇所で、赤テープを貼った竹串のところには、鉄刀・鉄鏃の破片があった。

図版19　第12トレンチ調査状況（北東から撮影）

2014（平成26）年度の第５・10トレンチで検出されていた落ち込みが第２周堀であるのかを確定するため、26.0 mと長めに設定した。

図版20　第12トレンチ墳裾付近（東から撮影）

葺石が残存しており、基底石や区画列石の一部が確認できた。基底石はくびれ部付近と同様に長径約40cmの大ぶりな円礫を横使いしている。

図版21　第12トレンチ第２周堀検出状況（南東から撮影）

トレンチ中央の樹木付近に浅い溝状遺構があり、これを第２周堀と判断した。

図版22　第13・15トレンチ調査状況（北西から撮影）

前方部の主軸線上にあたる。墳丘中腹が第15トレンチ、墳裾が第13トレンチである。第13トレンチでは第１周堀の外側が地山のK-Ahとなり、第２周堀が前方部前面中央までは延びないことが判明した。

図版23　第13トレンチ葺石検出状況（北西から撮影）

基底石は小ぶりな円礫を立てるように埋め込んでいる。区画列石は明瞭なものがトレンチ中央よりやや南寄りに１箇所あり、北側にもう１箇所可能性のある部分が認められた。区画列石は主軸線に対してやや南東に偏向しながら上っている。

図版24　第15トレンチ葺石検出状況（北西から撮影）

二段目斜面の基底石・区画列石の一部を確認した。基底石は小ぶりな円礫を立てるように埋め込んでいる。トレンチのほぼ中央に区画列石が１箇所あるが、その左右で葺石の密度が異なる。左側は比較的密に石が埋め込まれ、右側はまばらである。

図版25　第14トレンチ調査状況（北東から撮影）

画面奥は現況墳丘の左隅角部分にかかるように設定した一辺2.0ｍの正方形だが、墳丘が大きく削られていることが判明した。手前の一辺4.0ｍの正方形では、右手側に第１周堀の埋土が薄く残っていた。トレンチ底面はK-Ah下位の黒褐色土である。この層は縄文時代早期の包含層で集石遺構に由来する赤化礫が顔を出している。

図版26　第10・16トレンチ調査状況（北東から撮影）

後円部北東側において第２周堀の形状や規模を確認するためのトレンチである。2014（平成26）年度に設定した第10トレンチを北東側へ5.0ｍ延長し、第10トレンチも再発掘して第２周堀の全幅を確認した。画面奥側が第10トレンチである。

図版27　第17トレンチ調査状況（北東から撮影）

第５トレンチの延長上に設定した。このトレンチの調査により、第５トレンチで検出されていた第２周堀の外縁が確定した。

図版28　第18トレンチ調査状況（北東から撮影）

前方部左隅角付近における第１・２周堀の形状・規模を確認するため、第14トレンチを北東方向に延長する形で設定した。残存状態は良くなかったが、画面左奥で第１周堀、画面手前で第２周堀を確認した。

図版29　第18トレンチ第２周堀検出状況（南東から撮影）

第２周堀のアップ。残存状態での第２周堀の上端幅は約3.9 mである。画面左奥の拡張区では霧島御鉢高原スコリア（Kr-Th）を含む黒色土（周堀最上層）を確認し、第２周堀がさらに北西方向へと延びていることが分かった。

図版30　第19トレンチ調査状況（東から撮影）

後円部の墳頂中心を通り、主軸線と45°の角度で交わるラインに沿って設定した。トレンチ中央付近から手前にかけて第２周堀が存在するが、末端部に近いこともあり、非常に浅い溝状となっている。

図版31　第19トレンチ調査状況（西から撮影）

図版30とは反対方向から撮影したものである。手前側の第１周堀と奥の第２周堀とでは、底面に約25cmの標高差がある。

図版32　第20トレンチ調査状況（東から撮影）

第１トレンチ端部において検出された落ち込みが、第２周堀であることを確定するためのトレンチである。第１トレンチを南東側へ5.5 m延長し、第１トレンチも3.5 m分を再発掘した。画面奥で南西方向に折れている部分は、第２周堀の末端部を確認するために設定した拡張区である。

図版33　第20トレンチ第２周堀検出状況（北西から撮影）

第２周堀の延長方向を確認するため、トレンチ西端部から南側に一辺2.0 mの拡張区（画面右側）を設定して精査したところ、周堀の末端部が確認できた。深さはほとんど無く、K-Ahも掘り抜いていない。

図版34　第21トレンチ調査状況（北東から撮影）

第２周堀の南側（画面左奥）で周堀に直行するような方向で走る溝状のプランを検出したが、精査の結果、この部分も周堀埋土であったため、第２周堀が前方部に向けて屈曲していることが判明した。

図版35　第22トレンチ調査状況（北西から撮影）

第２周堀が前方部前面側へ向けて屈曲した後の形状や方向性を確認するために設定した。南西側に設けた拡張区（画面中央付近）の中で、第２周堀の北縁ラインを検出した。

図版36　第25トレンチ調査状況（東から撮影）

前方部左側縁において二段目斜面の葺石残存状況を確認するために設定した。第12・24トレンチの間にあり、前方部主軸線と直行するラインを形成する。

図版37　第25トレンチ葺石検出状況（西から撮影）

葺石の残存状態は良好とは言えないが、基底石列と３箇所の区画列石を確認した。基底石は直径15cm前後のかなり小さな円礫を並べている。

図版38　第26トレンチ調査状況（西から撮影）

前方部右側縁において二段目斜面の葺石残存状況を確認するために設定した。第23・27トレンチの間にあり、前方部主軸線と直行するラインを形成する。

図版39　第26トレンチ葺石検出状況（西から撮影）

二段目斜面の中では、葺石の残存状態が最も悪く、基底石列にも乱れがある。区画列石となる可能性がある場所も２箇所あるが、石の通りは良くない。

図版40　第27トレンチ調査状況（南西から撮影）

前方部南西側において主軸線と直行する方向で設定した。墳頂部に見えるのが第23トレンチ、墳丘中腹が第26トレンチである。第１周堀を検出したほか、墳裾には葺石が残存しており、基底石や区画列石の一部が確認できた。

図版41　第28トレンチ碑石被覆礫検出状況（南東から撮影）

後円部と同様に大正調査坑のほぼ中央に碑石が埋置され、円礫で被覆されていた。

図版42　第28トレンチ碑石検出状況（南東から撮影）

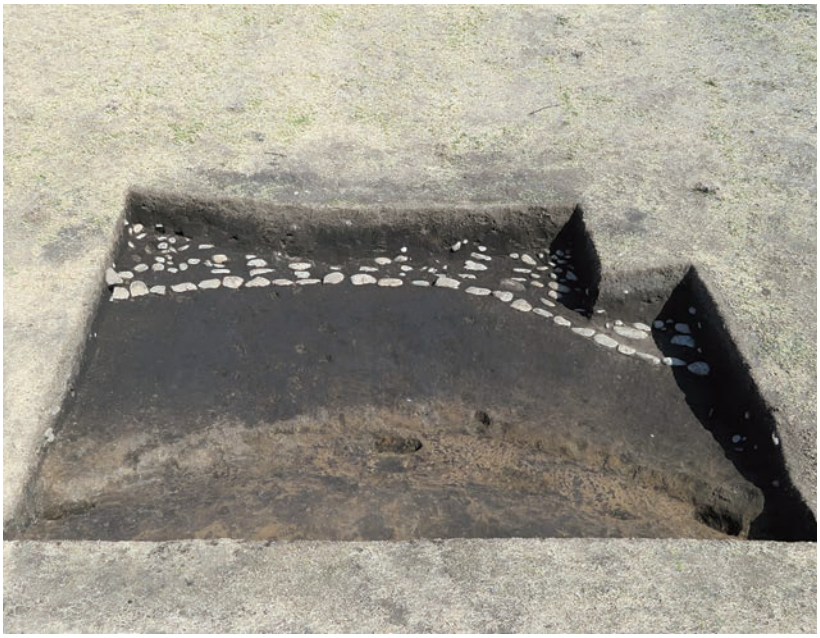
図版41とほぼ同一の撮影位置。碑石は文字頭を前方部前面側（画面奥）に向けて置き、同大の蓋石をぴったり合わせてあった。

図版43　第29トレンチ調査状況（南から撮影）

後円部二段目斜面の葺石残存状況を確認するために設定した。第２・８トレンチの間にあり、後円部中央を通り主軸線と直行するラインを形成する。

図版44　第29トレンチ葺石検出状況（南から撮影）

基底石列は、直径約10cmの小さな円礫を用いている。



図版45　第30トレンチ調査状況（南西から撮影）

右くびれ部に設定し、基底石列を良好な状態で検出した。基底石は長径20～40cmの大ぶりな円礫を横使いしており、前方部から後円部へむけてなだらかな曲線を描いている。

図版46　第31トレンチ調査状況（南西から撮影）

前方部右隅角部に設定した。葺石は残存状態が悪く、特に稜線付近は完全に失われている。ただし、前面側（画面左側）では最も隅角に近い部分の葺石２点が立つように埋め込まれており、前方部前面中央に設定した第13トレンチの基底石列と同じラインに乗ることから、これら２点の葺石を基底石と判断した。

図版47　第32トレンチ調査状況（北西から撮影）

第２周堀の外縁を確認するために設定した。南半部（画面右側）には周堀埋土を確認できたが、北半部（画面左側）は１層が周堀埋土を切っており、立ち上がりは確認できなかった。

図版48　第33トレンチ調査状況（北から撮影）

トレンチ全体が北（画面手前）から南（画面奥）へ向かって立ち上がる浅い溝状の掘り込みとなった。掘り込み下端の形状と後述する第34トレンチの所見とを勘案し、ここが周堀の末端部であると判断した。

図版49　第34トレンチ調査状況（北西から撮影）

表土の下にある黒色土層以下は自然堆積と考え、周堀はここまで延びていないと判断した。

図版50　出土遺物（土師器）

壺の口縁部（第28図１、以下も同図の番号）と高杯の脚部（２）。どちらも造り出しの上面で出土した。

図版51　出土遺物（須恵器）

高杯の脚部と考えられる破片（５）、杯蓋（３）、杯身（４）、甕（６・７）。

図版52　出土遺物（須恵器）

器台と考えられる破片（８～12）。

図版53　出土遺物（須恵器）

甕か器台と考えられる口縁部片(13) と甕の頸部片 (14)。14は肩部以下に平行タタキ痕を残す。

図版54　出土遺物（須恵器）

図版53の裏面。14は同心円当て具痕の上から一部にナデ調整を行うが、当て具痕はナデ消さない。

図版55　出土遺物（須恵器）

甕の胴部片 (15 ～ 18)。いずれも平行タタキ痕を残す。

図版56　出土遺物（須恵器）

図版55の裏面。同心円当て具痕の上からナデ調整を行う。15は当て具の痕跡がほとんど確認できない。

図版57　出土遺物（須恵器）

甕の胴部片（19～23）。19～22は擬格子目タタキ痕を残す。23は粗大な格子目タタキ痕であり、古代に下る可能性が高い。

図版58　出土遺物（須恵器）

図版57の裏面。19～21は同心円当て具痕の上からナデ調整を行う。22は同心円当て具痕が無調整のまま残る。

図版59　出土遺物（鉄製品）

刀の柄部分、透かしのある短茎鏃、長頸鏃などのほか、頭部の折れ曲がった釘状のものも含まれる（下段中央の２点）。刀の破片には柄巻や付着した織物の痕跡も認められる。

図版60　出土遺物（玉類）

大正調査坑の埋土から、碧玉製管玉２点が出土した（24･25）。大正調査で出土した管玉19点と一連のものであったと考えられる。

図版61　大正調査出土遺物（鉄製品）

大正調査の出土遺物として宮崎県立西都原考古博物館に収蔵されている。鉄鉾、鉄鏃である。

図版62　大正調査出土遺物（鉄製品）

大正調査の出土遺物として宮崎県立西都原考古博物館に収蔵されている。鉄鏃は比較的大型の有茎鏃や長頸鏃がある。

図版63　大正調査出土遺物（銅鏡）

大正調査の出土遺物として宮崎県立西都原考古博物館に収蔵されている。倭製鏡で「変形十字文鏡」と通称されている。鏡背面全体に赤色顔料が付着している。

図版64　大正調査出土遺物（銅鏡）

図版63の鏡面側である。広い範囲に織物の付着痕が認められる。

報 告 書 抄 録

ふりがな	さいとばる265ごうふん
書名	西都原265号墳
副書名	
巻次	
シリーズ名	特別史跡　西都原古墳群発掘調査報告書
シリーズ番号	第14集
編著者名	堀田孝博
発行機関	宮崎県教育委員会(宮崎県立西都原考古博物館)
所在地	〒880-8502　宮崎県宮崎市橘通東1丁目9番10号 (〒881-0005　宮崎県西都市大字三宅字西都原西5670)
発行年月日	2019(平成31) 年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地		コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
さいとばる 265ごうふん 西都原 265号墳	さいとしおおあざどうじまる あざしんたて 西都市大字童子丸 字新立674番・675番		45208		32° 7'38" 付近	131° 23'17" 付近	2014.11.5 ～ 2015.3.31	225㎡	史跡整備 関連
							2015.11.5 ～ 2016.3.31	150㎡	
							2016.11.22 ～ 2017.3.31	248㎡	
	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物			特記事項	
	古墳	古墳	前方後円墳 (葺石・周堀)		土師器・須恵器・碧玉製管玉・鉄製品 縄文土器・縄文石器・陶磁器・碑石			葺石や周堀が良好な状態で検出された	

要　約	西都原265号墳は「船塚」の通称で知られており、西都原台地最北端のグループである第3支群に位置する唯一の前方後円墳である。1917(大正6) 年1月に実施された発掘調査で、後円部墳頂から変形十字文鏡、碧玉製管玉、鉄刀、鉄鉾、刀子、鉄鏃が出土した。出土遺物の内容や前方部が大きく発達した墳形などから、西都原古墳群内で2基しかない後期古墳として理解されてきたが、地中レーダー探査の結果、左くびれ部に造り出しの存在が想定され、築造時期が古墳時代中期に遡る可能性が生じた。発掘調査の結果、左くびれ部に造り出しを確認し、墳丘左半部を中心に第2周堀が巡ることも明らかになった。出土遺物の検討から、築造時期は6世紀代ではなく、5世紀後葉頃に遡る可能性が高まった。

特別史跡　西都原考古群発掘調査報告書　第14集

西都原265号墳

2019年3月

発　行　宮崎県教育委員会

〒880-8502　宮崎県宮崎市橘通東1丁目9番10号

編　集　宮崎県立西都原考古博物館

〒881-0005　宮崎県西都市大字三宅字西都原西5670番

TEL 0983 (41) 0041　　FAX 0983 (41) 0051

印　刷　株式会社KPクリエイションズ

〒880-0803　宮崎県宮崎市旭1丁目6-25

TEL 0985 (24) 4155　　FAX 0985 (24) 1512